

ARIA The PIACERE 3 その素敵な出会いの先に

neo venetiatti

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アリシアからARIAカンパニーを引き継いで一年が過ぎていた。灯里はいまだ後輩を迎い入れる気持ちにはなれないでいた。そんな時、灯里のシングル時代のゴンドラに乗ったという女性が現れる。彼女は灯里の心を見透かしたような言葉を投げ掛けてきて・・・
アニメ「ARIA」シリーズの二次小説です。

灯里を中心にして、アリシアから引き継いだその後という設定で描いています。

オリジナルにない人物が登場します。予めご了承下さい。

最終話（番外編）は、出演者による座談会のトークよりアイデアを拝借致しました。

目次

第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
144	138	132	126	120	114	108	102	96	92	86	81	77	69	59	52	45	40	34	29	19	14	8	1

番外編	第40話	第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	第26話	第25話
226	222	217	209	205	202	198	190	185	181	177	173	168	164	159	153	148

第1話

ARIAカンパニーの朝は、その海に面したカウンターのシャッターを開けるところから始まる。

心地いい潮風が流れ込んできて、きらめく海の景色とともに、水無灯里の顔には、思わず笑顔がこぼれてくる。

そんなときはきまって、ARIA社長が灯里のそばでうれしきっぱいの表情になっている。

「ぶいにゆーい！」

「おはようございます、ARIA社長！今日も一日よろしくお願いします！」

それはいつもの朝。そしていつもの時間。

店内の掃除を手早くすませると、キッチンで朝食の支度に取りかかる。

テーブルでは、待ちきれないARIA社長がイスを前後に揺らしながら鼻歌をく口ずさんでいる。

「ARIA社長、出来ましたよー！」

「ばいばいばいばい！」

ARIA社長は灯里の作った特製オムレツを口いっぱいに頬張り、ケチャップを口のまわりに付けまくっていた。

すると、突然喉をつまらせ、悶絶の表情で苦しみ始めた。

「ARIA社長ー！大丈夫ですかー？」

灯里がコップの水を、焦るARIA社長に飲ませた。

「ぶいにゆー」

「心配しましたよー、ARIA社長ー！もつとゆっくり食べないとダメですよー」

ARIA社長は安堵の表情と同時に、ぱつが悪そうに照れて見せた。

その時だった。

「ただいまー！いま戻りましたー！」

カウンターの外から明るく弾んだ声が聞こえてきた。

「えっ？」

灯里は驚いてその声の方に顔を向けた。

そこには、ARIAカンパニーの制服を着た、まだ幼さが残る女の子が立っていた。

「ARIA社長、ただいまー!」

「ばいにゆーい!」

ARIA社長は当たり前のように返事していた。

「えっ、ちよつと、ARIA社長?」

啞然としている灯里を見て、その女の子は申し訳なさそうな顔をしていた。

「すみません、灯里さん。今朝起きたらとっても気持ちが悪かったの
で、早朝練習に行ってきました!」

「はあ・・・」

「あ、あの、灯里さん?何も言わずに出かけてしまって、よくなかった
でしょうか?」

「いや、あの、そういうことじゃなくて・・・」

「どうしたんですか、灯里さん?具合でも悪いんですか?」

「ぶいにゆい?」

灯里の横でARIA社長も心配そうに灯里の顔を見上げていた。

そして、灯里とその女の子は、一瞬じっと見つめあった。

「あのく、つかぬことをお伺いしますが、どちら様でしょうか?」

女の子とARIA社長はずっこけた。

「わたし、なんか変なこと言った?」

灯里の表情は真剣そのものだった

「灯里さん、ほんとに大丈夫ですか?」

「ぶいにゆい?」

「えっ、ちよつと待って。どうなってるの?」

灯里は茫然とその場に立ち尽くすことしかできなかつた。

「ちよつと灯里?灯里ってばあ〜」

灯里は、眠り込んでいたテーブルから、ゆっくりと頭をもたげた。

まだ眠気まなこの表情で、ぼんやりしている。

「しつかりしなさいよ！なに寝ぼけてんの？」

カウンターの外では、呆れたような表情で、藍華がその様子を眺めていた。

「藍華ちゃん、おはよう」

「そう、おはよう……って、あんた、いったい何時だと思ってるの？」

「えっと、アリア社長と朝ごはんを食べてて、そしたら早朝練習から帰ってきたって……」

「はあ？誰が早朝練習から帰ってきたって？」

「そうだ。あれ、誰だっけ……」

藍華は大きなため息をついて、目を閉じた。

「あのさあ、灯里？午後少し時間ができそうだから、久し振りにお茶にしない？って言ってきたの、あんたでしょ？」

「えっと、そうだったっけ？」

そう呟きながら、灯里の目がパツチリと開いた。

「やっと目が覚めた？」

ハツとした表情で灯里は、藍華の方を見た。

「そうか。夢……だったんだ」

その視線は、藍華のすぐ横の、誰もいない空間に向けられていた。

「つまり、アリア社長と朝食をとっていたら、A R I Aカンパニーの制服を着た女の子が外に立っていたと」

灯里とテーブルを挟んで座っていた藍華は、先程までいたカウンターの外に目を向けた。

「それでね、早朝練習に行ってきたって言ったの。アリア社長なんか、当たり前のように挨拶してるし」

「なるほどね」

「何が？なるほどって、どういうこと？」

「あのさあ、灯里？前から言ってるじゃない？そろそろ本気で考える時が来たってことじゃないの？そんな夢を見るってことは」

「またその話……」

「だって、そうとしか考えられないでしょ？」

灯里は少しうつ向くと、ぼんやり表情が曇ってしまった。

「そんなに不安？」

藍華は灯里の顔を覗き込むようにして言った。

「わたしなんか、このARIAカンパニーを受け継ぐだなんて、もしかしたら勘違いしてたのかもしれない」

「それを今になって言うの？」

「だって、グランマやアリシアさんのことを考えると、わたしなんかは何ができるんだろうって……」

「あのさあ、誰があんたにグランマやアリシアさんの代わりに求めてるって言った？」

「藍華ちゃん……」

「前にも言わなかった？灯里は灯里のままでもいいんだって」

「うん、わかっている。わかっているつもりだったんだけど……」

「まあ、あんたがつい考えてしまうのも、わからないわけじゃないけどね。あのふたりは、ちよつと偉大過ぎたから」

「うん」

「でもさあ、灯里？あんたはあんたが思っているほどじゃないと、私は思うわよ？」

「えっ、どういうこと？」

「つまり」

藍華は、灯里に少しほほえんで返した。

「灯里がアリシアさんからこのARIAカンパニーを受け継いで一年が過ぎたわけだけど、それなりにいろんなことがあったと思うのね？」

「うん」

「私からすると、そんな灯里のまわりで起きたいろんなことが、灯里を中心に回り始めてるように見えるんだけど。どうなの、灯里としては？」

「私を中心に？」

「そう。多分だけど、灯里、あんたはそれを自分ではまだ、実感できてないんじゃないの？」

「そんなこと、考えたことない」

「そうでしょうね。それが自信のなさの原因じゃないかしら？わたしには、そんなふうには思えただけだ」

灯里は、一歩踏み出さなくてはいけないと、頭ではわかってはいた。でも、その立場に立っている自分の姿をイメージできないでいた。名実ともにトップ・ウンディーネだったアリス・フローレンスが、このARIAカンパニーを寿退社し、その後を灯里が引き継ぐことになって早一年。

シングル時代いつも行動をともにしていた藍華やアリスは、それぞれに進む方向が明確になりつつあった。

プリマ・ウンディーネに昇格すると同時に支店を任せられることになった藍華は、進んで観光案内に出て、支店の存在感をアピールすることに力を注いでいた。

アリスは飛び級昇格というウンディーネの歴史に輝かしい歴史をつくり、人気ナンバーワンのウンディーネとなって、ネオ・ヴェネツィア国際映画祭のプレゼンターでその人気に拍車をかけていた。

それなら自分らしいウンディーネとは、なんなんだろう・・・ウンディーネとしての経験を積み重ねれば重ねるほど、灯里の心の中では、その疑問が不安へと変わって行く。

藍華の指摘は、そんな灯里の心の中にある不安を表していたと言えた。

「とにかくさあ、いつまでもひとりって訳にはいかないでしょ？」

「そうだね」

「わかってるんなら、実行あるのみ！」

「えっ？」

「えって、仕事よ仕事！あんたはどうしたいわけ？今後のこと」

「私は、このままずっと続けばいいなあって思ってる」

「いや、あのね、今言ったばかりでしょ？そうじゃなくて、その先のことよー」

「その先かあ」

「うん。そういうこと。で？」

「うーん」

「ん？」

「わかんない」

バタツ

「藍華ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫もなにも、あんたといると退屈しないわ、ほんと」

「エヘヘ」

「そういえば、あのただ乗りの子、あの子は最近どうしてるの？」

「アイちゃんは、こないだ社会見学にきてからは、マンホームに帰って
からそのままだけど」

「何？あの子、社会見学に来てたの？わざわざマンホームから？」

「そうなんだよ。将来の希望を、実際に見て考える機会にするんだっ
て」

「そんなことやってるんだ。今の学校って」

「時代が変わったよねえ」

「それであの子は、実際に何を見に来たわけ？」

「ここ」

「ここ？」

「うん、そうって言った」

「えっ、ここって、つまりARIAカンパニーってこと？」

「うん」

「なんで？」

「将来ARIAカンパニーに就職するんだって」

「いや、するんだってって、ひとごとみたい」

「なんかね、バリバリ働くから心配しなくていいよって、頼もしいこと
言ってくれてた！」

「あんたねえ、まだそう決まってもいない人から、そんなふうに言われ
るって、どうなの？」

「それはまだ先の話だし、まだご両親にも相談してないっていうから、
まずはそれからだねって話してたの」

「そういうことなら、別にそれでいいと思うけど」

「ほんとにそうなるかどうかなんて、わからないし」

「まあ、とりあえずは、予約第1号ってことね」

「何それ、藍華ちゃん？」

「灯里の後輩候補ってことよ」

「ああなるほど。そうなるのか」

「もしかしたら、一番現実的な線なのかもね」

第2話

灯里は、その日一組目のお客様を迎えていた。

「お手をどうぞ」

男女のカップルだった。

彼女の方がゴンドラに座るなり、灯里に話しかけてきた。

「ねえ、ウンディーネさん？」

「はい、なんででしょうか？」

灯里は彼氏の方をエスコートしながら、それに応えた。

「わたし、ネオ・ヴェネツィアのこと、あまり詳しくないんだけど大丈夫かしら？」

すると彼氏が座席に腰掛けながら彼女の方を見た。

「えっ、そうなの？なんか、知ってる風なこと言ってたけど」

「別に知ってると言ったわけじゃないわよ」

「違うの？」

灯里は、二人がゴンドラに乗り込んで、いきなり雲行きが怪しくなっていることに戸惑いを隠せないでいた。

「あ、あの、お客様？お詳しくなくても大丈夫ですよ。こちらでネオ・ヴェネツィアの名所・旧跡など、いろいろとご案内することはできませんので」

「そうだよね」

彼氏が納得したように言った。

「あっ、そうだ！」

彼女の方がいきなり声を上げた。

「は、はい！なんででしょうか？」

「行きたいところがあるのよ」

「どちらまで？」

「あそこ！ため息橋！」

「はい、かしこまりました。それでは、ため息橋を巡りつつ・・・」

「ああ、どんなため息をつくのかしらね！」

「えっと、そうだったっけ？」

喜びに満ち溢れた彼女の横で、彼氏がポツリと呟いた。

「何？どういうこと？」

「はひっ」

「確か、そういうことじゃなかったと思うよ。ねえ、ウンディーネさん？」

「まあ、それは、諸説いろいろと申しますか・・・」

「僕が以前聞いたのは、罪人だか処刑人だかが・・・」

「ちよつと待って！なんでそこで罪人とかが出てくるわけ？ため息が出るほど素晴らしいということに決まってるじゃない？ねえ、ウンディーネさん？」

「史実は史実。それとこれとは、また別だよ。ねえ、ウンディーネさん？」

「何よ、それ！ああそうですか！歴史にお詳しいんですね！」

「ああ〜いやあくその〜ですから〜」

灯里の目の前でふたりは、それぞれ別々の方に顔を向けてしまった。

「あの〜お客様？せっかくのご旅行ですので、ここは仲良くされてはいかがかと・・・」

灯里の声に全く何の反応もない。

「こんなふうにネオ・ヴェネツィアで過ごされる時間は、今だけの、大切なものなわけで」

灯里は、どうしたものかと、ため息をついていた。

だが、そこで小さく「よしっ」とつぶやいた。

「お客様？」

ふたりは灯里の問いかけに、何気なく振り返った。

「もしよろしければ、お客様のかけがえのない時間を、私に少し預けていただけませんか？」

「預ける？」

ふたりは呆気にとられた表情で、笑顔満面の灯里の顔を見上げていた。

「ご満足いただけること、間違いないです！」

ゴンドラはカナル・グラndeを進み、リヤルト橋をくぐると、その少し先で狭い運河へと舵を切った。

灯里は周囲の状況に十分な注意を払いながら、狭い運河を縫うように進んでいった。

そこは、観光地という印象とはほど遠い住宅街の中だった。

「(ing)は、ど(ing)?」

彼女は思わず小さな声で、その言葉を口にしていった。

だが次の瞬間、すぐに表情が変わった。

「かわいいー!」

運河沿いに続く塀の上を、親猫の後ろに何匹もの子猫が続いて歩く光景に出くわした。

彼氏が急いでバッグからカメラを取り出すと、シャッターを切った。

その音に驚いたのか、猫の一団は角を曲がって姿を消した。

その様子に残念そうにしていたふたりだったが、彼氏が見せるカメラのモニター画面に、彼女は嬉しそうに見入っていた。

そのまま進むと、今度はあるアパートメントの前で止まった。

灯里が窓越しに中へ声をかけると、中からおじさんが顔を出した。

灯里はそのおじさんに、手を添えてなにやら耳打ちした。

すると、おじさんは中に引っ込んでしまった。

カップルのふたりは、その様子をポカンと見ていた。

しかし、再び登場したおじさんの手には、いくつかの花でこしらえた、小さな花束があった。

「こちら、花飾りの工房なんです」

灯里はポカンとしているふたりに笑顔で説明した。

彼女はおじさんから、その小さな花束を受け取った。

「いいから、持っていきな」

目尻にたくさんのしわを作った笑顔で、おじさんはそう声をかけた。

「ありがとう」

彼女はそう言うと、優しい笑みを浮かべて、その花束を見つめた。

「それ、造花？」

彼氏の問いかけに、彼女はキツとにらんでみせた。

「ご、ごめん」

灯里は少々焦りながら、苦笑していた。

そのまま狭い運河を進んでいると、大きなシートが上空から落ちてきて、ふたりの上に被さった。

「うわっ！」

「な、なに？」

「あわわわ」

灯里はその光景にうろたえるしかなかった。

「灯里ちゃん、ごめんよー！」

アパートメントの3階の窓から女性が下を覗いていた。

「だ、大丈夫ですか？」

「まあ、一応大丈夫だけど」

ふたりは頭から被っていたシートを剥ぎ取りながら応えていた。

「大丈夫だったかい？」

「大丈夫です！後でお届けしまーす！」

「悪いから、今から行くよー！」

「はい！」

灯里はゴンドラを岸に寄せた。

「すみません。とりあえずお渡ししてきます」

ふたりから受け取ったシートをたたんだ灯里は、下りてきたおばさんにそのシートを手渡した。

すると、今度はおばさんの方から灯里に大きな紙袋が手渡された。

チラツと中を見た灯里はニツコリと微笑んだ。

「ありがとうございますー！」

ゴンドラまでもどった灯里は、カップルのふたりにその紙袋の中から大きなリンゴをひとつ取り出して見せた。

「おばさんが迷惑かけたからって、いただきました！」

リンゴを受け取ったふたりは、その大きさに驚いて顔を見合わせていた。

「それじゃあ、お言葉に甘えていただきまーす！」

彼の方ががぶりと一口食べた。

「美味しいー！」

それを見た彼女のほうもがぶりと食べた。

「ほんと、おいしいー！それに甘いー！」

「ほんとだ。蜜がすごいー！」

ふたりは満足げにリンゴをほおぼった。

笑顔でゴンドラに乗り込んだ灯里に彼氏が振り返った。

「ウンディーネさんも食べたら？」

「あ、でも私は仕事ですので・・・」

「せっかくだから食べなよー！おいしいよー！」

「はあ」

灯里は、どうしようか迷っていたが、がぶりと一口食べた。

「ほんと、おいしいー！」

「でしょ？」

三人は、部屋に戻ったおばさんが、またベランダから顔を出したところへ手を振って返した。

「おばさーん、ありがとうー！」

「おいしかったよー！」

おばさんはバルコニーから手を振って応えた。

そこからは、ネオ・ヴェネツィアらしさを感じられる名所へと舵を切った。

そしてしばらく建物の密集する運河を進むと、兩岸の建物の壁から伸びてつながっている橋が前方に見えてきた。

「お客様、前方に見えるのが、ため息橋です」

灯里のその言葉にふたりは同時に顔をあげた。

「これが」

「ためいき橋」

「この橋は、その昔、マンホームのヴェネツィアで刑の宣告を受けた罪人が、この橋を渡って監獄へと向かったと伝えられています」

「ほら、やっぱりそうじゃないか」

彼の方が納得したように言った。

彼女は怪訝な表情になっていた。

「その時、罪人は橋の窓からアドリア海を目にして、あまりのその美しさにためいきをついたそうです。もうこの美しい光景を目にすることは出来ないのかもしれないと」

二人は黙って灯里の言葉を聞いていた。

「いくら後悔をしても、もう二度と戻せない時間。罪をおかした人にも後悔させるほどのヴェネツィアの風景。いったいどんな風に見えていたのでしょうか」

ゴンドラはそのまま進み、運河の端まで来ると、そこにかかる橋をくぐった。

すると目の前の視界が一気に大きく開けた。

「きれいー！」

「すばらしいー！」

遠くまで広がる海。

きらめく波が眩しく、二人は目を細めてその目の前の光景に圧倒されていった。

そして、風が心地よくゴンドラの上を吹き抜けてゆく。

「お客様、正面に見えるのが、サン・ジオルジョ・マツジョーレ島です。あの鐘楼からは対岸が一望できて、とても素敵な風景を見ることができんです。絶好の観光スポットとなっていますので、一度行かれてみてはいかかでしょうか」

第3話

午後の予約のお客様は、ひとり旅をしているという男性だった。マンホームからやって来て、現在アクア中を巡っているという。

「このネオ・ヴェネツィアは、必ず来ようと思ってたんだ！」

「そうなんですか。何か特別な理由でもあるんでしょうか？」

「まあ、そうだね」

二十代半ばと思われるその男性は、髪を肩の辺りまで伸ばしていて、精悍な顔立ち、笑うと白い歯が印象的な明るい人柄を思わせた。

灯里の問いかけにも気さくに応える素振りには、人懐っこい性格のようだ。

「なんかとつても美人のウンディーネさんがいるって聞いたもんだから、これは絶対来なきやって思ってたんだ！」

「そ、そうなんですか・・・」

「そしたら、こんなかわいいウンディーネさんと出会えた。今日のオレ、ツイてる！間違いない！」

「はひっ！」

そうやって、その男性客は笑い声をあげた。

灯里は、なんだかペースを崩された感じになっていた。

「あつ、ウンディーネさん。気にさわったらごめん。半分冗談だから」

「ああ、そうなんですか・・・」

「でも、ウンディーネさんがかわいいのはホントだよ」

「わかりました」

灯里のリアクションを見て、男性客はまた笑い声をあげた。

ゴンドラは、カナル・グランデを縦断するかたちで、ゆっくりと進んでいった。

「いい眺めだ」

「この大運河は、逆S字のかたちでネオ・ヴェネツィアを縦断してます。そのため、ボートや遊覧船、ゴンドラが行き来していて、とても賑やかで、ネオ・ヴェネツィアを象徴する場所といえます」

「なるほど。活気があっていいね。この街の暮らしがとても感じられ

る」

「ありがとうございます。そう言っていただけだと、うれしいです」

「ウンディーネさんがうれしいの？」

「はい！」

男性は思わず振り返って灯里の顔を見上げた。

灯里は、嬉しそうな表情でオールを漕ぎ続けていた。

「あれは何？ゴンドラが運河を横切ってる！」

「お客様、あれはトラゲットといって、渡し船なんです」

「そんなのがあるんだ」

「はい。この街で暮らす人々の生活の足なんです。この大きな運河の兩岸を行き来する大事な交通手段となっております」

「なるほど」

男性は感慨深げにその様子を眺めていた。

「ウンディーネさん？」

「はい、なんででしょうか？」

「オレ、ここに来た理由、最初に言ったよね」

「美人のウンディーネを捜しに、ですね」

「そうそう。半分冗談だって」

「はい。そうおっしゃいました」

「その、残りの半分を聞いてくれますか？」

「あ、はい。私でよければ・・・」

ゴンドラはカナル・グランデを南へ出ると、そのまま西へ進み、サン・マルコ広場へと向かった。

すると、広場を象徴する大鐘楼がその姿を現した。

「立派な建物だね」

「はい。ここは特に人気の観光スポットとなっています。最上階まであがると、ネオ・ヴェネツィア周辺が一望できます」

灯里たちは、その大鐘楼を右に見ながらゆっくりと進んだ。

「実はオレのおやじがこのサン・マルコ広場で、母ちゃんにプロポーズしたらいいんだ」

「そうなんですか？」

灯里は思わず声をあげた。

「失礼しました・・・」

「ハハハハ。別に気にしてないよ、ウンディーネさん」

「もしかして、先程のお話の残り半分というのは、そのことなんですよか?」

「そう、そのこと。ここは、オレにとっては思い出の場所ではないけど、おやじと母ちゃんのことを思い出す場所なんだ」

「思い出す・・・」

「もういないから。小さい頃に死んじゃったから。はつきり記憶もないんだけどね。ただ、ここで結婚することを決めたらいいんだ。だから今のオレがいる。ここは、オレにとってそういう場所なんだ」

「そんなことが・・・」

「だから一度は見ておこうと思ったわけなんだけど。なんせ、貧乏旅行の身では来るのが大変!」

「はあ・・・」

男性は灯里の反応に笑いだした。

「ハハハハ。ウンディーネさん、ウソのつけない人だね」

「えっ、今のお話はうそ・・・なんですか?」

「違う違う。話はホント。そうじゃなくてさ、こんな話、誰にも話したことなかったんだよ。だって重いでしょ?」

灯里は真剣な眼差しで言葉を返した。

「いいえ、私はそうは思いません」

「そうなの?」

「はい。だってこんな素敵な話はないです。お父様とお母様がここで結婚を誓い、そしてそこがどんなところかを、お客様は確かめに來られた。ここは間違いなく、お客様にとっても大切な思い出の場所だと思います」

「ウンディーネさん・・・」

その男性は灯里の、その大鐘楼を見上げる横顔を見つめた。

「あつ、すみません。わかったようなことを言ってしまった」

「いや、ウンディーネさん」

「はい。なんででしょうか・・・」

「ウンディーネさん、うまいこと言うね!」

「はひっ!」

「両親が生きた証を、その息子が確かめにやって来た。いいよ、その感じ!」

「はあ」

「さすがだね、ウンディーネさん。ネオ・ヴェネツィアを代表するウンディーネさんだけのことはある!」

「はあ・・・えっ、だ、代表する?」

「違うの?なんかすごいらしいじゃない?すべてパーフェクトになんでもできちゃうんでしょ?」

「ああ〜それは〜たぶん〜アリシアさんのことかと〜」

「えっ、あなたのことじゃないの?確かA R I Aカンパニーだと聞いたんだけど」

「A R I Aカンパニーに間違いはありませんが、私のことではないかと」

「別の人だったんだ。なんだ、そうだったのか・・・」

灯里は男性の反応を見て、ガックリうなだれてしまった。

「でもよかった」

「はあ」

「ウンディーネさん、あなたでよかった」

「えっ?」

「オレの話を素敵だなんて言ってくれて、うれしかった。人にそんなふうに言ってもらえるとは思ってなかったから」

男性は眩しそうに大鐘楼を見上げた。精悍な顔立ちが満足げな笑顔で満ちていた。

「お客様?」

「何?」

「今日は本当にいいお天気ですね」

「そうだね」

「こんなにも晴れ晴れとしたお天気の日だと、私には、このアクアがお

客様を祝福しているように思えてならないです！」

そう言つて灯里は空を見上げた。

その男性客は、灯里の言葉につられるように振り返つて灯里の顔を見上げた。

そして、灯里の見る方向に目線を向けた。

青い空と流れ行く雲。陽の光がどこまでもやさしく降り注いでいた。

「ほんと、いい天気だ！」

「はい！」

そのひとり旅の男性はゴンドラを降りる際、灯里の手を両手で握り締め、何度も何度も上下に振つて、感謝を表した。

その力強さに少し顔をしかめた灯里だったが、男性の最後の「ありがとう」の言葉が、胸にジーンと伝わってくるようだった。

灯里は、遠くマンホームにいる両親のことが頭をよぎった。

もし何かあつても、すぐには会えない。

仕事のこと、ARIAカンパニーのこと、信頼してくれているアリスアのこと。

いつも気にかけてくれる藍華のこと。さりげなく心配をしてくれるアリスのこと。

いつもそばで見守つてくれているアリア社長のこと。

そして、そして……

今の灯里には、このアクアが、そしてネオ・ヴェネツィアが、何にも替えることの出来ない居場所となっていた。

自分が必要としてくれる。そして、自分にやるべきことがある。

灯里は、その男性が人混みの中に消えて行くまで、その背中を見送った。

「また来てくださいね。いつでもお待ちしております」

第4話

午後からのもう一組のお客様は、年配のご夫婦だった。少しふくよかな婦人と、スラツとしたご主人。

「足下にお気をつけください」

「ありがとうございます」

灯里の優しい言葉に、婦人はにっこりと笑顔を返した。

「ご主人様もお手をどうぞ」

「悪いねえ」

にこやかな笑顔で、灯里の手を支えにゴンドラに乗り込んだ。

「水の上は少し冷えますので、これをお使い下さい」

灯里は用意したブランケットを、並んで座っているふたりに膝の上にかけて。

「まあ、これはこれは。気を使って頂いてありがとうございます」

「どういたしまして」

灯里は、寄り添うように座るふたりの姿に、自然と笑みがこぼれた。

「それでは出発します」

ゴンドラは海の上を滑るように動き出した。

「お客様、お望みの観光スポットなど御座いましたら、何なりとお申し付けください」

「そうねえ」

婦人はそう言うと、少し考えるように間を置いた。

「あそこを是非お願いしたいわ。大きな風車がたくさん並んでいるところ」

「それなら、おそらく希望の丘だと思います」

「そういう名前だったかしら。高いところからネオ・ヴェネツィアが一望できて、とても感動したのを覚えてるわ」

「かしこまりました。それでは、ネオ・ヴェネツィアの名所をいくつか巡りつつ、最後に希望の丘へ向かうというコースでいかがでしょうか？」

「それをお願いするわ」

灯里は改めて舵をぐいと切った。

改修中のカ・ドーロやマルコ・ポーロの生家を復元した建物など、観光名所と呼べるところから、生活が息づくアパートが密集した地域など、ネオ・ヴェネツィアの異なった表情が楽しめるようなコースをたどっていった。

そして、リヤルト橋を通過してカナル・グランデを抜けると、のどかな田園風景が広がる地域へとゴンドラを進めた。

緑に囲まれた中に、水路が遠くまで延びている。

途中、風が心地よく通り抜けてゆくところに差し掛かると、灯里はゴンドラを止めた。

「少し休憩いたしましょう」

灯里は足元に置いていたカバンからポットを取りだし、用意していたカップふたつに紅茶を注いだ。

「まあ、いいのかしら？こんなにしていたいで」

「はい。お口に合うかどうかわかりませんが・・・」

婦人は紅茶を少し口に含むと、ほっこりとした表情になった。

「やさしい味ね。とってもおいしいわ」

そういう婦人の横で、ご主人は微笑みながらゆっくりとうなずいていた。

「ウンディーネさんにも休憩は必要よね。ゆっくりしてちようだいね」

「あ、いえ、私のことは別にお気になさらなくても」

「そんなことないわ。一緒にお茶しましょ！」

「はい！」

灯里はもうひとつカップを取り出すと、ポットの紅茶を注いだ。

「それでは失礼していただきます」

「どうぞ。でもあなたが入れた紅茶よ。私が 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 のもおかしいわね」

そう言って婦人は笑いだした。

「なんか、すみません」

灯里は恐縮して答えた。

少しばかり、のんびりした時間を過ごす、灯里は再びゴンドラを進める準備を始めた。

「ウンディーネさん、このあとはどちらへ行くのかしら?」

「ここからしばらく進むと、水上エレベーターがあります」

「つまり、いよいよ到着ということね?」

「はい」

灯里はオールを持ってゴンドラをゆつくりとスタートさせた。

しばらくすると、視界に高い塔のような建物が見えてきた。

そこに近づくと、灯里は声をかけた。

「おじさーん、お疲れ様でーす!お願いしまーす!」

その塔の前で椅子に腰かけて新聞を広げていたおじさんが、灯里の声に気がついた。

「おおー、灯里ちゃん!ちよつと待ってくれよー。すぐ降りてくるからー」

「はい!」

すると、少しして水路の突き当たりのところにあるゲートが、ガタンと大きな音を立てて開き始めた。

中からお客様を乗せたゴンドラが一艘出てきた。

そのゴンドラがすれ違い、通過するのを待って、灯里はゴンドラの中へと進めた。

中はゴンドラが余裕で収まるぐらいの十分な広さがあった。

「お客様、この水上エレベーターで上の水路まであがります。それまで少しの時間お待ち下さい」

ゲートがまた大きな音を立てて降りてきた。

完全に降りきると、薄暗くなった塔の中で、水が壁づたいに少しずつ流れ落ちてくる。

水位が上がり始め、ゴンドラも上に向かって上がり始めた。

見上げると高い天井が外から漏れる明かりでうつすらと見えていた。

その薄暗い塔の中を水の音だけが響いてゆく。

灯里とその老夫婦は、少しずつ近づいてくる天井をじっと見上げて

いた。

すると灯里がこう言った。

「いつもここへ来ると、なんだか違う場所に来てしまったように感じるんです」

「違う場所？」

婦人は不思議そうに聞き返した。

「はい。一瞬、別世界に来てしまったような・・・」

婦人は灯里の言葉を聞いて、辺りを見回してみた。

「確かにそうね。さっきまで明るい場所において、急にこんな暗い場所に入ると、なんだか不思議な気分になるわね」

そうすると、出口となるゲートが見えてきた。

水位がそこまで上昇すると、ゴンドラがそのゲートを目の前にした位置で止まった。

そして、大きな音とともにゲートがゆっくりと開き始めた。

外の明るさが今まで暗かった水上エレベーターの中へと差し込んでくる。

思わず目を細めてしまう眩しさ。

だがその陽の光は、オレンジ色へと変わりつつあった。

外はすっかり陽が傾き始めていた。

「お客様、お待ちせいたしました。それでは出発いたします」

灯里がオールをぐいと動かすと、ゴンドラは水上エレベーターから外へ進み出た。

すると、左手にネオ・ヴェネツィアの町並みが、まぶしいくらいに眼下に広がっていた。

「まあ、なんてすばらしい」

「おお」

無口だったご主人も、思わず声をあげていた。

灯里も眩しそうに、その光景に目を細めていた。

「お客様はご存じでしょうか？」

灯里のその言葉に婦人は、何気なく振り返った。

「この星が現在のようによくの水であふれ、アクアと呼ばれるように

なる前は、まだ一面オレンジ色でおおわれていたそうなんです。だからでしょうか。このオレンジ色に染まる時間が、とても懐かしいような、いとおしいような、そんな不思議な気分になるんです」

婦人は灯里のその言葉に感慨深く聞いていた。

「そうね。ウンディーネさんのおっしゃること、わかるような気がする。これまで何度もネオ・ヴェネツィアへは来ているけど、こんな気分は初めてだわ」

灯里は少しゆっくりとゴンドラを進めた。

「それにしても、ウンディーネさん、お若いのにしっかりされているのね」

「あつ、いえ。実は今の話はある方の受け売りなんです。この話、とても好きなお話で、いつもこの時間にここを通ると思い出すんです」

「そうなの。でもいいお話ね」

しばらく進むと、右手に続いていた、生い茂った木々が途切れ、その大きな風車の群れが姿を現した。

いくつもの白く巨大な風車が、緑の丘の上に広がっている。

「お客様、希望の丘に到着です」

夫婦は、その壮大な眺めに圧倒されていた。

「お客様、いかがですか？」

「何て言ったらいいか、言葉が見つからないわ」

「少しの間お止めしますので、ゆっくりとご覧ください」

灯里はそう言うと、ゴンドラを丘の方の岸に寄せた。

オレンジ色に染まる風景と心地いい風。そしてゆっくりと回る風車たち。丘の反対側はアクアの海が広がっている。

言葉はいらなかった。

風の音と、ゴンドラに当たるかすかな水音。

すると、婦人がこう言った。

「本当に素敵などころに連れてきてくれてありがとう、ウンディーネさん」

「いえ、お客様のご要望にお応えしただけです。わたしの方こそ、お客様に喜んでいただけて光栄です」

「実はね、本当のことを言うと迷ってたの。来るかどうか」
「そうだったんですか・・・」

婦人は少し間をおいて、改めて話し始めた。

「実は私の孫娘、ウンディーネ志望なの」

「はひっ！そんなんですか！」

「そうなの。でも、私は反対だったの。そんなはしたない仕事いけません、てね」

「はしたない、ですか」

「ごめんなさいね。その時はそんなふうに思ってた。でも今日こうしてゴンドラに乗って、観光案内というものを改めてこの目でみて、その考えは改めなきゃいけないと思ったわ」

灯里は、恐縮すると同時に、どう言葉を返していいかわからなかった。

「それでね、ひとつ聞いておきたいことがあったのだけど、いいかしら？」

「はい、どうぞなんなりと」

「今日の目的地を、この希望の丘にした理由なんだけど。ウンディーネの方たちにとって、ここは大切な場所だということを聞いたからなの。よかつたらその理由を聞かせていただけないかしら？」

「お客様、その話をどこでお聞きになったのですか？」

灯里はその婦人から以外と思える言葉を聞いて驚いていた。

「もちろん、そのウンディーネ志望の孫からよ」

「お孫さん、ですか・・・」

灯里は少し戸惑いを感じつつも、話し始めた。

「この丘の名前を希望の丘とお話しましたが、実は本当の名前は『風車の丘』というんです」

「そうだったの？」

「はい。ご覧いただいているとおり、風車が立ち並ぶ風景がその名前の由来そのものですが、ここはウンディーネたちにとって忘れることの出来ない場所でもあるんです」

灯里はそう言って、丘の上に壮大に回る風車を見上げた。

「ここは、ウンディーネたちが昇格試験の結果を告げられる場所なんです。ここまで、指導をしてきた先輩や指導員がゴンドラに同乗し、その結果をここで言い渡す。中には、ここまで来れない人もいます。その前に引き返すわけです。まだ実力が伴わないと判断されて」

「そんなことがここで・・・」

「これまでたくさんのウンディーネたちがこの場所にいろんな思いを、そして希望を抱いてきた。だから、いつしか希望の丘と呼ばれるようになったんだと思います」

灯里はそう言うと、今度はネオ・ヴェネツィアを見渡す風景に目を移した。

「ただ、これは私が一人前のウンディーネを目指していた頃より、もつと前からのお話なので、実のところ定かではないのですが・・・」

婦人は少し振り返り、灯里の横顔を眺めていた。

「いろんなことがあったのね」

「あつ、でも、私の場合は、指導していただいた先輩がとても優しい方で。なんか、そんな、大変なことなんて何もなかったんですけど。エヘヘヘ」

「謙遜なさらなくていいわ、ウンディーネさん。いい話を聞かせてくださいわ。是非孫にも聞かせないといけませんわね」

「あつ、いえ、それは言わない方がいいかもです」

「あら、どうして？」

「それはですね、ピクニックということでした・・・」

「ピクニック？何のことなの？」

「お孫さんはご存知かも知れませんが、これはシングルの昇格試験の時の話なんですけど。その試験が行われる前日に、先輩から言われるんです。あしたピクニックに行かないかって」

「なんだか楽しそうね」

「その時はそう思うんです。憧れの先輩から誘われて、一日先輩とゴンドラで過ごして。でも、最後にこの希望の丘にたどり着いたとき、初めてわかるんです。実は試験を受けていたんだと。合格を言い渡された時は、驚きと感動でいっぱいになるんですけど、その後で気づ

くんです。さつきまで、そんなことになってたんだ！って」

「ハハハハ、それは確かに驚くわね。でもピクニックに誘う先輩も、お芝居が上手くないとダメね。今日はなんか違うぞってなったら、手が震えちやったりするかも・・・」

「ほんとに」

婦人と灯里は顔を見合わせて笑った。

その婦人の横で、ご主人は穏やかに微笑んでいた。

「ところで、ウンディーネさんにはどんな後輩さんがいるの？」

「私にはまだ後輩はいません」

「そうなの。そういえばお店に誰もいなかったわね」

「はい、お店は私ひとりだけです」

「ひとりだけ？」

「はい」

「それは大変ね」

灯里はそれ以上は答えようとしなかった。

そのため、少しの沈黙が流れた。

「ウンディーネさん？」

「はい、なんででしょうか？」

「孫に伝えておくわね。ウンディーネに本気でなるつもりなら、いいお店があるからそこにしなさいと」

「はい？」

「お店の名前、改めて教えていただけるかしら？」

「はひっ！私のお店ですか？」

「当然でしょ！」

「ああ、それは、とても光栄なことですが・・・」

「ARIAカンパニーじゃ」

「ご主人がしゃべった。」

「あらあなた、覚えてたのね」

「まあな」

「ARIAカンパニーね。覚えておくわ」

「はい・・・」

灯里はあまりスッキリしない表情で、曖昧な返事をした。

「ウンディーネさん？」

「はい？」

「私、主人とは五十年近く連れ添ってるのだけど、この年になってつくづく思うの。誰か横にいてくれることの大切さを。分かち合える人がいるだけで、人生違うものだって」

「そういうものですか・・・」

「そういうものよ、ウンディーネさん！」

「は、はい！」

婦人は楽しそうに笑った。

その横でご主人が変わらずに微笑んでいた。

灯里は、老夫婦をマルコ・ポーロ国際宇宙港近くの船着き場で下ろすと、そのままARIAカンパニーへは戻らず、以前よく行っていたパン屋へ寄り道することにした。

近くの市場の船着き場にゴンドラを係留し、そのパン屋に歩いて向かった。

辺りは暗くなり始め、街灯が点り始めていた。

パン屋までたどり着くと、店主が片付けを始めていた。

灯里がこのまま引き返そうかと迷っていたら、ちょうど店の主人が灯里を見つけ、声をかけてきた。

「灯里ちゃん、久し振りだねー！」

眼鏡をかけ、口の下に髭を蓄えた、優しそうな店主が、少し離れたところから手を振っていた。

「お久し振りです」

「せっかく来てくれたのに、悪いねえ」

「いえ、気になさらないでください。ちよつとタイミングが悪かったみたいです」

灯里は苦笑しながら顔の前で手を振った。

「そういえば最近どうしてるの？いつものメンバーは？」

「いつものメンバー？」

「いつも元気な娘とちよつとおとなしめの娘」

「はい、あのふたりですね」

「あのふたりも最近あまり見かけないなあ」

「みんな忙しくしてしまして。ここ最近来れてないと思います」

「そうなんだ。でも忙しいのはいいことだ。商売繁盛だね！」

「確かにそうですね」

「灯里ちゃんもがんばってね。あ、そうだ。ちよつと待つてて」

「はい？」

店主は灯里にそう言うと、駆け足で店の中に消えていった。

そして今度は、紙袋を小脇に抱えて戻ってきた。

「これ、持ってって」

「これは・・・」

「少し取っておいたものなんだけど、食べてみて」

灯里は手渡された紙袋を少しだけ開けて中を覗いてみた。

すると、芳ばしい香りが漂い出てきた。

思わず笑みがこぼれる。

「いいんですか？」

「いいのいいの。その代わり、感想聞かせてよ。今度また時間がある

ときでいいから」

店主はそう言って、また駆け足で店の中に消えていった。

灯里はその後ろ姿を見送りながら呟いた。

「ありがとうございます。必ずまた来ます」

第5話

「私も時々お乗せすることがあります、カップルさん」

アリスはカッププを持って、カフェエラテを一口飲んだ。

「カップルさんねえ。確かにゴンドラに揺られてネオ・ヴェネツィアを巡るなんて、最高のデートコースと言えるわよね」

藍華もカフェエラテを口にした。

「私ならアル君と・・・ムフフフ」

二人の会話の前で、灯里はなんだかうかない表情をしていた。

「どうしたんですか、灯里先輩？そんなうかない顔をして」

「そうよ、灯里。なんかあったの？」

サン・マルコ広場のオープンテラスで、久しぶりにお茶しようところの場で落ち合った3人は、これまた久し振りにカフェ・フロリアンのカフェ・ラテを味わっていた。

3人揃って午後のひとときに時間がとれるのは、それぞれプリマになつてから、なかなか出来ないことだった。

それがうまく時間を合わせられたことで、それなら会おうとなった訳だったが、灯里の表情が今一つ冴えなかった。

「少し気になることがあつて・・・」

「なんですか？気になることつて」

灯里はその時の様子を思い返すように遠くを見つめた。

「そのカップルさん、ちよつとケンカになつちやつて」

「ケンカ？なんで？」

「彼女さんの方がため息橋に行きたいって言ったんだけど」

「うん。それで？」

「どんなため息が出るのか楽しみだつて」

「ああ、なるほど。そのパターンね」

藍華は目を閉じて、やれやれといった表情で腕を組んだ。

「それで彼氏の方はなんて？」

「ため息橋は、そういう意味じゃないはずだつて」

「やっぱりですね、藍華先輩」

アリスも呆れたような口調だった。

「やっぱりってどういうこと?」

灯里はポカーンと口を開けていた。

「そういう話は、これまでいくらでも耳にしてきたっていうことよ」

「そうですね。今さらって感否めないですね」

「うん。それは私もそう思うけど・・・」

「思うけど、何?」

「もしアリシアさんなら、どんなふう言葉をかけていたんだろうって、ちよつと思つて」

「アリシアさんなら?」

「なんと言つたか、ですか?」

「うん」

「なんでそんなふう思うの?」

「最近、特に思うようになってきて。アリシアさんならどうしたんだろつて」

「だからその件は前に言つたじゃない? 灯里がそう思つても無理もないと思うけど、結局のところ、あんたはあんたでしかないわけだし、今さらそんなふう考えても仕方がないんじゃないの?」

「藍華ちゃん」

「私も藍華先輩の言う通りだと思います」

「アリスちゃんまで」

「灯里先輩がアリシアさんを偉大に思うあまり、その雄姿に恥ずかしくないウンディーネにならないと考えてるんだとしたら、私が思うに、そこはあまり考えなくてもいいんじゃないでしょうか?」

「ええー、どうして?」

「灯里先輩がアリシアさんを目指されるのは、別に自由だと思いますが、正直申しますと少々ハードルが高いといえますか・・・」

「アリスちゃん、ありがとう。正直に言つてくれて」

灯里はガツクリとうなだれてしまった。

「後輩ちゃん、ちよつと正直に言いすぎよ。いくら私たちの仲だからと言つても」

「ええー、どうして?」

「灯里先輩がアリシアさんを目指されるのは、別に自由だと思いますが、正直申しますと少々ハードルが高いといえますか・・・」

「アリスちゃん、ありがとう。正直に言つてくれて」

灯里はガツクリとうなだれてしまった。

「後輩ちゃん、ちよつと正直に言いすぎよ。いくら私たちの仲だからと言つても」

「ええー、どうして?」

「灯里先輩がアリシアさんを目指されるのは、別に自由だと思いますが、正直申しますと少々ハードルが高いといえますか・・・」

「アリスちゃん、ありがとう。正直に言つてくれて」

「ええー、どうして?」

「灯里先輩がアリシアさんを目指されるのは、別に自由だと思いますが、正直申しますと少々ハードルが高いといえますか・・・」

「アリスちゃん、ありがとう。正直に言つてくれて」

「藍華ちゃんもそんなふうに思ってたんだね」

灯里は「ああ」と声を漏らしながら、テーブルに突っ伏した。

「すみません、灯里先輩。言い過ぎました」

「別にいいよ。正直な意見が聞けてよかった」

「灯里さあ」

藍華はそう言っただけで座り直すと、灯里の顔を覗き込むように言った。

「やっぱり、それが理由なの？」

「何が？」

「まだ、ひとりでがんばってる理由よ」

「新しい社員を採らない理由ということですか？」

「そういうこと」

灯里はテーブルに突っ伏したまま、顔を横に向けてふたりの言葉を聞いていた。

サン・マルコ広場を行き交う人たちの姿が、横になって通り過ぎて行く。

「そうかもしれない」

灯里はポツリと呟いた。

「それって自身がないということですか？」

「どうなの、灯里？」

「うーん。わかんない」

「わかんないって。あんた今そうかもって言ったばかりじゃない」

「うーん」

と言っただけで、灯里は顔をテーブルにぶせてしまった。

「私って、これからどうしたらいいんだろう」

「灯里、あんたねえ、そんなテーブルの上で顔をごろごろさせてどうなるの？」

灯里は、自分の顔をテーブルの上で、左右にごろごろさせていた。

「この人はね、今頃になって、ようやくARIAカンパニーの看板の重さに気付き始めたんだって」

灯里が顔をごろごろするのを止めた。

「灯里先輩、そうなんですか？」

灯里は顔を伏せたまま動かなくなった。

「そうゆうこと」

「まさか、今頃ですか？」

「今頃だからよ。一年が過ぎて、回りもしつかり見えるようになってきて、ようやく今の状況に慣れてきたけど、それと同時にまだ自分では十分把握できてないことなんかもわかってきたってことよ。ね？」

「でもそれは私も理解できません。プリマになって初めて見えてくるようになったこともたくさんありましたし」

「そりやそうよ。だって私たち、まだプリマ一年生だからね」

「もう二年生だよ」

灯里は下を向いたまま、はつきりしない口調で言った。

「あ、あんたねえ、そんな突っ伏したまんまの人に言われたくないわよ！」

「だって二年生は二年生だもん」

「確かに」

「後輩ちゃんまで何よ！もう！」

灯里は顔を横に向けると、深いため息をついた。

「二年生なら二年生らしく、後輩がいてもおかしくないってことじゃないの？」

灯里は藍華の言葉に、また下を向いてしまった。

「また静かになりました」

アリスがポツリと呟いた。

「アリシアさんからARRIAカンパニーを引き継いでもう一年が経ったわけだし、それなりに仕事も増えてきたわけでしょ？もうそろそろ真剣に考えてみてもいいんじゃないの？」

「うくん」

下を向いたまま、灯里は返事をした。

「そのへうくんは、承諾したということなんでしょうか？それとも、まだ考え中という意味なんでしょうか？」

「うくん」

「どっちでもないみたい」

藍華とアリスは、カップの底に残ったカフェラテを飲みほすと、ふたり同時にため息をついた。

第6話

そこは、いつものように何も変わらない時間が流れているように見えた。

ARIAカンパニーの、その海に向いたカウンターの上の小さな鉢植えには、その鉢植えにお似合いのかわいい花が咲いていた。

ひとりの女性がそのカウンターの前に立ち、その鉢植えにそつと手を添えて穏やかに微笑んでいた。

海から吹く風が、その女性の長い髪を揺らしている。

誰もいない店内を見回し、そして振り返る。目の前に広がる海の眩しさに思わず目を細めた。

「いい天気」

女性は髪を耳の後ろに回すと、ぼんやりと遠くに視線を向けた。

午後の、まだ太陽が高い位置にある時間。

ARIAカンパニーに訪ねてきたその女性は、誰もいないお店に最初は拍子抜けしたような様子だったが、今は満足げな表情をしていた。

しばらく海を眺めていたが、向きを変え、その場から立ち去ろうとした。

すると、デツキの角の向こうから、こちらに近づいてくる足音が聞こえてきた。

女性はその足音の主が姿を現すのを待った。

鼻歌混じりに姿を現したそのウンディーネ姿の女の子は、その女性と目が合った瞬間、ハッと驚いて立ち止まった。

「びっくりしたー!」

「あ、ごめんなさい」

落ち着いた口調でその女性は、現れたウンディーネに声を掛けた。

「あつ、いえ、こちらこそすみません」

無邪気な表情から一転、かしまった大人の表情に変わった。

「ウンディーネさん、よね?」

「はい、れつきとしたウンディーネです」

その女性は、目の前のウンディーネの返答に、思わず笑みがこぼれた。

「でもその制服は・・・」

白地に赤い色が印象的な制服姿。

「私は姫屋所属の者です」

「やっぱりそうよね」

そう言ったその女性は、そのウンディーネの手を見た。

両手ともにグローブを着けていないウンディーネ。

「プリマ、ということね?」

「はい。この通り真正銘のプリマ・ウンディーネです」

そのウンディーネは両手を前に出して、その女性に見せた

その笑顔のウンディーネの顔を見て、その女性は何かが気になったようだった。

「もしかして、あなた・・・」

「はい?」

「あつ、ごめんなさいね。ちよつと思ひ出したことがあつて」

「はあ、そうですか」

「ところで、お名前聞いてもいいかしら?」

「はい。藍華・S・グランチェスタと申します」

「藍華さん・・・」

女性が何か考えるような仕草をした。

「ええと、私の名前が何か・・・」

「もしかして、姫屋のオーナーの一人娘の、あの藍華さん?」

「まあ、確かにそれに間違いはありませんが・・・」

「そうなんだ。こんなところで会えるなんて奇遇ね」

「えつと、それは一体どういうことですか?」

藍華は驚きを隠せずに、その場で呆気にとられていた。

「ところで、その藍華さんがなぜARIAカンパニーに?」

「ああ、それはですね。こここのウンディーネとは昔からの知り合いで、たまにこうして会いに来るといふか、なんというか」

「友達ということなのね」

「一言で言うと、そういうことになります」

「なるほど。じゃあ、ARIAカンパニーのことについても詳しいのかしら?」

「まあ、それなりに、わかるにはわかりますが・・・」

「そういうと、藍華は少し怪訝な表情をみせた。」

「その表情に気がついた女性は、微笑んでみせた。」

「別に怪しい者じゃないわよ」

「ということは、お客様ですか?」

「まあ、そういうところかしら」

藍華は、カウンターから店内の様子を見て呟いた。

「まだ灯里は帰ってないみたいね」

その言葉を聞いてその女性が聞き返してきた。

「灯里さんていうの?このウンディーネさん」

「はい、そうです。水無灯里という名前です」

「そうなんだ。そういえばアリシアさんは、どうされたのかしら?」

「アリシアさんは、一年前に引退されました」

「引退?」

「はい。寿退社です」

「そうだったの。じゃあここにはもういないということね」

その女性は残念そうに言った。

「失礼ですけど、アリシアさんとはお知り合いか何かですか?」

「個人的な知り合いではないけど、思い出はたくさんあるわね。間違いない」

「はあ」

藍華はピンと来ないといった顔で気の抜けた返事をした。

「ところで、その灯里さん以外にはウンディーネはいないの?」

「そうですね。今のところ灯里ひとりですけど」

「それじゃ大変ね。ARIAカンパニーをひとりきりで営業してらってことよね。でも考えたらアリシアさんもひとりやってたわね」

「灯里が来る前はそうでしたね」

「そうか・・・」

その女性は何かを思い出したような表情をしていた。

「楽しみになってきた」

灯里は、カウンター越しに夕暮れの海を少しの間、眺めていた。

そして、今日一日の終わりを確かめるように、ゆっくりとシャツターをおろした。

辺りを見回し、一通りの片付けを確認すると、二階へ上がろうとした。

その時、電話が鳴った。

灯里は、電話のそばまで行くと自然と呟いていた。

「誰だろう、こんな時間に」

受話器を取ると、藍華のいつもの元気な声が聞こえてきた。

「灯里？帰ってた？」

「うん、帰ってた」

藍華の声に、灯里は自然と気持ちいが緩むようだった。

「なんか、元気ないわね」

「そうかなあ。いつもと同じだと思うけど」

「疲れたー、って感じがする」

「うん、確かに疲れた」

「やっぱりね。最近スケジュールが少しきつめだって言ってたけど、あんた、無理してんじゃないの？」

「うーん、どうかなあ。もしかしたら、ちよつとそうかもしれない」

「忙しいのはいいことだと思うけど、無理は禁物よ」

「うん、わかった」

「ホントに？」

「と思う」

「何それ？」

ホログラムによって映し出された藍華は、呆れた顔になっていた。

「そんなことより、灯里、今日午後一度、ARIAカンパニーに寄ったんだけど」

「そうだったの？」

「うん。それでね、その時お客様が来られてて、なんか根掘り葉掘り聞かれたんだよね」

「そうだったんだ。藍華ちゃん、お客様のお相手、ありがとう」

「ううん、そんなことはいいの。気にしないで。ただね・・・」

「どうかしたの？何かあった？」

「あのね、そのお客様、かなり気にしてたから」

「気にしてたって、何を？」

「灯里、あんたのことよ」

「私のこと？」

「現在のARIAカンパニーのウンディーネはどんな人か、アリシアさんの後を引き継いだんだから、さぞかし素晴らしいだろう、とかね」

「ええー、どういうこと？」

「それはこつちが聞きたいわよ」

「誰なんだろう・・・」

灯里は、ぼんやりと天井を見上げながら頭を巡らしていた。

「そういえば、アリシアさんが現役の時に何度かアリシアさんのゴンドラに乗った経験があるみたいなこと言ってた。知り合いというわけではないけど、思い出ならたくさんあるって」

「そうなんだ。アリシアさんの・・・」

灯里は、今でも時折やって来るアリシア目当ての客なのだろうと考えた。

それは、このARIAカンパニーにとって、今だアリシアの存在がいかに大きいものであるかを物語っていた。

「よろしく伝えておいてくれって言ってた。また来るみたいなことも言ってたわよ」

「はあ」

灯里は、気のない返事をした。

「灯里、大丈夫なの？」

「何が？」

「あのね、お客様が来たと言ってくれるなんて、本来ならうれしいことじゃない？でも、最近のあんたを見ると、なんか心配になって

くるんだけど」

「ごめん、藍華ちゃん。心配かけて。でも私なら大丈夫だから」

「ホントに？」

「うん。最近はりピーターのお客様も来ていただけのようになったんだよ」

「灯里がそういうなら、別にいいんだけどね」

藍華の不安げな声を最後に、灯里はそっと受話器を置いた。

第7話

「本日は数ある水先案内店の中から姫屋をお選び頂き、誠にありがとうございます。うございます。」

お客様のご旅行が素晴らしいものになることを心よりお祈りしています。本日はありがとうございます」

藍華の明るく弾んだ声がカンナレージョ支店の船着き場にこだましていた。

「さあこれで一丁上がり！」

客を見送ったところで、パンパンと両手を打ち払った。

「お客様は豆腐か？」

藍華は、ハツとして後ろを振り返った。

そこには、やれやれといった表情で晃・E・フェラーリが立っていた。

「晃さん！どうしたんですか？」

「あのなあ、一応これでもチーフ・ウンディーネという肩書きなんだ。

その私が、支店に顔を出して、何かおかしいか？」

「別にそういうつもりで言ったわけじゃないんですけども」

晃は、軽く咳払いをすると、改まった感じで話を切り出した。

「実は今朝なんだが、団体客の予約があっただ」

「そうなんですか。忙しくなりそうなんですな」

藍華は何気なくいつものことだといった調子で言葉を返した。

が、次の瞬間、顔をこわばらせた。

「ちよつと待つてください、晃さん？わざわざ支店にまでやって来て話すということは、何かあるということですか？」

「確かに。あるといえばあるな」

「ギクッ」

藍華は、何かの攻撃から身を防ぐかのように、体をひねって両腕を顔の前でクロスさせた。

「なにやってんだ？」

「いえ。何か不吉な予感がしたもので。つい反射的に」

「いいか？」

「どうぞ」

「その団体客のツアーを企画した会社が、姫屋の新しく出来た支店に仕事を依頼したいってきたんだ」

「はあ？この支店にですか？なんで？」

藍華は眉を互い違いにして、困惑した表情になっていた。

「わからない。ただ、ハッキリとしているのは、藍華、お前を指名してるんだ」

「わ、わたしを指名？なんなんですか、それ？」

「うくん、何か理由があるんだろうと思うが・・・」

晃も眉間にシワお寄せて考え混んでいた。

「ご祝儀ということも考えられなくもないが・・・心当たりはないのか？」

「そんなのありません」

「ほんとか？よく考えてみる」

「うくん」

「マンホームの賓客一行の件もあつたわけだし」

「そうですねえ。ちなみに、その団体客はマンホームからのお客様なんですか？」

「いや、そこははつきりしていないんだ」

「そうなんですか」

「とにかくだなあ。状況によっては、本店からも応援は出すつもりでいる」

「ありがとうございます。助かります」

「しかし、なんか心配なんだよな」

「大丈夫です。任せといて下さい！カンナレージヨ支店は、今、乗りに乗ってますからー！」

「だからなんだが・・・」

「アリスさん、アメリカ部長がお呼びです」

「はい、わかりました。すぐ行きます」

アリスは、夕陽に照らされたオレンジぶらねつとの船着き場で、先程まで使っていた自分のオールを丁寧拭いていた。

それを所定の位置に立て掛けると、その足でアメリカ部長の部屋へと向かった。

ドアをノックすると、中に入るよう声が聞こえた。

「お疲れ様。そこに掛けて」

アメリカ部長は、机の上の書類から顔を上げながら、アリスに声をかけた。

アリスは言われるがままに、そこにあるソファアームに座った。

そしてアメリカは、テーブルを挟んだ向かい側に座り、こう切り出した。

「時間がないもんだから、早速本題に入りたいんだけど、いいかしら？」

「あ、はい。私は構わないですけど」

アリスは、いつものことだと思いつつも、少し戸惑いを表情ににじませていた。

「実は次回のナイト・パーティーの件んですけど、何か聞いてる？」

「いえ、私はまだ何も聞いてません」

オレンジぶらねつとでは、ゴンドラを使った観光案内以外でもサービスを展開する目的として、主に若い世代を対象とした、ナイト・パーティーと題した催し物を開催していた。

水辺を利用した、ちよつとしたイベントだが、普段改めて話す機会のないウンディーネによるトーク・イベントやお酒を飲みながらのミニライブなど、まだ始まって数回しか開催されていないが、評判は上々だった。

特に、第一回のイベントには、シークレット・ゲストとしてアテナ・グロリーイーが出演したこともあって、大きな話題となっていた。

「実は、次回のナイト・パーティーはサプライズ企画を考えているの」「サプライズですか？」

「ええ。このナイト・パーティーを中心になって進めている運営企画室からの案なんだけど。最初は、結婚式という案があったのね。実

際、そういう要望もあつたらしくて、案件として実際に進めようとしていたらしいの。そうしたら、今度はプロポーズする機会に使わせて欲しいという問い合わせがあつたつていうの」

「そうなんですか」

「そうなつてくると、企画室も乗り気になつてきて、いつそのこと、プロポーズのサプライズパーティーにしてみたらとなつたわけ」

「はあ・・・えっ？やるんですか？そのサプライズ・パーティー」

アリスは、始まつた頃に聞いていた話とは、なんだか違う方向に進んでいるような印象を受けていた。

夜のネオ・ヴェネツィアの魅力を紹介したり、リピーターを増やす計画など、最初の話では、水先案内店らしいことをやる筈だった。

「そうね。ほぼ決定つてところかしら」

「そうなんですか」

「アリスさんは、あまり賛成じゃないようね」

「い、いえ、そんなことはありません」

アリスは、そう返事をしながらも、水先案内店とどう関連があるんだろうと、思わず言いそうになつていた。

「社内でもいろいろ意見はあるわ。それは十分承知しているつもり。今は、何が出来るか試してみようというところかしら」

「なるほど」

「そこでね、アリスさんにも協力してもらえないかということになつただけけど」

「私ですか？」

そもそも疑問に思っているアリスにとって、あまり気の進まない話になりそうだった。

「協力つて、どういうことをするんですか？」

「そのサプライズパーティーの仕掛人になつてほしいの」

「仕掛人？」

なんかイヤな予感がしていたが、まさに的中してしまった。

「何をしろというんですか？」

「しいて言うなら、愛のキューピッドつてところかしら」

「はあ？」

アリスは眉間にシワを寄せて、露骨に嫌そうな顔をした。

「そんな顔しないで、アリスさん。会社に協力すると思つて引き受けて。このナイトパーティーをうまく軌道に乗せられるかどうかは、今が重要な時期だと思つてるのよ」

アリスは頭の中で、ティンカーベルのような、真っ白な衣装を身にまとつた自分の姿を想像していた。そして、魔法の棒で、カップルのふたりにキラキラ光る魔法の粉を振りかけていた。

身震いしたアリスは、目を閉じて、頭の中で想像した残像を振り払うように、頭を左右に振つた。

「とにかく現在の第一候補には、あなたの名前があがっているの」

「じゃあ二番目もあるということですか？」

いい情報を得たといった風に、アリスは勢い込んで聞き返した。

「いえ、まだアリスさんだけなだけで・・・」

順位には、意味などなかった。

第8話

その女性客はひとりだった。

女性ひとりが特別珍しいという訳ではなかったが、灯里はなんとなく、そのことが気になっていた。

その女性は、灯里がすすめる場所を、と頼んできた。

四十代ぐらいだろうか、落ち着いた物腰だが、それとは反対にてきぱきとした口調で、背筋がしゃんとしていて、毅然としている様子だが優しい雰囲気も漂っていた。

灯里は、なんとなくその女性の印象からイメージした場所をめぐることにした。

ネオ・ヴェネツィアを代表する観光スポットの他に、灯里自身が日々の中で見つけた意外と思えるような場所なども巡った。

その女性の様子からは、おおむね満足しているように見えた。

だがその一方で、何か灯里の中で引つ掛かるような部分もあった。

「素敵な観光案内だったわ。ありがとう」

「いえ、こちらこそお客様に楽しんでいただけて何よりです」

「ただ・・・」

その女性はそういったまま、黙ってしまった。

「あの、お客様？何かありましたでしょうか？」

灯里は、その女性の反応に戸惑いを隠せずにいた。

「ウンディーネさんにこんなこと言うの、失礼かもしれないけど」

その女性はためらっていた。

「あの、お気遣いなさらずにおっしゃってください」

灯里は、その女性が本当のところ、何を思っているのか知りたかった。

自分の観光案内がどんなものだったのか、率直な感想を聞く必要があると感じた。

「わかったわ。それなら言うわね」

灯里は、ごくりと唾を飲み込んだ。

「ウンディーネさんはどうだったのかしら？」

「私がですか？」

灯里は、その以外な問いかけにキョトンとしていた。

「そう。ウンディーネさん自身、楽しかった？」

灯里は、すぐには言葉が出なかった。

「あなたが自分なりに工夫して、私に案内する場所を考えてくれたことはとても伝わったきたし、うれしかったわ。ただ、それをあなた自身が楽しいと思えたのかということなの」

「お客様に楽しんでいただけたのでしたら、それは私にとってもうれしいことですけど・・・」

灯里はその女性の真意が計れずにいた。

「ごめんなさいね、ウンディーネさん。唐突にこんな失礼なこと言うて」

「いえ」

その女性は前を向いたまま、灯里に背中を向けていた。

その背中が、灯里にとっては、何かを突きつけられているような姿に見えた。

「あの、すみません。もしよろしければ、どういふことか聞かせていただけないでしょうか？」

灯里の真剣な問いかけに、その女性は少し微笑むと、海に目を向けたまま話し始めた。

「実はね、あなたがシングルのときに、一度だけ乗ったことがあるの。あなたのゴンドラに」

「そうだったんですか？それは失礼いたしました」

「別に覚えているかなんて、そんなバカなことをいうつもりじゃないわ。ただ、私にとって、とても思い出深い経験だったから」

「思い出深い、ですか・・・」

「ええ」

その女性客は、昔を懐かしむように、そして記憶をたどるように話し始めた。

「仕事の関係もあつて、昔からネオ・ヴェネツィアには来ることが多かった。その時いつも、ゴンドラを優雅に漕いでいるウンディーネた

ちの姿に魅了されていたの。そのうち、そのゴンドラにも乗るようになり、いつしかネオ・ヴェネツィアのファンになっていた」

女性は無邪気な、若い頃の姿に戻ったかのような表情だった。

「そしてある時、そのウンディーネに遭遇した。誰よりも優雅で誰よりも美しく、誰もが振り向くような存在。それがアリシア・フロレンスだった。でも私がそれ以上に惹き付けられたのは、彼女のゴンドラに乗っているお客さんたちの顔だった。みんなとてもしあわせそうで、このネオ・ヴェネツィアを巡ることを本当に楽しんでるようだったわ」

灯里自身にも想像ができるような話だった。

「是非彼女のゴンドラに乗ってみたい。そう思ったのだけど、やはり無理だった。彼女は水の三大妖精とまでいわれている存在で、予約を取ることにすら困難だった。でもそれではなかった、彼女に驚かさされたのは、彼女の所属するお店、ARIAカンパニーは、彼女ひとりだということだった」

その女性客は、軽いため息を漏らすと、少しトーンを落として話を続けた。

「私その頃、少し仕事に行き詰まっていた、このまま仕事を続けるかどうか迷っていたの。そんな時だった、彼女を知ったのは。ひとりで会社を切り盛りしながら、ひとりで立派にウンディーネをやっていた。どうしてあんなに笑顔を絶やさず、優雅にゴンドラに乗ってられるのか。ますます、彼女のゴンドラに乗りたくなかった。そうすれば何か答えがわかるんじゃないかってね」

「それでどうだったんでしょか？」

「結果的に乗ることはできたわ」

「結果的に？」

「そう、結果的に。普通なら無理だったと思う」

「はあ」

「だから」

「はい」

「コネを使いまくった！」

「ええ〜!!」

「ハハハハ」

「す、すみません」

「今まで仕事を頑張ってきたのは、このためだったと言わんばかりに、知り合いから知り合いへと辿って行って、やっと頼み込んだ」

「そうなんですか・・・」

「それでも予約が取れたのは三ヶ月先だった。私のコネってこんなもんなのねって痛感させられたわ」

「いや、それでもすごいと思いますけど・・・」

「でもね、答えは出なかったわ」

「はあ」

「違うわよ。彼女の観光案内は最高だった。これは確か。答えが見つからなかったのは、もちろん私の方。彼女は私と違って特別な存在なんだと思って納得しようとした。でもそれも違ってた」

「どういうことでしょうか?」

「気になる?」

「はい」

「どうしようかなあ・・・」

「ええ〜! あつ、すみません」

「ハハハハ」

灯里は、話を聞いているうちに、自分もその女性と同じ立場に立っているような気分になっていた。そして、その時のアロシアとの出会いがどんなものだったのか、気になって仕方がなかった。

「実は、それからしばらくは、ネオ・ヴェネツィアに来る機会がめつきり減っちゃって。そうになると、自然と足が遠のいてしまった。でもまた、仕事の都合でここへ来るようになった。そうしたら、偶然にもアロシアさんのゴンドラと遭遇したの」

「はい」

「でも、いつもの彼女の姿ではなかった」

「いつもの姿・・・」

「彼女は座席に座っていたの。そして、そのゴンドラを漕いでいる別

のウンディーネを楽しそうに眺めていた」

「えーと、それは、つまり・・・」

「そう。つまりそれは、あなた」

「今度はスムーズに予約が取れたわ」

「は、はい。そうだと思います」

「楽しみだった」

「私の観光案内が、ということですか？」

「そうよ。ARIAカンパニーはアリシアさんひとりだったわけでしょ？それが誰かのゴンドラに同乗していた。つまり、後輩を指導していたということでしょう？」

「そういうことになります」

灯里はちよつと照れ臭そうに答えた。

「あのアリシアさんが育てている後輩。すぐに手を確かめたわ。グローブは片方だけ。だからすぐに予約を入れたの」

「それでそのおっ、どうだったでしょうか？」

「結論から言つて」

「はい」

「とつても楽しかった！」

「ああそれはくなによりですう」

「その時のことも忘れられないわ。アリシアさんがそばにいて、あなたがゴンドラの上に立っていた。そうしたらアリシアさん、なんて言つたと思う？」

「なんて言つたんでしようか？」

灯里はなんとなく察しがついたが、一応聞いてみた。

「もしかしたら、観光案内をさせて頂いたことありますかって」

「はあ」

「本当にあの時は驚かされたわ。でもね、思い出深いのはその後のことだった」

「あと、ですか？」

「アリシアさんは、あなたが観光案内をする姿を見て、本当に嬉しそうに、そして楽しそうにしていた。それに指導らしいことは何も言わな

かった。ただ一緒になって、観光案内ができることを、本当に喜んで
いるようだった」

「アリシアさん・・・」

「私もいつの間にか、一緒になって楽しんでた！」

「はひっ！」

「あんな経験、後にも先にもあの時だけだった。とても素敵な経験を
させて頂いたと思ってるの」

灯里は、ARIAカンパニーの船着き場でその女性客に手を差しの
べた。

階段を上がり、正面のカウンターの前まで来ると、カウンターの上
の小さな植え木鉢と小さな花に目が止まった。

それを見たその女性は、優しい笑みを浮かべた。

「かわいいお花ね」

そうやって、灯里の方に振り返った。

「これはあなたか？」

「はい。私が植えました。でも時々、シルフのウツデイさんが届けて
くれるんです。季節が変わるのがすぐにわかるからって、一番早く咲
いた花を持ってきてくれます」

「そうなんだ。いいお友達がいるのね」

「はい！とつてもいい人なんです！」

灯里は、本当に心から嬉しそうな笑顔をみせた。

その女性は、その笑顔を見て、にっこりと微笑んだ。

「今日は本当にありがとう。余計なことを言ってしまったって、不愉快な
気分にならせてしまったなら、ごめんなさいね」

「あ、いえ、そんなことはありません。いいお話を聞けたと思っていま
す」

「いい話？」

「はい。実は最近、ちょっと停滞気味だったんです。仕事は、それなり
に順調だったんですが、何て言うか、こう、うまく言えないんですけ
ど・・・」

「大事なものが見えなくなってしまうたような感じ、とか？」

「えっ、なんでわかるんですか？」

「なんとなくそう感じただけよ」

灯里は、ハッと我に返った。

「す、すみません。お客様に馴れ馴れしくお話をしてしまつて」

「大丈夫よ。別に気にしてないわ。私だつて、ただの客の分際で、偉そうなこといつたわけだし。ここは、おあいこということで。ね？」

「はい」

「そういえば、彼女元気かしら？」

「えっと、誰のことでしょうか？アリスアさんですか？」

「アリスアさんにも会つてみたいけど。彼女ではなくて、姫屋の、あの元気印の娘」

「元気印・・・もしかして、藍華ちゃんのことでしょうか？」

「そうそう。オーナーの娘さんの藍華さん」

「藍華ちゃんとお知り合いなんですか？」

「お知り合いというほど知り合いではないけどね。彼女覚えてなかったみたいだし」

「そう言つて、その女性はトホホといった残念そうな仕草をして見せた。」

灯里は、目をまんまるくして見ていたが、その仕草に思わず吹き出してしまった。

「この前、ここで久しぶりに会つただけだ。私としては、偶然とはいえ、ちよつと嬉しかったんだけどね」

と、もう一度トホホと泣いてみせた。

そして、顔を上げると、ふたりはお互いの顔を見て笑いあつた。

だが、灯里の顔色が変わった。

「えっ、ちよつと待つてくさい。この前ここで会つたんですか？」

「そうなの。すっかりウンディーネ姿が板についてたから、驚いたけどね」

その懐かしそうに話す女性の顔を見て、灯里は不思議そうに尋ねた。

「あのー、すみませんが、お客様つていつたい、どなた様でしょうか？」

第9話

藍華は、朝からカンナレージョ支店のエントランスを行ったり来たりと、忙しく動き回っていた。

先日、突然舞い込んできたツアー客の予約の、その当日を迎えていたからだった。

そのため、晁から話があったように、本店から数名のプリマが応援に来ていた。

「大丈夫よね？今さら私が心配してもしようがないけど」

「晁さんから大体のことは聞いていますので、大丈夫だと思います」

「そうよね。別に特別なことをするわけでもなく、普段通り観光案内をすればいいだけだからね」

そう言っている藍華が、一番普段通りではなかった。

「でも今更だけど、なんでうちみたいなの小さな支店を指名してきたのやら、意味がわからないのよね」

「藍華さんのお得意様だと思っていましたけど、違うんですか？」

「それがわかんないのよ。でも、うちを指名してくれるなんて、ありがたい話なんだけど」

「藍華さんも出るってつ聞きましたけど、本当ですか？」

「うん。なんかね、私が出ることが条件みたいなことを言ってるらしいのよね」

「すごいですね、藍華さん」

「すごいのかなあ。ハハハハ」

藍華は後頭部をかきながら、照れくさそうに笑った。

「支店長！お客様が来られました！」

「は、はい！」

藍華は従業員の声に弾かれたように、正面玄関へと飛んでいった。

そこには、十数名程のツアー客とツアーコンダクター、そして改まったようにブレザーを着たツアー会社の女性社員が玄関前に立っていた。

「いらっしやいませ。本日は数ある水先案内店の中から姫屋をご指名

頂き、まことにありがとうございます。どうぞ中へお入り下さい」

藍華はそう言つて、従業員に店内へ案内するよう促した。

その横でブレザー姿の女性が藍華に近づいてきた。

「アクア・トラベルのアサカ・マリアーノと申します。本日はよろしく
お願いします」

「姫屋カンナレージョ支店の藍華・S・グランチエスタと申します。こ
ちらこそよろしく申し上げます」

藍華は姿勢をピンとさせ、頭を下げた。

「またお会いできて光栄です」

その女性は明るい笑顔でそう言った。

「えっと、またというのは？」

「覚えてませんか？」

藍華は、まじまじとその女性の姿を見た。

「ARIAカンパニーでお会いしたといえば、わかりますでしょうか
？」

「ARIAカンパニーでお会いした？」

藍華の頭の上には、はてなマークが浮かんでいた。

「現在のARIAカンパニーについて、いろいろお聞きしました」

「えっと、まさか、あの時の方ですか？」

藍華が驚くのも無理はなかった。

先日、灯里がいないときにARIAカンパニーで出くわした女性。

その時とは、まるで別人だった。

ブレザー姿でキリツとした印象は、先日のラフで自由な感じとは
まったくと言っていいほど違っていた。

「今日は仕事モードです」

「これはどうも失礼いたしました」

その女性、アサカ・マリアーノはへほんとは三度目なんだけどね」と
心の中で呟いていた。

「藍華さんもゴンドラに乗っていただけなのよね？」

「はい！そのように伺っていますので」

「よかった」

「あの、その事も含めていろいろとお聞きしたいことがあるのですが・・・」

「そうよね。でも、それは追々ね。お客様もいることだし」

「そ、そうでした！ひとまず、失礼します！」

藍華はアサカに一礼すると、急いで店内へと戻って行った。

アリスは衣装室にかけられた一組の衣装をじっと見つめていた。

白地にキラキラ輝くスパンコールが散りばめられた半袖のシャツに、薄い生地で出来た、花びらのように幾重にもかさなつたシースルーの短いスカート、同じく白いハイヒールと白く細い棒のようなもの。

「こ、これは・・・」

「ティンカーベルです」

企画室の女性社員は、あっさりと答えた。

「なぜ、ここに・・・」

アリスは呆気にとられて言葉が出てこなかった。

今回のナイトパーティーで協力するとは言ったものの、本当にこんなことになるうとは、思いもよらなかつた。

「本当にこれを着るといふんですか？」

「お嫌ですか？」

「嫌とかそういう問題ではないように思うのですが・・・」

思わず大きなため息をついた。

「ところで、そのサプライズパーティーの話はどこまで進んでいるのですか？」

「一応問い合わせのあつた男性との間で、話を進めているのですが・・・」

企画室の女性は、アリスの問いかけに、なんともはつきりしない返答をした。

「それって、まだはつきりと決まっていけないということなんですか？」

「決まっているには決まってるんですが、もしかしたら日程の方で変更があるかもなんです」

「それって何かあったんですか？」

アリスは、少し慚然とした表情で聞き返した。

「彼女さんの方が、仕事の都合で予定していた日程では無理かもしれないと。あくまでもサプライズでプロポーズするという企画なので、そこはうやむやにしたいくないと彼氏さんの方からのたつての希望なので」

それを聞いたアリスは、またもやため息をついた。

「仕方ないですね。でも、このティンカーベルの衣装だけはなんとかならないですか？」

「これは企画室全員一致の案なんです」

そう言っつてその女性は、にっこりと微笑んだ。

こんなことをして一体何が楽しいのだろうと、どうしても納得できない苛立ちと諦めの狭間で揺れ動く気持ちを抑えながら、アリスは衣装室をあとにした。

灯里は、アサカ・マリアーノから言われた言葉が頭の隅から消せずにいた。

確かに、アリシアがいた頃は、仕事をすることに夢中で余裕はなかったが、それでもアリシアと一緒に観光案内ができることに喜びを感じていた。

だが、プリマに昇格し、その後にアリシアが引退を表明、すぐにARIAカンパニーを引き継ぐことになり、何もかもひとりで、ということになって余裕がない日々が続いたのは確かだった。

しかし、一年が経過して、以前より周りが見えてきたはずなのに、今の灯里は、何か足りないと感じていた。

それをアサカには、灯里自身が充実した気持ちで観光案内をしているように見えなかったのかもしれない。

灯里は、そんなモヤモヤした気持ちを抱えながら、今朝もいつものようにカウンターを拭いて、開店準備に忙しくしていた。

「私って、どうしちゃったんだろう」

そんな様子を見たアリア社長が、灯里の足元に近づいてきた。

「ばいちゃ?」

「アリア社長、ありがとうございます。いつも心配かけてすみません」
灯里はその場にしゃがみこんで膝をかかえると、アリア社長に話しかけた。

「こんな私ですが、これからも見守っていただけますでしょうか?」

「ばいにゆーい!」

アリア社長は、背筋をしゃんと伸ばすと敬礼して見せた。

「アリア社長、頼もしいです!」

すると、カウンターの外から、いつもの容赦ない突っ込みが聞こえてきた。

「あんたたちは、朝もはよから何をやってるわけ?」

「びつくりしたー!おはよう、藍華ちゃん」

「おはよう、灯里。どうしたの?なんかあった?」

「うくん。あるような、ないような・・・」

「なんなの、それ?」

「エへへ」

「気の抜けた返事ねえ」

「藍華ちゃんこそどうしたの?こんなに早く」

「そうだった。灯里に早く教えてあげようと思って来たのよ」

「何?」

「この前、灯里がいないときに、ここで会った人のこと、話したじゃない?」

「うん、話した」

「その人どこないだ会ったのよ」

「それって、もしかしてアサカさんのこと?」

「えっ?なんで知ってんの?」

「だってこの前、お客様として観光案内したばかりだもん」

「そうなの?なんだあ」

藍華はガクツとうなだれた。

「どうしたの、藍華ちゃん?」

「この前ね、うちのカンナレージョ支店を指名して、団体客の予約が

あつただけどね」

「すごいじゃない、藍華ちゃん！」

「しかも、わたしもプリマとして観光案内するという条件でね」

「すごい！藍華ちゃん、もうスターだね」

「ス、スター？よくわかんないけど・・・」

「それでどうしたの？」

「その会社の社員としてお客様と一緒にやって来た人が、そのアサカさんだったというわけなの」

「そう言えばそんなようなことも言ってたような・・・」

「はあ？ほんとにあんたって、話しいのない人よね」

「そんなことないと思うとけど・・・藍華ちゃん！すごい！やったね！」

「なんか、怒る気もしない」

「そんなこと言わないで。藍華ちゃくん」

「それでどうだったの？」

「もちろん問題なく無事に観光案内を勤めあげることができたわよ」

「よかったね、藍華ちゃん」

「まあそこはね。一応支店としては、これから先のこともあるし、今回このことがいい評判につながって行けばって思ってるしね」

「そうだねえ。支店といっても、姫屋の支店だしねえ」

「あんた、また他人事みたいな言い方してるけど、ARIAカンパニーだって同じでしょ？」

「まあそうなんだけど・・・」

「そうだ。それで思い出したんだけど、アサカさんのことで灯里に聞こうと思ってたのよ」

「アサカさんのこと？」

「そうそう。結局ね、あまり話ができなかったのよ、アサカさんと。なんでわざわざ支店を指名するなんてことになったのかを聞いたかったんだけどね」

「それに藍華ちゃんもプリマとして同乗したってことだもんね」

「そうなのよね。それで灯里、あんたアサカさんのこと、なんか知らないの？」

「実はね、アサカさん、私がシングルの時に観光案内してたんだって」
「えっ、そうなの？」

「もともとは、アリシアさん目当てだったんだけど」
「まあ、そうでしょうね」

「そのアリシアさんが後輩を指導している、と知って私に興味がい
たらしくて」

「それは確かにわかる気がするわ。あのアリシアさんが指導している
ということは、アリシアさんが認めたウンディーネということにな
る、ということでしょう？」

「エへへへ」

「気持ち悪い笑い方禁止っ！」

「ええっ!!」

「とにかくあんたとは、あさからぬ縁というか、つながりはあったとい
うことね」

「そういうことになるみたい」

「そうか。だとすると、やはり私たちとは、何か過去に接点があったと
いうことよね」

そう言って藍華は腕を組むと、目をキラーンと光らせた。

「そう言えばアサカさん、藍華ちゃんとここで会った時に、ウンディー
ネ姿がいたについていて驚いたって言ってた」

「私のウンディーネ姿？」

「うん。藍華ちゃんも以前に会ってるんじゃない？そんな感じがする
んだけど」

「言われてみればそうかもしれないわね。というか、そんな気がして
きたー」

「藍華ちゃん」

「これはちよつといろいろ調べてみる必要があるかも」

第10話

サン・マルコ広場は今日も多くの観光客で賑わっていた。行き交う人のなかには、ウンディーネたちの姿も多く見かけられ、観光客の記念撮影に応じている光景があちこちで見かけられた。

そんな中、ウンディーネ自身にカメラを向け、熱心に撮影している男性の姿があった。

中にはそんな男性の姿に気がついたウンディーネが、怪訝な表情で足早に通り返っていた。

その男性が別のウンディーネを見つけ、カメラを向けようとした時だった。

背後からその男性の肩の辺りをツンツンと人差し指でつつく人の姿があった。

「すみません。今いいところなんで、後にしてもらえませんか?」

男性は、そう言いながらファインダーから目を話そうとせず、そのまま撮影を続けようとした。

「ちよつと、アンター!」

その男性に背後からかけた声の主は、ウンディーネ姿ではあったが、男勝りな雰囲気か漂っていた。

「それ、やめてくれませんか?」

「それって?」

男性は声のする方に、カメラを構えたまま振り替えた。

ファインダーの中には、厳しい目線でこちらを見る、制服の赤と白のコントラストが印象的なウンディーネの姿があった。

男性は驚いて、カメラをおろした。

「あつ、どうも」

そこに腕を組んで仁王立ちでいたのは、晃だった。

「どういうつもりで、そんなことやってるのか、聞かせてもらえますか? 事と次第によっちゃあ警察に来てもらうという手もあるんですけどね」

晃のひるまないその姿に、男性は自然と後退りしていた。

晃の声を聞いた、近くにいた人たちが、その様子に注目し始めた。
「あの人、姫屋の晃さんじゃないか？」

「そうだ。水の三大妖精のひとり、現在の実質的なウンディーネ界のトップ、晃・E・フェラーリだ」

「何があつたんだ？」

二人の周囲がざわつき始めた。

「どうしますか？このまま警察にでも行きますか？」

晃は強気な姿勢でぐつと一歩前に踏み出した。

「オレはただ、ウンディーネさんの姿を記念に撮っておこうと思っただけで、何もおかしなことはしていませんよ」

「あのですね、それ自体がおかしなことなんですけど」

「オレは、このネオ・ヴェネツィアのウンディーネさんは、本当に素晴らしいと思つたんですよ。オレみたいなのに、生きる勇気を与えてくれるなんて、本当に感動したんです」

「生きる勇気？感動？」

「その通り！」

晃は、その男の口から出てきた言葉があまりにも意外だったので、少々呆気にとられてしまった。

「それでその後どうなつたんですか？」

藍華は怪訝な表情で晃の話聞いていた。

二人はカンナレージョ支店のエントランスの隅にしつらえられたソファに向かい合つて座っていた。

つい先ほどサン・マルコ広場で起こつた出来事を、晃は神妙な面持ちで藍華に説明しているところだった。

「とりあえず、事情だけ聞いてその場で別れたんだが・・・」

「警察は？」

「一応その人も観光客だったし。第一、直接の被害があつたわけではなかったしな」

「でもそれって、ちょっと心配じゃないですか？」

「藍華、お前の気持ちもわかるが、そう騒ぎ立てるわけにもいかないだろう？」

「まあ、確かに」

「何か気になることでもあるのか？」

「私も一応支店を任される身にもなった訳ですし。それに、先日の後輩ちゃん的一件もあります」

「ああ、あの件か。確かにそう言われると、このネオ・ヴェネツィアはウンディーネだらけだからな。何かあってからでは困るな。一度アリシアとも相談してみるか」

「でも、なんなんですか？その、勇気だの、感動だのと言うのは？」

「どうやらゴンドラに乗って観光して回ったらしいのだが、その際にその時のウンディーネといろいろと話をしたらしい。自分の生い立ちやら何やら話をしたらしく、そのウンディーネが親身になって聞いてくれたと言うんだ」

「でもその感じだと、いい話に聞こえますけど。なんでそんな人が盗撮みたいなこと……」

「いやいや待って待て、藍華。まだ盗撮と決まった訳じゃない」「違うんですか？」

「別にそこまで言ってる訳じゃないんだ。事情も聞いた上で、撮影した写真も確認した。そんないかがわしいものでもなかった」

「いかがわしい？ウンディーネをどう撮ったら、いかがわしくなるのやら……」

「というより、バッチリ綺麗に撮影されていた」

「バッチリ？盗撮がですか？」

「いや、だから盗撮と決めつけるのもどうか……」

「私はそんな盗撮男は絶対認めません！」

「あのなあ」

「ウンディーネの親切心を台無しにしてる訳じゃないですか？そもそもそのウンディーネも親切心とはいえ、ちよつとガードが甘いんじゃないですか？一体どこのウンディーネなんだか……」

「おそらく、ア……」

「えっ、なんですか？何かご存知なんですか？」

「い、いや、詳しいことまではだなあ……」

「うちの支店でも、ちゃんとウンディーネ教育をしないとですね！」

藍華は腕を組んで、鼻息荒く「ふん」と息を吐き出した。

「本日はありがとうございます。またのご利用をお待ちしております」

運河のほとりにある船着き場で、アリスはゴンドラを降りた客の後ろ姿を見送っていた。

すると、それまでのにこやかな笑顔が嘘のように、脱力感いっぱいの表情へと変わった。

「はあ〜」

アリスは、自分がティンカーベルの衣装を身にまとい、いかにも天使のように人前で魔法の杖を振っている姿が、朝から頭の中をぐるぐる回り続けていた。

その度に身震いし、頭を左右に振ってはその光景を打ち消すのだった。

「あれだけは、なんとかしないと・・・」

アリスはそんなことを頭の中で巡らしながら、船着き場を離れようとゴンドラに乗り込んだ。

「あのー、すみません」

アリスは呼び掛けるその声に、くるりと振り向いた。

綺麗な栗毛を長く伸ばした女の子がそこに立っていた。少しウェーブのかかったところが、顔から受ける印象より大人びて見えた。

「はい、なんででしょうか？」

「もしかして、オレンジぷらねっとのアリス・キャロルさんですか？」

「ええ、そうですか」

「よかったー！こんなところでお会いできるなんて」

その女の子は胸の前で両手を握りしめて感動している様子だった。

「わたし、以前からお会いしたいと思っていたんですの」

「ですか？」

アリスはそれとは対照的に冷静な面持ちだった。

「どういったご用件でしょうか？」

そう問いかけはしたが、呼び止められる理由については、おおよその見当がついていた。

「実は私、ウンディーネ志望なんです」

「そうなんですか・・・」

これまたよく聞かされる話だった。

ウンディーネに憧れる人が増えるのは、ありがたい話なのだが、ネオ・ヴェネツィア国際映画祭以降、この手の話を何度聞かされてきたことか。

「頑張ってくださいね。それでは私はここで・・・」

そう言って、アリスはゴンドラを出そうとした。

「アリスさん、私、オレンジぶらねつとに入りたいんです」

「そうですか」

「ですので」

「はい」

「お口添えいただけられないでしょうか？」

「お口添え？」

「はい！」

その無邪気で屈託のない、明るい笑顔に、アリスの口は空いたままになっていた。

「どうして私があなたのために、その”お口添え”をしなければなら
ないのですか？」

最もな返事だった。

「それはごもつともなのですが・・・」

アリスはその困った表情を見てみると、なんだかこちらが相手を困らせているような気分になってくるのだった。

それに、先ほどからその女の子の話す口調や佇まいが、見た目の印象と違い、落ち着いて見えるところが気になっていた。

「あの、つかぬことをお尋ねしますが、年齢はおいくつですか？まだ学生ですよね？」

「アラトリア・グレースと申します。年齢は十五歳、ネオ・ヴェネツィア国際学院に通っています」

アリスはその場で少し固まってしまった。

自分より年下でありながらこの落ち着きぶり。しかも学校はお嬢様学校として知られている名門校。

落ち着いて見えるのは、育った環境なのか、それとも何か他に特別な理由があるのか。

「失礼なことを言うかも知れませんが、あなたのような恵まれた環境にいる方が、なぜウンディーネを志望されるのでしょうか？見た目と違って、ウンディーネも結構大変なところのある職業なんですよ」

アリスは少々非難めいた口調で言った。

「私には勤まらないということでしょうか？」

「そんなこと、私にはわかりません。今初めてお会いしたばかりですし」

「確かにそれは、ごもつともでございます」

アラトリアと名乗る女の子は出会った最初の印象と違って、意気消沈といった表情だった。

アリスは、その様子を見て、深くため息をついた。

「しようがないですね。よかつたらお話、お聞きしましょうか？」

うつ向いていた女の子が、アリスの言葉にパツと顔を上げた。

「つまり、ご家族は反対されているということですか？」

アリスとアラトリアは、運河のほとりにある、小さなカフェにいた。テーブルを挟んで向かい合って座っていたが、注文した紅茶のカップは手付かずのまま、二人の前に置かれていた。

「ええ、今は確かにそのような状況です」

「それだと私がどうこう言えるような話ではないように思うのですが？」

「いえ、そうではないのです。このままだとオレンジぶらねつとは違う、別の水先案内店に入ることになるかもしれないのです」

「別の水先案内店？」

「はい」

「それって一体どういうことなんですか？」

アラトリアは、目の前のカップを手に取ると、少しばかり口をつけ

た。

「実は私の唯一の理解者といえますおばあさまが、私がウンディーネになることを理解していただけたようになったのですが、働くお店を勧めてくるのです。ほぼ強制的かつ限定的に」

「強制的かつ限定的・・・ですか？」

「そうなんです。何故かそこをやたらと推してきまして。私は最初からオレンジぱらねっと一本に絞っているわけです。でも私の唯一の理解者であるおばあさまを敵に回す訳にはいかず、困り果てている次第です」

「それで私の口添えが欲しいということなんですか？」

「その通りです！」

アラトリアは、ようやく話が通じた喜びで笑顔満面だった。

「でも話を元に戻しますが、なぜ初対面のあなたの口添えなるものをやらないといけない訳でしょうか？そもそもそんなことに説得力があるとは思えません」

「何をおっしゃってるのですか？」

アリスはアラトリアの言葉の勢いに引いてしまった。

「アリスさんは私たちウンディーネを目指すものたちの憧れであり、希望の光なのです。そのような方にお口添えをいただけただけとしたら、どれだけの後押しになるか計り知れないぐらいです」

アラトリアがアリスに対して相当な尊敬の念を抱いているのはわかったが、その尊敬している人に、そもそもこんな頼み事をするだろうか。

アリスは腑に落ちない気分で、アラトリアの顔をじつくりと眺めた。

「あ、あの、私の顔に何か・・・」

アリスのじつと見つめる眼差しに、アラトリアは思わず頬を赤らめていた。

「少し考えさせてもらえませんか？」

「考えていただけるのですか？」

アラトリアはパツと花が咲いたように明るい顔になった。

「あくまでも考えると言ったままで、引き受けるとは言ってませんよ。いいですね?」

アリスはアラトリアのはやる気持ちを察して、釘を差しておこうと思っただ。

「でも確認をしておきたいのですが、どうしてもオレンジぷらねつとでないとダメなのですか?」

「当然でございます」

「その唯一の理解者であるおばあさまが推している水先案内店でも、どうしてもダメなんですか?」

「ダメ、というわけではないのですが・・・」

「最悪そこでも構わないということですか?」

「いえ、そのような考えは私には微塵もありません!」

「一体そんなにも避けたい店つてどこなんですか?」

アラトリアは少し間をおいて、こう答えた。

「ARIAカンパニーです」

アリスは紅茶を飲もうとカップを持ち上げかけたところで手が止まった。

「ア、ア、アリ・・・」

「アリスさん、何か?」

「あの、アラトリアさん、後学のために一応聞いておこうと思うのですが・・・」

「なんででしょうか?」

「あ、いや、聞かない方がいいかも・・・いえ、ここは聞いておかないといけないのかも・・・」

「アリスさん、どうされました?」

アリスは少し咳払いをすると、気を取り直して尋ねてみた。

「その、アラトリアさんが今言われたARIAカンパニーでは、どうしてもダメなんですか?」

「そのことですか・・・」

アラトリアは視線をテーブルに落とすと、少し考えるように目を閉じた。

「正直申しまして、わたくし、将来は起業を考えています」

アリスはアラトリアの意外な返答に戸惑った。

「えっと、それはどうということ・・・」

アラトリアはまっすぐにアリスを見つめ返した。

「まだハッキリと答えがあるわけではないのですが、将来はこのネオ・ヴェネツィアで起業し、ビジネスすることを考えています」

「はあ」

「そうなる、ARRIAカンパニーとは方向性が違うと言ったらいいでしょうか。もちろん、昨年まで在籍されていたアリシアさんの活躍は理解しているつもりです。ただ、昨今のARRIAカンパニーは以前とは違う印象というか・・・」

アリシアが活躍していた頃のARRIAカンパニーと現在のARRIAカンパニーと、確かに比べてしまうと、灯里には分が悪いかもしくないが・・・

「いまのARRIAカンパニーは、何か問題でもありませんでしょうか？」

アリスは、文句言いたげな表情で言い返した。

「いえ、決してそのようなことはありません。強いて言うならば、方向性が違うと言ったらいいでしょうか？」

「方向性？」

「今のウンディーネさんが、あの偉大なアリシアさんの後を継いで、多分ご苦労されているだろうと思います」

アリスは、道行く人から声を掛けられて、嬉しそうに笑顔で答えている灯里を思い浮かべた。

「しかし、一定の評価を受けているとも聞いています。ただ、なんて言ったらいいでしょうか。少しインパクトに欠けると言いますよ。ウンディーネとして、水先案内店として、得るものがあるようには思えないのです」

アラトリアの、そのあつきりと言いつづ言葉に、アリスは顔を赤くして厳しい表情に激変した。

「一体あなたに何がわかるのでしょうか？灯里先輩は先輩なりに必死になってやって来たんです！」

「あ、いえ、そんなつもりは・・・」

「アリシアさんの後を受け継いだ大変さを一番誰よりもわかっているのは灯里先輩です。それを投げずに頑張ってきたんです。そんなこと、普通じゃできません!」

「ごめんなさい。わたし、そんなつもりじゃ・・・」

アリスの勢いにアラトリアはそれ以上言葉が続かなかった。

「これで失礼します」

アリスは席を立つと、その勢いのまま歩き去った。

「ア、アリスさん・・・」

すると、途中でぐるりとアリスが振り返った。

「お話はなかったことで」

アラトリアは歩き去るアリスの背中を、後悔の念をにじませた表情で見送っていた。

第11話

「もしかして、アサカさん？」

濃紺のジャケットと折り目のしつかりとついた黒色のパンツ姿のアサカ・マリアーノは、声のする方に振り返った。

「お久し振りです、アリゲリータ婦人」

アサカ・マリアーノに声をかけたのは、白髪の老婦人アリゲリータ・グレースだった。

「お仕事？」

「はい」

「お忙しくして、何よりね」

二人がいるのは、マルコ・ポーロ国際宇宙空港のロビー。

アサカは、今しがたマンホームへ帰る旅行者を見送ったところだった。

「アリゲリータ婦人はご旅行ですか？」

「当然よ」

「一体何回目ですか、ネオ・ヴェネツィアは？」

「さあ、何回目かしら」

そう言つて、アリゲリータは笑つて見せた。

「そうだ。丁度いいところで会うことができた」

「なんですか？」

「アサカさん、あなたに相談したいことがあるんだけど。時間よろしいかしら？」

「はい、時間なら大丈夫ですけど・・・」

アサカとアリゲリータ婦人は、マルコ・ポーロ国際宇宙港にあるVIPルームにいた。

アドリア海を一望できる大きな窓から見える風景に、アサカはゆっくりと息をついた。

「まるで別世界の様ですね」

アサカにとって、アリゲリータ婦人は長年の付き合いのある特別なお客様だった。

婦人は、ある財閥一族の出身で、いくつものグループ企業を抱える存在だった。現在はその立場を後身に譲り、退いてはいた。

旅行好きの婦人は、アサカと知り合うようになってからは、アサカを信頼し、多くの客をアサカに紹介してきた。その多くはアリゲリータ婦人のつながりのある、資産家や起業家ばかりだった。

そんな関係のある婦人が相談を持ちかけてくるなんて、一体どんな話なのか。

「お時間を取らせてごめんなさいね」

「いえ、お気遣い無く。ところで、婦人が私に相談なんて、何かあったんですか？」

「そんな深刻なことではないのだけど。実は私の孫のことなの」

「アラトリアさんですよ。確かミドルスクールに通ってらっしゃるとお聞きしています」

「そう。アラトリア。あの娘は今十五歳で、ネオ・ヴェネツィア国際学院に通ってるんだけど」

「名門校ですね」

「アラトリアは小さい頃から私と気が合ってたね。何があっても私はいつもあの娘の味方でいたの。でも最近になって、将来について話すようになって、考え方の違いが出てきて、少し衝突することもあって」

「衝突ですか・・・」

アリゲリータ婦人が理知的で何でも論理的に話す性格だと、アサカは十分に理解していた。その婦人と話で衝突するなんて、アラトリアが勝ち気な性格なのは知っていたが・・・

「あの娘、突然ウンディーネになるって言い出したの」

「ウンディーネにですか？」

名門の家柄の令嬢が、いかなる理由があつたとしても、よりによってウンディーネになりたいって、一体どういうことなのか。

アリゲリータ婦人が自分に相談したいという理由を、アサカはそれで理解できた。

「でもまたどうしてウンディーネを希望されたのでしょうか？」

「実はアラトリアは、将来起業したいらしいんだけど、このネオ・ヴェ

ネツィアで何かしたいと考えていてね。そのためには観光都市であるネオ・ヴェネツィアのことをもっと知る必要があると」

「それでウンディーネということですか？」

「まあ、そういうことらしいのだけど・・・」

アリゲリータ婦人は少し困惑した表情を見せた。

「このネオ・ヴェネツィアで活躍しているウンディーネを身をもって経験すれば、何かを感じ取れるのではないかとね」

アサカは悪い考えではないと思った。

ただ憧れでウンディーネになりたいと言ってる訳でなく、ネオ・ヴェネツィアを知るためにウンディーネになる。

だが、観光の世界に身を置いているアサカとしては、ウンディーネが見た目以上に厳しい世界でもあることも十分に理解していた。

「それでね、実は先日、改めてゴンドラに乗ってみたの」

「婦人がですか？」

「もちろんよ」

旅行好きの婦人とはいえ、年齢的なことを考えても、また安全面を考えても、あまり勧められる話ではなかった。

それでも孫娘のためには、行動せずにはいられなかったのだろう。

「アサカさんが心配するのも無理もないと思う。でも結果からすると、乗ってみてよかった。かなり久し振りではあったけど、思った以上に楽しめたわ」

「そうだったんですか。それは良かったです」

「それに、私の中に少し偏見があったことも認めなくてはいけないと思っただの」

婦人のような現実的な考え方をする女性には似つかわしくない言葉に、アサカは戸惑った。

「ネオ・ヴェネツィアって、こんなにも素晴らしいところだったと、改めて感じさせてくれたわ。考えを改めるいい機会になったと思う」

「それでウンディーネになることをお認めに？」

「そうなるわね。ウンディーネになることは、あの娘にとっていい人生勉強になるだろうし、そこでやりがいを見つけてくれたらすばらし

「いことだと思う」

「確かにいい経験にはなるとは思いますが・・・」

「何か問題でもあるのかしら？」

「そうですね。実のところ、水先案内店に所属してウンディーネになること自体は、それほど難しくはありません。ただ、そこから一人前のウンディーネになれるのはごく一部の人間だけで、最上位の称号であるプリマになるにはとても難しいのが実情です」

「そうなんですか。そう聞いてみると、確かにそうなんでしょうね。納得できる場所があります」

婦人は少し考え込むように目線をおろした。

「それでピクニックなのね」

「ピクニック？」

「ええ。アサカさん、ご存知ない？」

「ピクニックって車に荷物を積んで・・・」

「そうじゃないの。ある日突然先輩が後輩を誘うそうよ。ピクニックに行かない？ってね」

「どうしてまたピクニックなんかに？」

「それは口実で、本当は試験なの」

「試験なんですか？」

「そう。昇格試験。知らなかった？」

「知らなかったです」

アサカは、無邪気に話す婦人の顔を啞然と見つめていた。

「ありがとう、アサカさん。お時間を取らせて申し訳なかったわね」

「いいえ、あまりお力になれず、申し訳ありません」

婦人は先日のゴンドラで観光した日のことを楽しそうにアサカに話して聞かせた。

孫娘が希望するウンディーネに対して、考えを改めるのいい機会になったようだった。

「それに、評判も上々だと聞いたので、少し安心しているの」

「評判ですか？」

「ええそうよ。アラトリアにも、就職するのならそのお店にするよう

に話したの」

「そうなんですか。よかつたらその店の名前を教えてくださいませんか？」

「ARIIAカンパニーよ」

「ARIIAカンパニー・・・」

アサカは婦人の口から出た名前に、意外すぎる印象を感じずにはいれなかった。

「アサカさん、ご存知ないの？」

「いえ、ARIIAカンパニーならよく知っています」

「そうなの？素晴らしいウンディーネがいるという噂だけど。アラトリアの教育にうってつけなんじゃないかしら」

アサカはどう返事していいのか迷っていた。

「その評判なんですけど・・・」

「何かあるの？」

少々ためらいながら、アサカは話始めた。

「ARIIAカンパニーの評判が高かったのには理由があるんです。ウンディーネの世界において、第一人者として名高いグラント・マザーと称えられていた方が、そのARIIAカンパニーの創設者でした。その後を受け継いだアリスア・フロレンスは、類い希なる素質を持ったウンディーネでした。アクアを代表する水の三大妖精のひとつとして称えられていたくらいなんです。だからだったんですが・・・」

「それなら尚更そこに行かせないと」

「違うんです」

「どういうこと？」

「アリスアはもう一年以上前に引退しています。ですので今のウンディーネは、全く別のウンディーネでして・・・」

「そうなんですか。つまり、昔と今とは違うと言いたいのかね」

「そう申し上げた方がいいのではないかと」

アリゲリータ婦人は、アサカの言葉に少しうつむくと、ふっと笑みをもらした。

「違うのよ、アサカさん」

アサカは余計なことを言ってしまったのではないかとうつ向いていたが、婦人の言葉に思わず顔を上げた。

「私が決めた一番の理由は、そのウンディーネさんだからなのよ」

「それは先日観光されたときの、ということですか？」

「そうよ。さりげない心遣いや私たち年老いた夫婦にも当たりまえのように接してくれたやさしきは、どれだけ安心してゴンドラに乗っていられたことか。それに、そのウンディーネさんがこのネオ・ヴェネツィアをどれだけ愛しているかは、彼女の案内する様子を見ていれば、十分に伝わってきたわ」

アサカは、先日自分でも経験したARIAカンパニーの、つまり灯りの観光案内に感じたものとは、まるで違うものを聞いているような印象だった。

「私はその評判が高かった頃のARIAカンパニーをよく知っているわけじゃない。もしかしたらそんな評判とは知らずにそのゴンドラに乗っていたのかもしれないわね。確かな記憶がある訳じゃないわ。ただ言えるのは、ARIAカンパニーのゴンドラでの観光はとてもよかったですということ。そして、あのウンディーネさんがいる水先案内店ならアラトリアを行かせてもいいと思った」

アサカは、窓の外のアドリア海の方に視線を移した婦人の、その笑みをたたえた横顔を見つめていた。

以前にも同じような光景を見た記憶があった。

アリゲリータ婦人には、自分には見えない何かが見えてるのではと、アサカは思わずにはいられなかった。

アラトリアはいい話が聞けたと、ニンマリとしていた。

彼女は屈託のない現実派と言うべきか、利用できるものは躊躇することなく利用する性格だった。

そしてそれは、15歳とは思えない行動力を発揮していた。

街角のカフェで、アラトリアはテーブルを挟んでひとりの女性を前にしていた。

その女性はコーヒーの入ったカップを皿の上に戻すと、上目遣いでアラトリアを見た。

「あのお」

「何かしら？」

「本当にお願ひしますね」

「わかってるわ」

「内緒ですから、この話は」

「大丈夫。安心して。大事な情報は人に聞かせたりしないから」

アラトリアが目の前前の女性から聞き出した話は、最近アリスが頭を悩ませているナイトパーティーのティンカーベルの件だった。

そして目の前の女性は、オレンジぷらねつとの企画室の社員で、グレース財閥の関係者の娘でもあった。

つまり、オレンジぷらねつとの内情を知っていると同時に、アラトリアの頼みを断れない立場の人物であった。

アラトリアにとっては、最近のアリスの動向を探ろうとしていたら、この件を知ることになったというわけだった。

「あくまでもお嬢様だからです。こんなことがばれたら、私の社内での立場が危うくなってしまいます」

「アムネジア？その時は破格の待遇で私の会社に迎えてあげるから」

15歳の女の子が、何の根拠があつてそこまで自信満々で言っているのだろうか。

アラトリアを前にしたアムネジアと呼ばれたその女性は、なんとも言えない気分になっていた。

ただ、アラトリアは確かに実行力のある女の子だった。だから、妙に真実めいた話にも聞こえてしまうのだった。

「でも、アリスさんは、どうしてそこまで拒絶しているのかしら？」

「おそらく、衣装をご覧になられたことが原因ではないかと思ひます」

「衣装？そんなにひどいの？」

「いえ、ひどいというほどではないと思ひます。企画室全員の満場一致で決定したことですし」

「満場一致？一体どんな衣装なの？」

アラトリアは目を輝かせて聞いてきた。

その女性はアリスに見せたときの衣装を説明した。

「きつと可愛いらしいでしょうね。アリスさんですから。見てみたい
気もしますが……」

「ただ……」

アムネジアは気まずそうに言った。

「ただ、何かしら？」

「今回の企画自体がどうなるか、少し危うくなってきたのです」

「危ういの？」

「はい。実はそもそもこの企画のきつかけとなった、そのカップルの
女性の方が、もしかしたら仕事の都合で参加できないかも知れないと
なってきました」

「何それ？オレンジぶらねつとであろう会社が、意外に詰が甘いのね」

アラトリアは怪訝な表情になっていた。

「アリスさんに取り入るチャンスかと思っただけど……」

アラトリアはすつと立ち上がると、「また連絡するわね」と言って、
さっさと店を出ていってしまっただ。

「あ、あの、お嬢様。これを最後に……」

アムネジアは、アラトリアの背中に声をかけてみたが、そのまま
テーブルに視線を落とすと、深いため息をついた。

第12話

アサカは、久しぶりの休日を、自宅へは帰らず、そのままネオ・ヴェネツィアで過ごしていた。

休日といっても、忙しさの中で偶然取れた休みだったこともあつて、時間をかけて自宅に戻るより、ここで束の間のバカンスを楽しもうと考えていた。

そのため、ほとんど無理矢理と言つていいくらいに、娘をネオ・ヴェネツィアに呼び寄せていた。

「お母さん、いきなりなんだから！」

「ごめんごめん。どうしても顔が見たかったの！」

「しようがないなあ」

アサカは娘の腕に自分の腕を絡めると、グツとその身体を引き寄せた。

久し振りに会った友達のように笑顔が絶えないふたりは、ネオ・ヴェネツィアを満喫した。

「仕事じゃないとこんなにも違うものかしら。いつものネオ・ヴェネツィアとまるで違う感じがする」

「そんなに？なんかオーバーな感じがするけど」

「ううん、そんなことないわよ」

アサカは、流れる風に髪をなびかせ、その心地よさに浸っていた。
「でもそうかもしれない」

娘が突然そう言った。

「どういうこと？」

「だって、時々しか来ない私だから感じるのかも知れないけど、ここはいつ来ても本当に変わらない。誰がいつ来ても迎え入れてくれる。そんな感じがするわね」

「誰がいつ来ても迎え入れてくれる」

娘の何気ない言葉がなぜか気になって、アサカは繰り返していた。

「あれ、あの人」

そう呟いた娘が向けた視線の先に、ウンディーネがひとり立っ

た。

だが、そのウンディーネはキョロキョロとあちこちに顔を向けて、かなり焦っている様子だった。

「どうしたんだろう」

よく見てみると、そのウンディーネの後ろに隠れるようにして小さな女の子が立っていた。

「あの人、確かにあのウンディーネさんだわ」

アサカがそう呟くと同時に、そのウンディーネと目があつた。

すると、ウンディーネは驚きと再会とが入り交じつた、なんとも言えない表情になった。

「灯里さん？」

「はいっ、そうです！」

「どうしたの？」

「アサカさくん。どうしましょ〜!？」

「迷子？」

「はい、そうなんです」

その小さな女の子は、灯里のスカートの端をぎゅっと握りしめたまま、灯里の後ろに隠れるように立っていた。

「おかあさんとはぐれてしまったみたいで。それで、見つかるまで一緒にいてあげるといったのですが・・・」

「なかなか現れないと」

「そうなんです〜」

灯里の困りようは、どちらが迷子なのかわからなくなってしまうくらいだった。

「私このあと、仕事なんです。予約のお客様を、もうお待たせしてしまっていると思うんです」

「それじゃこんなところで時間取つてられないじゃないの？」

「そうなんですー!」

だが、ふたりのやり取りを聞いていたのか、その女の子が灯里のスカートを、いっそう力を込めてぎゅっと握りしめた。

「あっ」

それに気がついた灯里が小さく声をもらした。

「大丈夫だよ。おかあさん見つかるまでって約束だもんね」

灯里は観念したように身体の力を抜くと、優しく声をかけた。

すると、アサカの娘がその女の子に近づいて、その場にすつとしゃがみこんだ。

そして、女の子に目線を合わせると話始めた。

「おかあさんいなくて寂しい?」

その言葉に、女の子は恥ずかしそうにコクリと小さくうなずいた。

「でもね、このお姉ちゃんはね、これから大事なご用があるの」

すると今度は灯里の背後に身を隠そうとした。

だが、そのまま顔をあげて、灯里の表情を確かめようとした。

「だからね、私がこのお姉ちゃんの代わりに一緒にいてあげる。もちろん、おかあさんが見つかるまでね」

女の子はどうしようか迷っているようだった。

「いいよ、無理しなくても。お姉ちゃんなら大丈夫だから」

灯里は女の子の様子を見て、そう声をかけた。

しかし、これまで話そうとしなかった女の子が口を開いた。

「ほんと?」

その言葉は、アサカの娘に向けられていた。

「ほんとだよ」

アサカの娘は優しい笑顔で言葉を返した。

すると、女の子はぎゅっと握りしめていた灯里のスカートから手を緩めると、アサカの娘のシャツの袖口を握りしめた。

アサカの娘はゆっくり立ち上がると灯里とアサカの顔を交互に見て言った。

「ということですよ」

「すみません。ご迷惑をおかけして」

「いえいえ、これくらいお安い御用です」

そう言ってアサカの娘はにっこりと微笑んだ。

「じゃあお姉ちゃん行くね」

灯里は女の子に声をかけると、アサカに頭を下げ、そしてアサカの

娘にも軽く合図を送って小走りに駆けていった。

アサカの娘は笑顔の横で手を振って見送った。

「さあ、何して遊ぼうか？」

アサカは、すぐ側でしゃがみこんで女の子に話しかけている自分の娘を、諦めの入り交じった笑顔で眺めていた。

「あんたって、そんなに子供好きだった？」

「別に好きとかそんなじゃないよ。単純にかわいいでしょ？それに困ってる子を見てたら、放っておけないの」

アサカは娘の横顔を眺めながら、昔のことを思い出していた。

「まだあの時のこと、根にもってるの？」

「そんなことないよ」

「本当に？」

「おかあさんこそ、気にしすぎだって」

「それならいいのだけど」

「そんなことより、おかあさんさあ、もうすでに会ってたのなら、そう言つてよ。私、なんにも知らなかったよ」

「えっ、何のこと？」

「さっきのウンディーネさんのこと！」

「さっきのって、灯里さんのこと？」

「名前まで知ってるんじゃない。それならそうと言ってくれればいいのに」

「何のこと言ってるの？」

「何のことって、さっきの人でしょ？あの時のウンディーネさん」

「あの時のって・・・」

アサカは、娘が何を言おうとしているのか、やっと理解することができた。

だがそれと同時に、自分がとんでもない勘違いをしていたのではと、頭の中が真っ白になっていった。

第13話

「アンナ、ひとりで行っちゃダメよ！」
「わかってる！」

そう返事したアンナは、どこで拾ってきたのか、黒い色のアキラ猫を抱き締めていた。

「ひとりじゃないもんね？」

猫に話しかけたアンナは、ドアを開けて表通りに出てきた。

まだ身体の小さな女の子だけに、抱えた子猫が余計に可愛く見えた。

「あれ？アサカさんの娘さんじゃないの？」

すれ違ったおじさんが、そう話しかけてきた。

「違いますよ」

アンナは横を向いてそう言った。

「いやあ、誰がみてもそうだよ。確かにアンナちゃんだ」

「もう、なんで名前まで知ってるの？」

「そりゃあ知ってるさ。こんなに可愛いんだからね」

「これだから可愛い娘って損よね」

「ハハハハ」

「私これから大事な用があるの。だから内緒にしておいてほしいの」

「内緒？どんな用なの？」

「うーん。これはほんとは言っちゃダメなんだからね」

「ダメなの？」

「そうなの。とつても大事なんだから」

そう言ってアンナは回りをキョロキョロ見回した。

すると、そのおじさんの上着の袖を掴んで、自分の方に引き寄せた。

そして、ナイシヨ話をするみたいにおじさんの耳元で何やらささやいた。

「へえ、そうなんだ」

「ほんとに言っちゃダメなんだからね。そうじゃないと、効き目がなくなってしまうんだから」

「わかったわかった。アンナちゃんの言う通りにするよ」

そう言うと、おじさんは笑顔を残してその場を立ち去った。

その後ろ姿を見送ると、アンナは急いで通りを駆け出していった。その数分後、その通りには不安な表情をしたアサカの姿があった。

夫が出張のため、仕方なくネオ・ヴェネツィアまで娘のアンナを連れてきたアサカは、心配していたことが現実になってしまったのとは、後悔の念に苛まれていた。

団体客を連れてくる時にいつも利用していたホテルだったが、チェックや客への対応に、いつも以上に時間がかかってしまったのは、頭の中にアンナのことがあったからかもしれない。

だが仕事の手を抜きたくなかったアサカは、アンナにかまってあげられなかったことを、今更ながら申し訳なく感じていた。

しかし、そんなことを言ってられる状況ではないのかもしれない。アサカは不安で高鳴る気持ちを押さええられずに通りの先の方へと進んでいった。

「アリア社長、ちょっと待ってください！」

灯里は心細い声を出して、そのまあるいお尻を追いかけていた。

「私まだ、そんなにネオ・ヴェネツィアのこと、わかってる訳じゃないんですよ」

すると突然立ち止まったアリア社長は、くるつと振り返って灯里の方を見た。

「ばいにゅーい？」

「アリア社長、やっとわかってくれたんですね？」

灯里は、はあはあと呼吸を繰り返して、その場に立ち止まった。

「ARIAカンパニーの社員になって、まだ間もないんですから。そんなに急がれると、迷子になっちゃいそうです」

だが、そんな灯里の言葉などなんの説得力もなく、アリア社長は、まともやマイペースで走り出した。

「アリア社長、ほんとに困るんです。わたし、帰れなくなっちゃいます」

重い足取りでなんとか追いかけて始めた灯里だったが、その先にいた

アリア社長は、なぜかじつと立っていた。

「どうしたんですか、アリア社長？」

アリア社長は細い十字路の真ん中で、一方の路地の方をじつと見つめていた。

そこに追い付いた灯里は、その目線の先の様子を理解した。

その細い路地の真ん中で、小さな女の子がひとり、ぽつんと立っていた。

そして、じつと上に顔をむけたまま、アパートの隙間から上空を眺めていた。

胸には黒い子猫を抱いていた。

「あの女の子、何してるんでしょうか？」

灯里は不思議そうにアリア社長に話しかけた。

「ばいにゆい？」

ちらつと灯里の方に振り返ったアリア社長は、少しの笑みをたたえながら、そう言った。

「えっ、なんですか、アリア社長？何かあるんですか？」

その声に気づいた女の子は、灯里の方を見た。

その女の子と目が合った灯里は、ぼつが悪そうにごまかそうとして、キョロキョロと辺りを見回していた。

だが、女の子がとぼとぼ歩き出した様子を見て、思わず灯里は声をかけた。

「ねえ、どうしたのー？だいじょうぶうー？」

その声に立ち止まって振り返り、チラツと灯里の方に視線を向けたが、すぐにそのまま歩き出した。

「もしかしたら迷子かなあ」

灯里とアリア社長は、その細い路地を進み始めた。

少し近づいたところで、灯里はまた声をかけてみた。

「ねえねえ、どうしたの？おうち、わからなくなったの？」

女の子は、また立ち止まったが、背中をむけたまま、その場にじつとしていた。

もう少し距離を縮めた灯里は、もう一度声をかけようとした。

「この子がね」

すると、背中をむけたまま、その女の子の方から話始めた。

「その子猫のこと？」

灯里がそう聞き返すと、女の子がくるりと振り返った。

胸には大事そうに抱えた黒色の子猫が、スヤスヤと眠っていた。

「うん。この子がね、おかあさんを探して鳴いていたの」

灯里は、少し膝を折るようにして姿勢を低くすると、その子猫を覗き込んだ。

「かわいいー！」

女の子は子猫の額の辺りを軽くなでて見せた。

すると、子猫の耳がピクンと動いた。そして、ふあ〜と大きなあくびをした。

「それで、おかあさんは見つかったの？」

「ううん、まだ。でも、この子がこっちだつて案内してくれるの。だからここまで来たんだけど・・・」

「案内してくれるって、言葉がわかるの？」

「言葉なんてわかるわけないじゃない」

「そ、そうだよ。エヘヘ」

「この子の目を見てたら、なんとなくわかるの。おかあさんのところへ帰りたいって」

「そうなんだ」

灯里は、子猫を大事そうに抱えた女の子の姿に、優しく微笑みかけていた。

すると、アリア社長が路地の先の方へとゆっくりと歩き出した。

灯里と女の子は、その様子を不思議そうに眺めていると、建物の角でたち止まった。

アリア社長が角の向こうに何か話しかけているような仕草をしていると、その角から黒い猫が姿を現した。

すると、今までおとなしかった子猫が鳴き声を上げた。

「あの猫、この子のおかあさんじゃない？」

灯里の声に反応するかのように、角から姿を現した猫が、その子猫

に呼び掛けるように鳴き声を上げた。

「きつとそうだよー」

女の子はじつとその黒猫を見つめていた。

黒猫も女の子をじつと見つめ返した。

女の子は、ゆつくりとその猫の方へと歩き出した。

そして、その猫の前まで来ると、しゃがみこんで子猫をそつと地面に置いた。

黒猫は、子猫の首をくわえるとその場から、すつと角の向こうに消えた。

女の子は立ち上がると角の先へ走り出した。

しかし、もう猫の姿はどこにもなかった。

「よかったね」

灯里は、女の子の側で誰もいない街角を見送っていた。

辺りはすっかりと暗くなっていた。

街灯があちこちに灯り、どこからか夕げの匂いが漂ってきていた。

「さあ、帰ろう」

灯里は女の子の肩に手をおいて、優しく語りかけた。

女の子もコクリとうなずいた。

「それで、おうちはどこなの？」

「わからない」

「えっ、わからないってどういうこと？」

「私、ネオ・ヴェネツィアのひとじゃないし」

「どういうこと？」

「お姉さんはどこからきたの？」

「私は・・・」

灯里の表情は明らかに困惑していた。

「そういえば、ここどこですか？アリア社長」

「ばいによ」

すると、どこからか灯里に向けて声が投げ掛けられた。

「ちよつとあんた！そこで何やってんの？」

第14話

「ちよつとしっかりしてよね。あんたも一応ウンディーネの端くれなんだから」

「スミマセン」

灯里は、青く長い髪を三つ編みのツインテールにしたウンディーネ姿の女の子の横で、すまなさそうに歩いていた。

「あのく、確か姫屋の・・・」

「そうよ。まだ自己紹介してなかったっけ？」

「聞いたような気もしますけど・・・」

そのウンディーネ姿の女の子はその場に立ち止まって灯里の方に向いた。

「私は姫屋所属の藍華・S・グランチェスタ。ところで、その女の子は？」

灯里のそばを離れずにいる女の子を見て、藍華は尋ねた。

「この子は、さっきの路地で出会ったんだけど・・・」

「何? どういうこと?」

「もう暗いし、帰ろうって言ったんだけど、おうちがどこかわからないって言って」

「つまり、迷子ってこと?」

藍華はため息をついた。

「あのさあ、自分がどう帰っていいかわからない人が、迷子を連れてどうするつもりなわけ?」

藍華はそう言って、その女の子の顔を覗きこんだ。

「ねえ、名前は?」

「アンナ」

「なんだ。ちゃんと答えられるじゃない」

女の子は灯里の横に少し隠れるように後退りした。

「それで、どこから来たの?」

「わからない」

「わかんないって、なんで?」

「この子、ネオ・ヴェネツィアに住んでるんじゃないんです」

「そういうことなのね。じゃあ、お父さんやお母さんは？まさかひとりでネオ・ヴェネツィアに来たってわけじゃないでしょ？」

「ホテル」

「まあ、そうでしょうね。で、どこのホテルわかる？わかるわけないか。だからここにこうしているわけだもんね」

「古い」

「ここはそういう街だからね。ホテルにしても、マンホーム時代から引き継いでやっているところも少なくないしね」

藍華は腕を組んで、ふむふむと目を閉じてうなずいた。

「ボン」

「ボンて、あんたねえ、さつきから連想ゲームをやってるんじゃないのよ」

藍華は両手を腰に当てて言った。だが、何かを思い出したような表情で前方に視線を向けた。

「ん？ちよつと待って！」

「何かわかつたの？」

灯里は、ハツとした表情の藍華と考え込んでいるアンナを交互に見比べた。

「今、ボンて言いかけたわよね？」

「うん、そんな感じだったような・・・」

「他に特徴は？」

「うくん」

「なんかないの？」

「そんな焦らせちゃ可哀想だよ」

焦って何か聞き出すとする藍華に、灯里が思わず割って入った。「そんな悠長なこと言ってどうするの？このままずっと歩き続けるってわけ？」

「そういうわけじゃないけど・・・」

「ねえ、もしかして、あの有名な大きい広場に近いんじゃない？」

「サン・マルコ広場のこと？」

「うん、近かった気がする」

「よっしあー!」

藍華はガッツポーズを決めた。

「え、何? わかったの?」

「多分だけどね」

「やったー! よかった。これで帰れるね」

「うん」

三人は急ぎ足で、すっかり夜となったネオ・ヴェネツィアの街中を進んだ。

「うくん」

アンナは、そのこじんまりとしたホテルの前で、じっと入り口を見つめていた。

「なんか反応が変なんだけど・・・」

「反応が変て、そんなの見れば私だってわかるわよ!」

三人はそのホテルの前で立ち尽くしていた。

「だって、名前にボンがついて、サン・マルコ広場に近いとなると、ここしか思い浮かばなかったのよ」

通りから階段を数段上がったところに自動ドアがあり、その入り口の横の壁にはへホテル・パレス・ボンヴェネチアツティと看板が掲げられていた。

「へパレス・ボンヴェネチアツティって有名なんですか?」

「あ、あんたねえ、こんな立地条件のいいところで、利用しない観光客がいるとでも言うの?」

「なんか、地味というか・・・エへへへ」

藍華はぐったりとなつてため息をついた。

「あんた、本当にARRIAカンパニーの人なの? ウソついてるわけじゃないわよねえ?」

「それは間違いないです」

「とりあえずホテルの人に聞いてくるわ」

藍華は中へ入っていき、カウンターの前で話始めた。

灯里には、音は聞こえなくとも、うまくいってない雰囲気は十分に

伝わってきた。

外へ出てきた藍華は、浮かぬ表情のままだった。

「やっぱり違うみたい。アサカっていう添乗員のいる団体客は来てないって」

アンナから聞いた母親の名前を出してみたが、違うようだった。

「どうしたって情報が少なすぎるのよね。でもここだと思っただけどなあ」

藍華は腰に両手を置いて、ホテルをまじまじと見上げた。

「あれ？藍華ちゃんじゃないの？」

丁度そのホテルから出てきた中年の男性が藍華を見て声をかけてきた。

「あつ、どうもお久しぶりです」

藍華は姿勢を正すと、その男性に挨拶した。藍華の顔見知りの男性のようだった。

「姫屋の令嬢がこんなところで何してんの？」

「やめてくださいよ。恥ずかしいですから、その言い方」

その男性は藍華の照れた顔をみて、嬉しそうに笑った。

「でもすっかりウンディーネ姿が板についてきたね」

「そうですか？ありがとうございます」

しかし、もうひとつすつきりしない藍華の表情に男性は気になった。

「でも本当にどうしたの？なんかあったの？」

「実はホテルを探してまして。この女の子の泊まってるはずのホテルなんです」

「もしかして迷子？」

「はい。ホテルの名前がわからないので、とにかく少ない情報を頼りに探してるんですけども」

藍華はこれまでの経緯をその男性に簡単に説明した。

「なるほどね。この子のお母さんは添乗員をしていて、どこかのホテルには宿泊していると。そこでボンという言葉を頼りにか」

「そうなんです。なんか手掛かりないですか？」

「そう言われてもねえ」

その男性も頭をかいて困り果てていた。

「緑のお屋根」

アンナがポツリと呟いた。

「思い出したの？何？緑のお屋根って？」

その場にいた全員が、上の方を見上げた。

「違うね」

灯里がポツリと言った。

「みんなご飯食べてた」

アンナがまた思い出したように呟いた。

「どういうこと？そこでご飯を食べてたってことなの？」

「もしかしたら、テラスってこと？」

「それよ！」

藍華が思わず放った言葉に、灯里はポカンとしていた。

「わかるの？それで」

「いや、そういうわけじゃないけど」

藍華はちよつとぼつが悪そうに苦笑した。

「そうだ、藍華ちゃん？」

男性が何か思い出したように口を開いた。

「大事なことを見落としてた」

「なんですか？」

「藍華ちゃん？ここはパレスだよ！」

「はい、そうですねえ」

「ボンヴェネチアアツティでもパレスの方だってこと！」

「パレスの方って・・・はっ！」

藍華は両目を大きく見開いた。

「えっ、何？どういうこと？」

灯里は意味がわからず、困惑していた。

「私としたことが、なんとという失態！こんなこと、晃さんに知れたら間違いないとやされる！」

藍華はその場で頭を抱えていた。

「どこのホテルかわかったってこと？」

「そういうこと。ここはパレス・ボンヴェネチアッテイでしょ？それとは別に、ホテル・ボンヴェネチアッテイっていうホテルがあるのよ」

「ええ〜！そんなのお〜！」

「ドアがクルクル回るの」

「そういうこと、早く言ってくれないかなあ〜。もう〜！」

第15話

「アサカさん、申し訳ない。こんなことになるとは、思ってたんですけどよ」

ツアー客のひとりの男性が、アサカに謝っていた。

数分前まで、ホテルの前でキョロキョロしながら、落ち着きなくしていた男性は、路地の方から姿を現したアサカに急いで駆け寄っていた。

「いえ、これは私の責任です。お客様のせいではありません」

「でもこんな時間になってまだ帰って来ないのは、やっぱりおかしいよ。警察に捜索を頼んだらどう？」

「はい。でももう少し・・・」

アサカは薄暗い街灯の灯りが頼りとなった路地の先を見つめた。

心配と不安な気持ちで胸が張り裂けそうだった。

あの時、ちゃんと顔を見て話していれば・・・

その時だった。

はつきりと見えない路地の先から話し声が聞こえてきた。

「でもよくわかったねえ。さすが姫屋のウンディーネだ！」

「まあ、あんたもウンディーネをやつてれば、これくらいはわかって来るようになるわ」

アサカは話し声がする方に歩き出していた。

すると、薄明かりの中、二人のウンディーネの姿と、その間に挟まれるようにして歩く小さな女の子の姿が見えてきた。

女の子は、両手をそれぞれのウンディーネと手をつないで歩いていた。

「アンナ・・・」

アサカの口から声が漏れた。

その声が聞こえたのか、女の子がアサカの姿に気付いた。

「お母さん」

そう呟くと、アンナは走り出した。

アサカは涙の溢れる顔で、勢いよくその胸に飛び込んできたアンナ

をギュッと抱き締めた。

「どこに行つてたの？」

「子猫がね、おかあさんを探してたの」

「見つかったの？」

「うん」

少し離れたところでその様子を見ていた灯里は、もらい泣きしていた。

「よかつたねえ」

「そうね。無事にたどり着くことができてよかつた」

ふたりの様子に気がついたアサカが立ち上がった。

「あなたちが、アンナを助けてくれたんですか？」

「まあ、助けたなんてちよつと大袈裟ですけど」

藍華が照れたように答えた。

「もうすっかり夜ですしね。道もわからないっていうし。ね？」

横にいる灯里に藍華がめくばせした。

「はい、そうなんです。こちらの藍華さんがホテルの場所を探し出してくれて、ここまでくれました」

「そうだったんですか。本当にありがとうございます。なんて言ってお礼をすれば・・・」

「いいえ、お礼なんていりません。無事お母さんの元に帰ることができて何よりです」

「あなたは姫屋のウンディーネさん？」

アサカは藍華の姿を見てたずねた。

「はい。そうです」

「それと、あなたは・・・もしかして、ARIAカンパニーの方？」

「はい、そうですが、何か・・・」

「あつ、いえ、なんでもないけど」

アサカは何か気になったのか、不思議そうに灯里の姿を見ていた。

「じゃあ、私たちはこれで失礼します」

藍華と灯里は一礼すると、その場をあとにした。

アサカとアンナは、しばらくの間その場で、仲良く話しながら歩い

て行くふたりの後ろ姿を見送っていた。

お母さんと手を握って歩き出した女の子は、振り替えてアンナに手を振った。

アンナも嬉しそうに手を振り返した。

「よかった。お母さん見つかった」

観光客の行き交う通りに立って、アンナはそう呟いて親子の歩く後ろ姿を見送った。

「お母さんとふたりで、こうして見送っていると、あの時のことを思い出すね」

「あの時って、あなたが迷子になった時のこと？」

「そうそう。あの時、あのウンディーネのお姉さんが私のことを見つけてくれなかったら、多分だけど本当に迷子になったと思う」

「アンナ、やめてその話。今考えても恐ろしくなっちゃう」

「お母さん、まだ気にしてんの？」

「そりやそうよ。昔も今も自分の娘にそんなことが起こったらなんて、考えたくもないわよ」

「そうなんだ」

ふたりは、再び通りを歩き始めた。

明るい日差しの下、今日もネオ・ヴェネツィアは観光地らしく、世界のあちこちからやって来た人たちが賑わっていた。

「でも、さつき間違えたって言ってたけど、あれどういう意味？」

「それはね、私が勝手にそうだと思っただってということ」

「どういうこと？」

アサカは、少し複雑な表情になって、地面に視線を落とした。

「私ね、アンナを助けてくれたのは、あの長い三つ編みのウンディーネの女の子だと思ってたの」

「そうね。別に間違っただけじゃないけど」

「でもあなたの話を聞いてわかった。最初にアンナを見つけてくれたのは、灯里さんの方だった」

「確かにそうだけど。でも、もうひとりのウンディーネさんも、つたない私の記憶を元にホテルを探して回ってくれたのよ」

「それもわかってる。そうじゃなくて、いろいろと勘違いをしていたのかもしれないってこと」

「そうなんだ。よくわかんないけど」

アサカは前を向くと、爽やかな風に思わずほほえんでいた。

そして、横を歩く娘にチラツと目を向けた。

あの頃の幼い娘と、こうして一緒にネオ・ヴェネツィアを歩ける日が来ようとは、思ってもみなかった。

それに、もうひとつ。

出会いは、あの日からすでに始まっていたのだと、アサカはネオ・ヴェネツィアの空を見上げていた。

第16話

アリスは、鼻歌混じりでA R I Aカンパニーの広いカウンターの前にいた。

かわいい仕草で、カウンターの上面にある小さな鉢植えの花を人差し指でちょこんと触れた。

今度は振り返って、デツキの手すりにもたれ掛かり、海を眺め始めた。

右足の爪先で床をツンツンとつついている。すると少し先の方にゴンドラが見え始めた。

「灯里せんぱーいー」

ゴンドラの上で灯里は、アリスの声に驚いてA R I Aカンパニーの方をじっと見つめた。

「アリスちゃん?」

デツキのところで大きく手を振っているアリスが、ハッキリと見えってきた。

「どうしたの、アリスちゃん?」

ゴンドラが到着するころには、アリスが笑顔満面で見ているのがわかった。

デツキへ上がってきた灯里は、両手を後ろに組んでルンルンと躍りだしそうなアリスに、思わずほほえんでいた。

「どうしたの?すごく嬉しそうだけど?」

「灯里先輩、聞いてください。やっとお役目から解放されそうなんです!」

「お役目?何のこと?」

「以前お話してたナイトパーティーの件で、変な格好をさせられそうになったっていう話、あれ、なくなりそうなんです!」

「良かったねって...アリスちゃん、それ、ティンカーベルのことでしょ?」

「まあ、そんな表現もありますね」

「よっぽど嫌だったんだね。それで、どうしてなくなるようになった

の?」

「その予定していたカップルが、やはりダメになりそうなんです!」

アリスは、話している内容とは全く反対の笑顔で言い放った。

「アリスちゃん、話の内容と表情が正反対なんだけど・・・」

アリスの話だと、やはりふたりのスケジュールがどうしてもうまくいかず、彼の方は切望していたが、あえなく中止となったという。

「そのカップルさんには悪いですが、私としては結果オーライとなった次第です」

予定が中止となったことを告げにきた人が、ニコニコしているの一体どうなんだろうと思ったが、灯里はそれ以上は言わないでおこうと思った。

目の前にいるアリスが、ほんとにうれしそうだったからだ。

「それで、その後はどうなるの? ナイトパーティーはもう中止なの?」

「いえ、そこまでは聞いてません」

アリスの顔がちよつと曇り始めた。

「ああ、そうだねえ。とりあえずティンカーベル、やらずにすんで良かったね」

灯里のその言葉に、アリスはまた明るい表情にもどった。

「それではこれで失礼します。お仕事の邪魔をしてしまい、申し訳ありませんでした」

「えっ、もう帰っちゃうの?」

「はいー!」

言葉とは裏腹の笑顔に、灯里はポカンと口を開けたまま、アリスを見送った。

「これでよしっ、と」

アラトリアは、携帯電話の画面を見ながら、ひとり呟いていた。

「アリスさんのためなら、一肌でも二肌でも脱ぎますわ」

そう言ってポツと顔を赤らめた。

「私としたことが。なんてはしたないセリフを言ってるのでしょ」

携帯電話を肩にかけたポーチに入れると、アラトリアは、サン・マ

ルコ広場の程近い通りを歩き始めた。

「あのくすみません」

「はい、何かしら？」

振り返ったそこには、若い男女のカップルが立っていた。

「あそこの島って、何て言う名前かご存知ですか？」

男性の方が指差した先には、高い鐘楼が立っている島があった。

「あそこの島ですか？」

「ちゃんと聞いたはずなんですが、なんというか、ちよつと長めの名前だったような・・・」

「あの島は、サン・ジョルジョ・マツジョーレ島といますわ」

「それだ！そのサン・ジョルジョ何とかという名前だ！」

「いえ、サン・ジョルジョ・マツジョーレ・・・」

「ありがとうございます。なかなか思い出せなかつたんですよ」

「それはよかつたですわ」

「それでなんですが・・・」

「今度はなんですか？」

「あの島への行き方を教えてもらえませんか？」

「あそこへは水上バスでチヨチヨイノチヨイですわ」

「ああそうか。水上バスで行けるのか。ところで、その水上バスはどこへ行けば乗れるのですか？」

「あなたたち、いったいどこから来たのですか？何もご存知ないのですね。ええと、それは・・・」

アラトリアはとつさに答えが出て来なかつた。

当たり前前に知っているものだと思つていたせいで、実は自分でも島へは渡つてないことに気が付いた。

「もしよかつたら、ご案内いたしましょうか？」

アラトリアの背後から声がかけられた。

「あら、あなたは・・・」

振り返ったアラトリアは驚きと同時に意外だと言いたげな表情をしていた。

「久しぶりね、アラトリア」

「アサカさん、こんなところで、と言いたいところですけど、ここはあなたの仕事場のようなものですわね」

「まあ、そうね。でも今日は完全オフだけどね」

「あら、そうなんですか？珍しいこともあるもんですわね」

お互い久し振りの再会に、嬉しさとちよつとの気まずさを感じる顔になっていた。

「あゝ」

「あつ、そうでしたわ！」

「こちらのサン・ザツカリア駅から水上バスに乗れます」

アサカたちは、ゴンドラが並ぶサン・マルコ広場前の船着き場の、その少し先にある水上バスの船着き場の前にいた。

「向こうはサン・ジョルジョ駅。そして、すぐ目の前にあるのが、サン・ジョルジョ・マツジョーレ教会。島全体が教会みたいなものだから、楽しめると思うわよ。ちなみに中へ入るのは無料だから」

「じゃあ、鐘楼へ登るといいうのも？」

「もちろん自由よ」

「それは楽しみです。鐘楼の上から見る風景が素晴らしいって聞いていたので」

「そうね。島へ行くのは初めて？」

「はい、僕たちネオ・ヴェネツィア自体初めての観光ですから」

「お知り合いに詳しい方もいるの？」

「いえ、先日乗ったゴンドラのウンディーネさんに教えてもらったんですよ」

「そうなの」

「ただ、その時はこちらの事情で行くのやめたんだよね？」

「そうね」

ふたりは、少々恥ずかしそうに顔を見合わせた。

「でもそのあと、そのウンディーネさんの観光案内をしてくれた時の言葉を思い出すうちに、この今の時間は、今この時にしかないんだって思っ。そしたら、あの島の鐘楼には是非とも上らないと、と思っ。たんです」

「そう。そんなことがあったの」

カップルのふたりが顔を見合わせて微笑みあっていた。

「どんなウンディーネなのか会ってみたいですわ」

話を聞いていたアラトリアが思わず口を挟んだ。

「そして、どんな観光案内をしたのか、是非聞いてみたいものです」

「そうね。そんなふうに観光案内が出来たらいいでしょうね。どう伝えるかって、本当に難しいから」

「あら、アサカさんのような観光のプロの方がですか?」

「もちろんよ」

アサカとアラトリアは、無事水上バスに乗り込んだふたりを見送った。

「そういえばアラトリア、ウンディーネになるって本当?」

「だ、誰に聞いたんですか? あっ、わかりました。言わなくて結構ですの。アサカさんに話すと言ったら、もう決まっていますから」

「まあそうね」

アラトリアは少しため息をつくとき、行き交う観光客の様子を眺めた。

「私の一番の理解者であるおばあさまには、話しておこうと思ったんです。誰がなんと言おうと、いつもおばあさまは私の見方になって下さいました。でも私も年齢を重ねるにしたがって、色々考えるようになりました」

アサカは真剣な眼差しのアラトリアの横顔を見ながら、この子は一体本当はいくつなんだろうと不思議な気分になっていた。

ただ、アラトリアの生まれ育った環境を考えると、普通の十五歳とは明らかに違う人生を歩んできたことは間違いない事実だった。

「将来、このネオ・ヴェネツィアで事業を始めるに当たって、まずはウンディーネになってこの街のことを勉強しようという考え方。私はいいと思う」

「おばあさま、そこまで話していますの?」

アラトリアは呆氣にとられていた。

「アサカさん、よほど信頼されているのですね」

「でも、聞いたところによると、婦人はA R I Aカンパニーを推しているそうじゃない？それが嫌だとか？」

「特に嫌というわけではないのです。私の憧れは、あくまでもアリス様なのです！」

「なるほどね。つまり、オレンジぶらねつと、というわけね？」

「その通りでございます！私の考えからすると、今のA R I Aカンパニーでは、少々物足りないというか、なんと言いましょうか・・・」
それは仕方のないことでもあった。

A R I Aカンパニーといえば、誰もがアリシアの存在を、今でもイメージするであろうと。

昨日までのアサカ自身もそうだった。

「ただ、それに関しては、アリス様からしかられました。私は何もわかっていないと」

「へえ、そんなことがあったの。つまりそれって、アリスさんと灯里さんとは知り合いということ？」

「そのようですね。というかアサカさん、A R I Aカンパニーのウンディーネさんのこと、ご存知なんですか？」

「まあ、そうね。知ってるには知ってる」

「どのような方ですか？」

「そうですね。一言で言ったら、優しいひとかな。思いやりがあって真面目、かな？」

「なんですの、それ？私、お見合いをしようと言うわけではないのですけど」

「確かにそうね。ハハハハ」

第17話

アラトリア・グレースは、海に突き出た、その小さな建物へ渡る棧橋の前に立っていた。

「これが噂のARRIAカンパニーですね」

晴れ渡った海の上をカモメが数羽飛んでいた。

すると、そのカモメの中の一羽がアラトリアをかすめるように飛び去って行った。

「ちよ、ちよっと、なんですの!」

その声が聞こえたのか、ARRIAカンパニーのドアが開いた。

「こんにちは」

灯里はいつもの明るい調子で、目の前にいる女の子に声をかけた。

「ご予約のお客様でしょうか?」

「いいえ、違います」

アラトリアは、まっすぐに灯里の顔を見て答えた。

「あの、申し訳ありませんが、ご予約のお客様が間もなく来られる予定でして……」

「大丈夫です。ただの見学ですの」

「見学のお客様?」

「い、いや、だからお客様ではなく、見学に来たと申しましたはずで……」

「そうか。就職希望の方ですか。あれ、おかしいなあ。まだ募集は出してないはずだけど」

「あ、あなた、さっきからいったい何を言っているのですか?」

そんな会話を打ち消すように、女性3人がそのそばで声をかけてきた。

「ここ、ARRIAカンパニーですよね?」

「はい、そうです!」

灯里は元気よく答えた。

「私たち午後から予約していたものなんですけど」

「ARRIAカンパニーへようこそ!どうぞお入りください!」

灯里はドアを大きく開け放すと、その3人の女性を招き入れた。

口を開けた状態でその様子を見ていたアラトリアに、灯里は恐る恐る声をかけた。

「あのー、よかつたら入られますか？見学の方も」

「どうぞ、こちらをお召し上がりください。今朝届いたばかりのカモミール・ティーです」

その3人の女性客は、灯里から出された紅茶を口にした。

「おいしいー！」

「ほんと！」

「よかつたら今朝焼いたクッキーもどうぞ！」

客たちの反応に、灯里は満足げに微笑んでいた。

「あのー」

客のひとりが、部屋の隅に別に用意された小さなテーブルの前に座っているアラトリアに声をかけた。

「店員さんは、何の係なの？」

「て、店員!?!」

アラトリアは思わず声をあげていた。

「あつ、わかつたー！アルバイト見習いでしょ？違う？」

「ど、どうして、わたくしがアルバイトなのですか？しかも見習い？」

「だって、職場に来てるのに、まだ私服のままだもん」

別の女性がすまなさそうに話に入ってきた。

「ごめんなさいね。この人、見たままを正直に口にしちゃうクセがあるもんだから」

「見たまま・・・」

呆気にとられているアラトリアをみかねて、灯里が会話の間に入ってきた。

「実はこの方、見学の方なんです」

「そうなんですか？まだ若いわよね。学生？」

「まあ、そうですねども」

アラトリアは慚然とした表情で答えた。

「つまり、将来はウンディーネ志望とか？」

「当たってはいますわね」

「そうなんだ」

「かわいいウンディーネさんだよね」

「結構落ち着いてる感じよね」

女性たちが口々に感想を口にしていた。

「よかったらあなたもどうぞ」

灯里はそう言つて、ティーセットをアラトリアの前に置くと紅茶を注ぎ、クツキーをのせた小皿を、そのそばに置いた。

「ありがとうございます」

アラトリアは意外そうな表情でそれに応えた。

だが、紅茶を一口飲んだその顔は驚きに満ちていた。

「とてもおいしいですわ」

「お口に合つてよかった」

「紅茶の茶葉を作っているうちの契約農家とどっこいどっこい、いや、それ以上かも。これはどちらで？」

「これは、この前ARRIAカンパニーをご利用いただいたお客様からの、頂きものなんです」

「お客様？観光客つてことですか？」

「そうです」

「よほどの家柄の方かしら」

「さあ、そこまではわかりません」

そう言つて灯里は、女性たちのいるテーブルへ行き、話の相手を始めた。

アラトリアは少し腑に落ちない表情でその様子を見ていた。

「それではお客様、ご用意が出来次第お声をお掛けしますので、今しばらくお待ちください」

灯里はそう言つて、船着き場へと向かった。

明るい日射しが心地よく降り注ぐ中、ゴンドラはゆっくりと進んでいた。

女性客3人は、それぞれ目に入るものに次々と声を上げていた。

途中、狭い運河を通る際には、古い建物が立ち並ぶ様子にも驚いて

いた。

「この辺り一帯は、よく知られた観光地とは異なり、住居や小さな工房が立ち並んでいて、ネオ・ヴェネツィアのまた違った風情が感じられる場所となっています」

「確かに古いわね」

「大丈夫なの？」

「建物自体はちゃんと作られていますので大丈夫です」

灯里は苦笑しつつ、答えていた。

「それがネオ・ヴェネツィアというものですわ」

女性客たちとは少し離れたところで座っていたアラトリアは、小声でポツリとつぶやいた。

ウンディーネ志望の見学者。

その印象のまま、アラトリアは女性たちが乗るゴンドラに同乗することを認められていた。

「将来、あなたのゴンドラに乗るなんてことがあったら、すごい出会いとなるわよね」

屈託のない、明るい女性たちのおかげで、アラトリアは灯里の観光案内を間近で観察することができたわけだった。

そんな中、なんとなく会話が途切れ、静かな時間が過ぎた。

「こんな景色ばかり見せて、一体何をしたいのかしら・・・」

アラトリアのつぶやきと同時に、灯里はゴンドラのを緩め始めた。

そしてゆっくりと、運河に面したある建物の出入口となったところにゴンドラを止めた。

その瞬間、ゴンドラの上にいるみんなが息を飲んだ。

「きれい」

「なんて光景なの」

その出入口となった門を通して、中の様子が目に飛び込んできた。色鮮やかな花々が一面に咲き乱れた、その家の庭だった。

「こちらのお宅の奥様が、長年にわたって端正込めて作られたお庭なんです」

灯里の説明に女性たちは感心していた。

「こんな光景がみられるなんて思いもしなかった」

「確かに案内してもらわないと気づかないでしょうね」

すると、門の中から落ち着いた雰囲気的女性が顔を覗かせた。

「あら、灯里ちゃん。久しぶりね」

「お久しぶりです。といっても、よく見学させていただいているんですが。エヘヘ」

「よかったら、見ていく?」

「いいんですか?」

「灯里ちゃんなら、別に構わないわよ」

「ありがとうございます!」

そのやりとりで呆気にとられたような顔をしていた一同は、喜びの声をあげた。

「それではお言葉に甘えて参りましょうか!」

灯里は女性たちに手をかして次々とゴンドラから門の中へと導いた。

「えっ、ほんとは行くのですか?」

取り残された形となったアラトリアは、その様子に戸惑いを隠せず
にいた。

「さあ、どうぞ」

灯里はアラトリアに手を差し伸べた。

アラトリアはその手につかまりゴンドラをおりると、そのまま庭の中へと入っていった。

A R I Aカンパニーへ戻った灯里は、客たちを下ろすと、深々と頭を下げた。

「本日はご利用ありがとうございました。これからもA R I Aカンパニーを是非ご利用下さい。お待ちしております。本日はありがとうございました!」

賑やかなその女性たちの楽しそうに語らう後ろ姿を、しばらくの間、灯里はその場で見送っていた。

その灯里の後ろで、アラトリアはその様子を眺めていた。

「お一人で大変ですわね」

「えっ？」

灯里は少し驚いた表情で振り返った。

「いえ、私なんてまだまだです」

「そんな謙遜なさらなくてもいいのではないですか？お一人で立派にされてると思いますよ」

「ありがとうございます。でも私はまだまだこれからなんです」

「まあ確かにプリマになられて一年を経過したところなら、そう思われるのも仕方のないことでしょうけど」

灯里はアラトリアの言葉に納得したように肩を落とした。

「でも・・・」

アラトリアは何かを言いかけた。でも途中でやめてしまった。

「えっと、なんででしょうか？」

「なんでもありませんわ！」

「はひっ！」

第18話

「ナイト・パーティーの企画？」

藍華は腕を組んで眉間にシワを寄せていた。

「いえ、別に藍華先輩に頼んでるわけではないです」

アリスは素っ気ない態度で藍華に向いて言った。

「あ、あんたねえ、その態度はなんなの？相談にのってあげようっていうのに！」

「まあまあ」

灯里は二人の会話に割って入った。

A R I Aカンパニーの一階のテーブルには、仕事から立ち寄ったアリスを待ち受けるかのように、灯里と藍華がいた。

少し前から何かとオレンジぷらねつとのナイト・パーティーに関して、灯里に相談を持ちかけていたアリスは、今日もまた時間の合間を縫ってA R I Aカンパニーへやって来たわけだった。

「でもなんでここに相談に来るわけ？灯里はオレンジぷらねつと何か関係があるっていうの？」

「別にそんなのありません」

「じゃあなんで？」

「特に理由があるわけではありませんが。強いて言うなら、まあ、そうですねえ。口実でしょうか？」

「A R I Aカンパニーへ来るための？」

「まあ、そんなところです」

灯里は嬉しそうにほほえんだ。

「アリスちゃん、うれしいこといつてくれるねえ」

「まあ確かに。以前は会うための口実が見つからないくって、半ベソかいてた時もあったしね」

「藍華先輩！もう！そこはいいじゃないですか！」

「はいはい」

「でもティンカーベルの件はなくなったんでしょ？」

「ああ、あの幸せの粉を振りかけるってゆうやつね」

「なんか、その言い方」

ほっぺを膨らませたアリスは、二人を前にして、灯里の入れた紅茶を飲んで、少し息をついた。

「結局のところ、その企画はおじちゃんになった訳でしょ？」

「はい。ですから、その穴埋めというか、代替りの企画が急遽必要になったわけです」

「アリスちゃん、それを私のところに相談に来たの？」

灯里は、伸ばした人差し指をあげのあたりに当てて、目を大きく見開いた。

「まあ相談というか、顔の広い灯里先輩なので、何かいい感じの情報はないかなあと思っています」

「いい感じの情報？」

「はい」

「あのねえ、後輩ちゃん？そんな気の効いた情報を灯里が持つてると思う？この灯里がよ？誰とでも親しくなってしまうくせに、肝心のとは何一つ聞いちやいないのよ？」

「藍華先輩、いくらなんでもそこまで言わなくても・・・」

「エヘヘヘ」

「笑ってるし」

「確かに」

苦笑いの灯里を見つつ、藍華は腕を組んでアリスの方に向いた。

「ところで後輩ちゃん、そのナイトパーティーって、そもそも何が目的なの？」

「藍華先輩に話してませんでした？」

「詳しくは聞いてないわね」

「いわゆる新しい顧客の創出っていうやつです。ネオ・ヴェネツィアの魅力をもっと知ってもらおうと、ゴンドラに乗る機会の減る夜の時間にもお客様に楽しんでもらうことが目的なんです」

「なるほどね。オレンジぷらねっとらしいといえば、らしいって感じね。どちらかと言えば伝統を重んじる姫屋とはやはり違うかもね」

「でもそうすると、夜もお仕事することなの？」

灯里は心配そうに尋ねた。

「そこは、シフトを組むだとか、いろいろ対策は取っているようですけど」

「へえ、大変だね、アリスちゃん」

「でもあれじゃないの？プリマである後輩ちゃんは、そこまで深くは関わらないでしょ？」

「の、はずだったんですけど」

「そうか。アリスちゃんは、これから先もまた会社から、何かと求められるかもしれないと思ったわけだ」

「別に会社のお仕事ですから、やらないわけじゃないんです。私だって貢献できるならそうしたいと思ってるんですよ。でも、あのティンカーベルはさすがに・・・」

「つまり、こういうこと？」

藍華は改めてアリスに向き直った。

「後輩ちゃんとしては、そのナイトパーティーに協力しない訳ではないけど、でもティンカーベルみたいな見せ物みたいになるのは勘弁してほしいと」

「当然です」

「なのにごここまでナイトパーティーにこだわるのは、おそろくだけど、先手を打とうと考えたってわけね。でしょ？」

「藍華先輩、さすがに鋭いですね」

「ええ、どうということ？」

「どうせやるのだったら、変な格好をせずに済むことを先に考えちゃえばいいってことよ」

「そういうことなの？」

「まあそういうことです。実現性のあることを先に決めちゃえば、それでもいいわけです」

「へえ、そうなんだあ・・・で？」

「そのリアクションだと、ネタになりそうなことはなさそうですね」

「だから言ってるじゃない？この灯里に期待する方が・・・」

「そうだ！」

灯里は藍華の言葉をさえぎるように大きな声を出した。

「ちよ、ちよつと！急にビックリするじゃない！」

「思い出したことがあった！」

「なんなんですか、灯里先輩？」

「あの女の子、あの時の迷子の女の子だよ！」

「はあ？」

藍華は眉間にシワを寄せつつも、呆気にとられていた。

「灯里、あんたいきなり何を言い出してんの？」

「藍華ちゃん、あのときの女の子だよ！きつとそうだよ！」

「だから、さつきから何をひとりですんなに興奮してんのって言うのー！」

「藍華ちゃん、覚えてない？」

「灯里先輩、ちよつと落ち着いて下さい。ちゃんと説明してもらわないと、藍華先輩だってわからないと思いますよ」

「そうだった。ゴメン」

「それで何が言いたいのよ、灯里？」

「あの時、私がARIAカンパニーに入って、まだ日が浅い時、藍華ちゃんと一緒に迷子の女の子の、宿泊してるホテルを探して回ったときがあったでしょ？」

「灯里と私とで探し回ったの？」

「そうだよ！そしたら藍華ちゃんがホテルの名前を勘違いしてたことに気がついて、晁さんにどやされるくって頭を抱えて」

「ああ、はいはいはい。その女の子のお母さんが観光ツアーの添乗員をやってた」

「心配したお母さんがホテルの外で待ってて、感動のぐっ対面！」

「そんなこと、確かにあったわね。それでその女の子と会ったって言うの？」

「そうなんだよ！」

「いつ？どこですよ？」

「実はこの前、迷子の女の子がいて、一緒にお母さんを探してあげようとしてたら、時間がなくなってきたちゃって」

「灯里先輩らしいですね」

「そしたら、偶然にアサカさんに出会ったんだけど。その時アサカさんと一緒にいた女の子が、代わりに迷子の女の子の面倒を見てくれるってなってる」

「ちよ、ちよつと待って、灯里？あの時の迷子の女の子っていうのは、つまり誰？」

「多分だけど、私の代わりに迷子の女の子のお母さん捜しを引き受けてくれた女の子、アサカさんの娘さんだと思う」

「つまり、あの時のお母さんは、アサカさんだったっていうの？」

「多分そうだと思う」

二人の会話の横で、アリスは頭を抱えていた。

「あのくすみマセン。誰が誰なのか、全く頭に入って来ないんですけど」

アラトリアはしっかりと計画を進めるべく、ミッションを開始しようとしていた。

「わたくしとしては結局のところ、やはりアレしかないと思うのですわ」

普段利用しているブティックから取り寄せたドレスを手に取り、アラトリアは満足げに眺めた。

その時、アラトリアの携帯電話が鳴った。

「あら、ぐ苦労様。何かありましたの？」

「お嬢様、先日の件はいかがされましたでしょうか？」

電話の相手は、オレンジぷらねっとの運営企画室の社員であり、グレース財閥とつながりのある、アラトリアに逆らえない立場の例の女性、アムネジアだった。

「先日？ああ、あの件ね。大丈夫よ。安心して」

「それはよかったです。あの件は、企画室の他の者には一切話してませんので、早く進めてしまわないと、大変なことになってしまいます」

「そこは大丈夫ですわ。ここにこうしてドレスも到着しましたし」

「ドレス？」

「そうですね。きっとアリス様にふさわしいお姿に間違いないと・・・」
〈お嬢様くく〉

「なんですかの？変な声を出したりして」

〈お嬢様、もうお忘れですか？あのカップルのこと〉

「あのカップル？」

〈はあく〉

ため息の具合から、アムネシアの落胆ぶりが伺えた。

「具合でも悪いのかしら？」

〈お嬢様、私の具合など、この際どうでもいいんです。あのお二人に協力してもらったおかげで、お嬢様の計画が実行できることになったわけじゃないですか？〉

「まあ、そうですね」

〈ですので、ここは早めに実行に移していただかないと〉

「そう急いでもしよすがなくて？」

〈お嬢様くく〉

「だからなんなの？さつきからその声」

〈お嬢様、本当なんです。このままだと、わたしの会社での立場がなくなってしまうですー！〉

「わかってますの。あなたにも、その立場とやらがあることくらい」

〈それでは何かアイデアがあるのでしょいか？もしかして、もうお決まりだとか？〉

「その辺は、ボチボチと・・・」

〈お嬢様くくく〉

「わ、わかりましたわ！」

アラトリアは、携帯電話を睨み付けながら、一方的に電話を切った。

第19話

「あのー、すみません」

藍華は、運河のほとりにあるホテルの、そのオープンテラスの前を歩いているところだった。

声をかけてきたのは、そこに座っていた男女のカップルだった。

「はい、なんででしょうか？」

「実はぼくたち、ここで結婚式を挙げようと思ってるんです」

「それはおめでとうございます」

藍華はそう言いながら、テラスの上を覆ったその緑色のシートの屋根を見上げた。

「そうなんですか。いいお店ですもんね」

「あ、いや、そうじゃないんです」

「はあ？」

「このお店という意味じゃなくて、ネオ・ヴェネツィアで、という意味です」

「ああ、そうなんですね。ハハハハ」

藍華は、苦笑いで後頭部をかいたが、ちよつと紛らわしいなあと心の中でつぶやいていた。

「それで、どういうご質問で？」

「ああ、それなんですが・・・」

男性は、少しためらうような感じで言った。

「あのー、サン・ジオルジョ・マツジョーレ島って、貸しきること、できるとはでしょうか？」

「ええー？あそこを貸しきる？」

「はい」

「はいって、そんなあつさり」と

藍華は驚きと呆れた思いで、そのカップルをまじまじと見返した。

「やっぱり無理・・・なんででしょうね」

「いやあー、どうでしょうかねえ。そんな話は、今まで聞いたことがないですし、そんな前例があるのかどうか・・・」

「そうですか」

「つまりお二人は、そこで結婚式を挙げようということなんですか？」

「はい！そうなんです！」

「それなら、別に島を貸しきるなんてことしなくても、あそこにあるサン・ジョルジヨ・マツジョーレ教会に結婚式を頼めばいいんじゃないですか？」

「頼めるんですか？」

「いや、だって教会ですし」

「あそこは有名な観光スポットじゃないですか？そんなこと引き受けしてくれるように思えないんですけど」

「でも、教会は本来の教会としての役割があるはずですよ。結婚式、引き受けてくれると思いますよ」

「そうなんですか！」

「ええ！」

「頼めますか？」

「はい！えっ？」

その時だった。

少し離れたところで、シャッター音が響いた。

大きく口を開けたまんま、藍華がその音のする方へ顔を向けた。

「ぬな？」

「ありがとう、ウンディーネさん！いい絵が撮れた！」

浅黒く精悍な顔立ちに、笑うと真っ白い歯が印象的なその青年は、藍華に向かって満面の笑顔で声をかけた。

「な、なんですか？」

「今の、お客さんと話していた横顔が素晴らしかった！とっても魅力的だった！」

「な、なにを言ってるの！」

そう言いながらも、藍華は顔を真っ赤にしていた。

「あ、あんた！もしかして、最近出没しているストーカー男でしょ！」

「ス、ストーカー？」

「勝手にバシヤバシヤとウンディーネたちを撮影してるって話じゃない

い！」

「ち、違いますよ！僕はただ、ウンディーネさんたちの素晴らしさを世界の人たちに伝えようとするね」

「何をもっともらしいことを言ってるの！素直にお縄につきなさいよ！」

「お縄？」

テラスにいるカップルの二人は、まるでテニスの試合を観戦している観客のように、藍華と男との間で、左右に首を振っていた。

「あ、あの〜」

「ちよつと待って！」

「はいー！」

眉間にしわを寄せていた藍華の表情が、みるみるうちにこわばった顔へと変わっていった。

「すみ、ま、せん」

ロボットのようにかくかくと、藍華はカップルの方に顔を向けた。「つい、勢いにまかせてしまつて……」

カメラを手にしていた男が、呆気にとられていたかと思うと、藍華のリアクションに思わず吹き出した。

「プツ」

「な、なにを……」

「ハハハハ！」

「ちよ、ちよつと！あんたねえ」

「あの〜、それで頼めるんでしょうか？」

「あつ、その話でしたよね」

「ハハハハ」

「う、うるさい！」

男は藍華の一喝に、思わず手で口を押さえた。

「すみません。失礼しました。その件でしたら会社に戻ってですね、ちゃんと調べてから返事をさせていただきますどうかと……」

「大丈夫だと思いますよ」

男が会話に入ってきた。

「あんだ、何をいい加減なことを」

「心当たりがあるんですよ」

「どんな心当たりだと言うのよ!」

「それはですね。あなたと同じ」

「私と同じ?」

「そう。同じウンディーネさんに」

「はあ?」

「あの人だったらきつと大丈夫だと思う」

「そんな力を持ったウンディーネなんて、誰よ! いったい!」

「多分んだけど・・・」

「多分、大丈夫だと思う」

「だ、大丈夫つて。あんだつて一体どうなつてんの?」

灯里は、藍華の前でにっこりと微笑んだ。

「サン・ジオルジョ・マツジョーレ教会でしょ? あそこの神父様とは、この間リンゴを一緒に食べたばかりで」

「リンゴ?」

「美味しかったんだよー。蜜がいっぱい、ものすごく甘かった!」

「ちよつと待つて、灯里? なんで神父様とリンゴを食べることになるの?」

「実はね、この間アパートの上の方からシートが落ちてきて、ゴンドラに乗っていたお客様の上に覆い被さつて来たの」

「へえ〜」

「もしたら、そのシートを落としたおばさんが、シートと交換にリンゴをくれたんだよ」

「交換で」

「そのお客様たちと一緒にたべたら、甘くて甘くて!」

「一緒に食べたのね」

「そうだよ。おいしかったあー」

「それで?」

「それで?」

「いや、だからあ、神父さまはどこから登場するのよ?」

「ああ、そこかあ」

「そこかあつて、どこへ行くつもりなの？あんたは」

「エへへへ」

「そのカップルさんにサン・ジヨルジョ・マツジョーレ島の鐘楼の話をしたんだけど、偶然にもサン・マルコ広場近くで神父様にお会いして、島まで渡れるか頼まれて」

「引き受けたの？」

「うん。時間的に大丈夫だったし、断る理由もないし」

「確かにサン・ジヨルジョ・マツジョーレ教会の神父様なら、断る理由はないわよね」

「それでね、さっきのリンゴ、よかつたらどうぞって話したら、送ってもらって、その上リンゴまでもらっちゃ悪いから、お茶を入れるって神父様がおっしゃって」

「それで二人でリンゴを食べたと」

「そうなんだよね」

「あのさあ、灯里？いくらリンゴを一緒に食べたからといって、気軽に結婚式を引き受けてくれるかどうかなんて、そんなのわからないでしょ？」

「なんか、暇なんだって」

「ヒ、ヒマ？」

「うん、そうらしいよ」

「あのサン・ジヨルジョ・マツジョーレ教会が暇ってどういうことよ？」

「なんかね、観光スポットとして有名になりすぎて、観光客が来るには来るんだけど、かえってそれ以外の用事が減っちゃったんだって」

「何それ？そんなことあるの？」

「だって神父様がそういつてたもん」

「はあく。わけがわからん」

「だから、その結婚式の話、引き受けてもらえるんじゃないかなあ」

「だけどさあ、灯里？どうしてあのストーカー男は、あんたなら大丈夫なんて言ったの？」

「それは私にもわからないけど」

「けど何？心当たりがあるの？」

「多分だけど、その人、お客様としてゴンドラにお乗せした人じゃないかなあ。藍華ちゃんの話からすると、きつとそうだと思う」

「えっ、ちよつと待って。あんたがあのレストラン男を客として乗せたの？」

「うん、そうだと思うけど」

「それでか。なんだか世話になったとか、よく知っているとか言うもんだから、灯里の知り合いか何かだと思ってたんだけど。それで話が見えてきた。つまり、灯里、あんたがお調子者のウンディーネの正体だったというわけね」

「お調子者？何それ？」

「あんたが何でもかんでも調子よく対応するもんだから、あの男を調子に乗せてしまったってことなの！」

「えっ、ちよつと待って！私って、ストーカー男さんに観光案内してたの？」

「あ、ごめん、灯里。話がややこしくなりそうだから、もういいわ」

「ええ、藍華ちゃん」

「とにかくよ、灯里？あんたがキツカケだったのは確かよ」

「私がキツカケ？どういうこと？」

「どうもこうもないの！」

「藍華ちゃん。またあ？」

第20話

「あのー、もしよろしかったら、お話を伺いいたしましょうか?」
そう声をかけてきた少女は、ウンディーネの制服には似つかわしくないくらい、可愛いらしい姿で、にこやかに立っていた。

「それはどうも。助かります」

その場でキョロキョロしていた男性は、声をかけてきた目の前の少女の姿をまじまじと見つめた。

「何かありますでしょうか?」

「あ、いや、なんと言うか、すごくお若いウンディーネさんだなあと思っています」

「まあ、そうですね。そう思われるかもしれませんが、大丈夫です。私は、オレンジぷらねっと所属のアリス・キャロルと申します」

それを聞いた男性が、アリスの手に視線を移した。

「プリマ?」

「ええ。ちゃんとしたプリマ・ウンディーネなんです」

そう言ったアリスを見て、男性はにっこりほえんだ。

「ウンディーネさんならご存知だと思いますが、ヴェネチアングラスを探してまして」

「ヴェネチアングラスですか?」

アリスは回りに視線を移した。

そこはサン・マルコ広場のど真ん中に位置するところだった。

回りには人がたくさんいて、観光客が一番のピークを迎える時間でもあった。

「どこか、お目当てのお店でもあるのでしょうか?」

「いえ、特にそういうわけではないんです。有名な観光スポットだから、そういうものも手に入るのかなあと思っています」

「そういうことですか」

アリスはちよっと考える様子でいたが、その男性に向き直って言った。

「もしお時間があるのでしたら、ムラーノ島へ行かれてはいかがでしょうか」

「しょうか?」

「ムラーノ島?」

「はい。あそこはガラス工房がたくさん集まっていて、腕のいい職人さんもたくさんいるところなんです」

「そうなんですか。それなら、ウンディーネさんに連れていってもらえませんか? そんなに地理に詳しくないので」

「わたしですか?」

「はい。是非!」

アリスは思案していたが、こう答えた。

「申し訳ありません。実はこのあと、仕事の予定がありまして。ご予約のお客様がすでに決まってるんです」

「そうなんですか」

その男性は、とても残念そうだった。

アリスは、どうしたもんかと、その場から離れられそうになかった。

「あのー、何か事情がおりなんでしょう?」

「実は、彼女にプロポーズする予定なんです」

「そうなんですか。それはおめでとうございます」

「それをこのネオ・ヴェネツィアでやる予定だったのですが、彼女があまりにも忙しい人で、それも延び延びになってしまってます」

「それはそれはお気の毒に」

「それじゃあ、いつそのこと、思い出として何か買って、彼女にそれを贈ろうかと考えた次第なんです」

「それでヴェネツィアングラスという訳ですか?」

アリスは思案するように、伸ばした人差し指をあごの辺りに当てた。

「もしお急ぎでなければ、改めてご案内させて頂きましょうか?」

「いいんですか?」

「はい」

男性は嬉しそうに、パツと表情が明るくなった。

そして、連絡先を確認すると、アリスはその男性に案内する約束をしてその場をあとにした。

「乗り掛かった舟とも言いますしね」

アリスは大鐘楼を右へ回るとアドリア海を見渡せるところまで歩いてきた。

目の前には、サン・ジオルジョ・マツジョーレ島が見える。

「でも、まだ乗ってませんけどね」

そうつぶやくと、ひとりクスツと笑った。

「アリスちゃん!」

灯里はその見慣れた後ろ姿を見つけると、駆け寄っていった。

振り返ったアリスは意外そうな表情だった。

「灯里先輩、珍しいですね?」

「何が?」

「だって、昼の日中からこんなところで出会うなんて」

「それはこっちのセリフだよ。忙しくしているアリスちゃんこそ、珍しいんじゃない?」

「まあ確かに」

そう言ってアリスはにっこりとほほえんだ。

「先輩は何のご用だったんですか?」

「私はねえ、暇だったの」

「ええ〜! なんなんですか、それ?」

「エへへへ。冗談だよ、アリスちゃん」

「もうー、先輩!」

「ごめんごめん。実はね、ちょっと藍華ちゃんから頼まれたことがあって。これからサン・ジオルジョ・マツジョーレ教会へ行くところなの」

「あそこへ?」

アリスは振り替えて教会のある島の方へと目を向けた。

「何かあるんですか?」

「なんかね、あそこで結婚式を挙げたい人がいるらしいんだけど、できるかどうか聞いてきてほしいんだって」

「それを灯里先輩に頼んだんですか?」

「まあ、そうなんだけど」

「いくら灯里先輩が暇だからといって、それはないですよね」

「アリスちゃん、結構こたえるんだけど」

「すみません」

「まあ、別にいいよ」

灯里は苦笑いで応えた。

「私が神父様とリンゴを食べた仲だということ、それならって藍華ちゃんが言うもんだから」

「なんなんですか、そのリンゴを食べた仲というのは？」

「エへへ。それはね、あることがきっかけで手に入ったリンゴがあつて、神父様をゴンドラで島までお送りした時に、よろしければどうぞつてお渡ししたら、それじゃあお茶にしましょうとなったというわけ」

「あの一、すみません。いったいどうしたら、そんなエピソードが誕生するんですか？教えて欲しいです」

「教えると言っても、私もどうしてなんだかわからないんだけど」

「あくあ。先輩つて、相変わらず友達作りの達人ですね」

「そうかなあ」

「そうですね。普通リンゴがきっかけで、サン・ジヨルジョ・マツジョーレ教会の神父様とお茶するなんて。そんなことあり得ませんよ」

「エへへ。ところで、アリスちゃんはどうしたの？」

「ちよつとそこまでお使いです」

「お使い？なんか小さな子供みたいだね」

「それは見た目のことをおっしゃってるんですか、灯里先輩？それとも中身ですか？」

「違う違う！そんな怒らないで、アリスちゃん」

「さつきも疑われたんです。ほんとにプリマなんだろうかって」

「疑われた？」

「サン・マルコ広場のまん中でキョロキョロしてるひとがいたので、何かお困りなのかなあつて思つて声をかけたんです。そしたら私をじつと見て、その上両手まで確認してるのに、なんか頭の上には、は

てなマークが出てるんですよ」

「おもしろい表現するねえ、アリスちゃん」

「そしたらヴェネチアングラスをさがしてるっておっしゃって。彼女さんにプロポーズするのに、何かないかって思ったらしくて」

「それでサン・マルコ広場に？」

「だからわたし、ムラーノ島をオススメしたんです」

「そうだね。あそこなら、工房もたくさんあるもんね」

「そうなんです。それで今度ご案内する約束をしたんです」

「何それ？」

灯里は笑顔になって、小さく笑ってみせた。

「何がですか？」

「何がって、アリスちゃん？怒ってるんじゃないの？違うの？」

「怒ってるというか、失礼だというか・・・」

アリスは、顔を赤くしてうつむいた。

「アリスちゃんらしいね」

「私らしい？どこがですか？」

「そうやって、人のことを思いやる気持ち。思いやって、気遣って。いろんなことがあっても、ちゃんと人のことを考えてる」

「そんな恥ずかしいセリフ、禁止・・・」

「ああー！藍華ちゃんに言っちゃおー！」

「ダメですうー！」

「それにしても、あれだねえ。ネオ・ヴェネツィアって、そんなにも結婚式をあげたくなる場所なんだねえ」

「そうですね。確かにそう言われてみると、そんな話が多いですね」

「私なんてね、こないだストーカー男さんをゴンドラにお乗せしたみたいなんだよ」

「はあ？なんなんですか、その話？」

「藍華ちゃんが遭遇したらしいんだ、そんな人に。そしたら聞いてるうちに、どうやらこの間お乗せしたお客様だと気がついたんだよね」

「気がついたって。大丈夫だったんですか？」

「うん、大丈夫だったよ。その人の身の上話を聞いたりして、すごく感

激していただいたみたいだった」

「灯里先輩？ちよつとお人好しが過ぎるんじゃないですか？」

「そんなことないと思うんだけど。確かに藍華ちゃんからも言われた」

「そりやそうだと思います」

「でもね、その人言ってたの。どうしてもサン・マルコ広場を見ておきたかったって。なぜだと思う？その人のお父さんがお母さんにプロポーズした場所だからなんだって」

「よくありそうな話だと思いますけど」

「そうかもしれない。でも、そのお父さんもお母さんも、もうこの世にはいないの。小さい頃に亡くなったんだって。だから、せめて見ておきたかったって」

「でも灯里先輩？その話とストーカー男が、私にはどうしても結びつかないんですけど」

「そこなんだよねえ」

「はあ〜」

「どうしたの、アリスちゃん？」

「灯里先輩がみんなから声をかけられる理由が、なんとなくわかりません」

「そうなの？」

「だって、ストーカー男さんを感激させたり、カップルさんのためにサン・ジョルジョ・マツジョーレ教会まで行くとか。そこまでするウンディーネなんていないと思います」

「たまたまだよ。でもアリスちゃんも、そのプロポーズする人のために、ムラーノ島を案内するつもりなんでしょ？」

「それは乗り掛かった舟といえますか」

「おんなじじゃない？」

「まあ、そうですね。そうとも言えるでしょうか」

灯里はアリスの顔を見て、やさしく微笑んだ。

アリスはその灯里をみて、少し顔を赤くしていた。

第21話

サン・ジヨルジヨ・マツジヨレ教会の神父様からは、灯里が思っていた以上にスムーズに了解を得ることができた。

「最近、暇だったからね。結婚式ならウエルカムだよ。なんだったら、灯里ちゃんに営業を頼んじやおうかなあ」

灯里は丁重にお断りをした。

店に戻り、姫屋カンナレージヨ支店に電話を入れたが、藍華はゴンドラで営業に出ているところだった。

A R I Aカンパニーはと言えば、午後から一組のお客様を残すのみとなっていた。

灯里は、それまでにできる用事を済ませてしまおうと、早速店内の掃除に取りかかろうとした。

「灯里さん、いらっしやる?」

カウンターの外から声が聞こえた。

「はい!どちら様・・・」

「お久し振りね」

「アサカさん!」

アサカは、先日街で会った時のカジュアルな装いと違い、紺色のジャケットに、折り目がしつかりとついた黒のパンツ姿だった。

灯里は、思わずまじまじとその出で立ちを、上から下まで眺めた。

「仕事の時は、こんな感じなの」

「はあ・・・あつ、すみません」

「どう?忙しい?」

「おかげさまで、それなりに」

「何?その言い返し」

アサカは灯里の返答に思わず笑ってしまった。

「それなりに、忙しいのね?」

「そんなところですよ」

「フフフ」

「すみません」

「なんで謝るの？」

「なんとなく」

アサカは軽く息を吐いて、店内を見回した。

「実はね、今日はお仕事の件で来たんだけど」

「確かアサカさんは、アクアトラベルの方なんですよね？」

「知っていてくれたんだ」

「藍華ちゃんから聞いてました」

「あの姫屋の藍華さんね」

「はい。以前団体さんのお仕事でお店に来られたと聞きました」

「そうね。あの時は藍華さんに大活躍してもらったわ。一番張り切ってたー！」

「それ、わかります。藍華ちゃんなら、きっとそうだろうなって」

「そこでなんだけど」

「はい。なんででしょうか？」

「灯里さん？」

「はい？」

「あなたを一日お借りしたいのだけど」

「私を？借りる？・・・ええー！」

灯里はポカンとした表情で、アサカの笑顔をじっと見つめた。

「どうかしら？大丈夫そう？」

「えっと、あの、それはどういったご用件なんでしょうか？」

「もちろんウンディーネとしてよ。他に何かある？」

「そうですよね。エへへへ」

「灯里さん？」

「はい！」

「どんな想像をしてたの？」

「だって、借りるっていうから、炊き出しとか、サンタの格好とか」

「何それ？ハハハハ」

「違いますよね。失礼しました」

アサカはお腹を押さえながら、目尻から流れる涙をぬぐっていた。
「灯里さんて、ホントに楽しい方ね」

「そうでしょか〜」

アサカは灯里の困惑した反応に思わず笑顔になっていた。

「それで、あの〜」

「なに？」

「その借りるといふのは・・・」

「そうだったわね」

灯里は何を頼まれるのかと、少し不安な気分になっていた。

「もちろん、いつも灯里さんがやっている観光案内なんだけど」

「はあ」

「一日貸しきりで、ある人のために仕事をお願いしたいの」

「貸し切り、ですか？」

「ええ、そう。頼めるかしら？」

「えつとですね」

そう言つて、灯里は店内の壁にあるスケジュールボードの方に振り返った。

考えようとしたが、あまりその必要はないようだった。

「あの・・・大丈夫そうです」

「そう？それじゃあ、灯里さんが都合のいい日を教えてください？」

「はい。わかりました。少し先になると思いますが、一日スケジュールを空けておきます」

「ありがとうございます。助かるわ」

「それで、あのー」

「ん？何？」

「アサカさんが先程おっしゃってた、ある人というのは、どなた様かお聞きしてもいいでしょうか？」

「そうだったわね。肝心なことを言うの忘れてた」

アサカはそう言つて、改めて灯里の方に向いた。

「実は、私の娘、結婚するの！」

「はい、そうなんですか・・・えっ？ええ〜！」

「ハハハハ！驚くのも無理ないわよね」

「だって、アサカさんの娘さんで、この間お会いした方ですよ？」

「名前はアンナ。まだ16なんだけど、なんだかそんなことになったわけなの」

「おめでとうございます!」

「おめでとう、でいいのよね?」

「はい!それはやっぱりそうだと思いますが・・・違うんですか?」

「やはりそこは複雑なんだけどね、母親としては」

灯里は、アサカを店内に招き入れた。

テーブルに用意したカップに紅茶を注ぐと、アサカの向かい側に座り、あらためて話を聞くことにした。

「アンナが言うの。結婚するなら、このネオ・ヴェネツィアで結婚式をあげたいって」

「そうなんですか」

「アンナにとっても思い出深いところだから、是非そうしたいって。そして、そうになったら、灯里さんのゴンドラで記念すべき日を送りたいって言うの」

「私のゴンドラで?」

「そうなの」

「どうしてですか?」

「灯里さんは、覚えてないかもしれないけど。アンナが小さい頃、あなたに助けってもらったことがあるの。私が忙しくて、あの娘にかまっていられなくて。それでひとりで出掛けてしまって。迷子になったアンナを灯里さんが見つ付けてくれた」

「実は、先日そのことを思い出したんです。アンナさんとお会いして。あ、思い出したのは、そのあとなんですけど。もしかしたら、あのときの女の子だったんじゃないかなって」

「そうだったんだ。やっぱり灯里さんとは、何かご縁があつたのかもしれないわね」

アサカは目を伏せると、ティーカップの取っ手にそっと触れた。

「先日、灯里さんと街で再会したとき、あのときは急にキャンセルが出たことで一日時間が出来て、それならアンナを呼んで、このネオ・ヴェ

ネツィアを満喫しようと思ったの。そしたら、偶然にも灯里さんと遭遇した」

「そうだったんですね」

「そうしたら、また迷子の子供と一緒に！しかも、その子供以上にあたふたしてた！」

「ああそれはくお恥ずかしいところをくお見せしてしまいましたく」

「ハハハハ」

灯里は肩をすくめて苦笑した。

「でもあの時、わかったわ。灯里さんて、ほんとにやさしい人なんだって。それにあの時のことも」

「あの時の？」

「わたし、勘違いしてたってことに気づかされたの」

「はあ」

「だからね、お詫びのしるし」

「はい？」

「ちよつと遅くなつたけど、灯里さんのプリマ就任、そして新生ARRI Aカンパニーの一周年におめでとう！」

「アサカさん」

「私も一応観光の世界に身を置いている者としては、ここはお仕事で返したいなって思っつて。つまり、ご祝儀つて言えばいいかな」

「そんなあ・・・」

灯里は目を潤ませた。

「でも私、嬉しいです！」

「よかった。灯里さんに喜んでもらえて」

「ところで、その日一日、観光案内をすればいいんですか？」

「実はまだ、詳しいことまでは聞いてないのよ」

「はあ、そうなんですか」

「結婚式そのものには、あまり興味がないみたいで。でもせっかくだから、思い出に残るような結婚式に、本当はしてほしいんだけど。せっかくなのでこのネオ・ヴェネツィアでやるんだから」

「そうですよね」

そう言うと灯里は、ふっとカウンター越しに海の方へ目を向けた。

「あの、もしよかったらなんですけど・・・」

アサカは、自分に真剣な眼差しを向ける灯里を、不思議そうに見つめ返した。

第22話

「ア、アリス様！」

「あなたは、確かあの時の人」

アラトリアは、突然目の前に現れたアリスに驚きを隠せないでいた。

「どうしてアリス様がここに？」

サン・マルコ広場から程近いボート乗り場付近でふたりは遭遇していた。

「確か今日のアリス様は、完全オフだったはず・・・」

「はあ？」

アリスの顔が一気に怪訝な表情へと変わった。

アラトリアは、改めてアリスの服装を不思議そうに見つめた。

いつもの制服姿。

「なぜあなたが、私が今日はオフの日だということを知ってるのですか？」

「あ、そ、それはですね、偶然と申しましょうか、なんと言いましようか。ホホホホ」

「今時、そんなわざとらしい笑い方する人、見たことありません」

アラトリアは、はっと目を見開いて固まってしまった。

「これは失礼をいたしました。私としたことが、ついいつものクセが出てしまいました」

「いつもの、ですか」

アラトリアはどうしたものかと、辺りをキョロキョロ見回した。

「それで？」

「はっ？」

「ですから」

「はい！」

「何かご用でもあるのですか？」

「ご用と申しますと」

「聞いているのは、こちらなんですけど」

「あつ、そうですね。えつとく・・・」

「特にないようですね。それではこれで」

アリスは目を伏せて、そのままアラトリアの横を通り過ぎようとした。

「ウンディーネさん！」

アリスは背後からかけられた声にはつととして、その場に立ち止まった。

そのそばでアラトリアは、声の主の方を見るなり、驚きの表情で口をあぐりと開けた。

「ど、どうして？」

「ウンディーネさん、遅れてすみません！よかったあ。間に合って」

「あ、いえ、私も今しがた到着したところですので」

アラトリアはふたりの間で、交互に顔を見比べた。

「あれ？アラトリアさんもご一緒だったんですか？」

「へっ？はっ？」

「あの、こちらの方とはお知り合いなんですか？」

「はい。ぼくたちの結婚のために、わざわざ協力してくれるというのです」

「協力？」

アラトリアは誰が見ても明らかに焦りの表情へと変わっていった。

「あ、それは、また、おいおいということだ」

「おいおい？」

「えつと、あれ？お二人は同じオレンジぷらねつとの方なんですよね？」

「はあ？」

アリスの声が一段高くなった。

「ああ、これには、実はいろいろと事情というものがありました」

「ちよつと！」

「はい！」

「聞かせてもらえますよね」

「はい・・・」

アラトリアは、横目でにらむアリスの疑いの眼差しに、すつかりうなだれてしまった。

「こちらのアンドレさんが、実はその方です」

「ええ？」

アリスは偶然にも程があると、驚きより、あまりのうますぎる話に戸惑っていた。

「つまり、こちらの方が、ティンカーベルの粉を振りかける予定だった・・・」

「ティンカーベル？粉？」

三人は一緒にボートの上にいる。

ボートの行き先は、ムラーノ島。

そして今日は、アリスが結婚を控えた男性に、ヴェネチアングラスの工房を紹介するという約束を果たす日だった。

だがその男性は、本来オレンジぷらねっとのナイトパーティーで、サプライズのプロポーズを行う予定の男性でもあった。

「でもお相手の女性が忙しいということ、スケジュール的に無理だということになったと」

「はい。確かにそうではごさいましたが、そこはそこでちよちよいのちよいと」

「ちよちよいのちよい？」

「も、申し訳ありません」

「ちゃんと説明してください！」

アラトリアは観念したように、ことの顛末を洗いざらいアリスに話して聞かせた。

サプライズパーティーの仕掛人を、アリスがことのほか嫌がっていたこと、その一方で予定していたカップルがスケジュール的に難しくなってきたこと。

そして、アリスをその任から解放するため、先手を打って、プロポーズする予定の男性に、その機会を改めて用意すると、アラトリアが秘密裏に話をしたこと。

もちろん、オレンジぶらねつとの関係者になりすましてだが・・・
「ちよつと！それっていいんですか！」

「ああ、それはですね、全くのウソというわけではありませんでして」
「どういうことですか？」

「内緒ですよ、アリス様」

「話によります！」

「それは、そうでございしますが」

アラトリアは焦りのせいで、汗をかきまくっていた。

「はあく。わかりました。とりあえず、すぐには口外しないと申し上げておきます」

「アリス様」

「それで？」

「実は」

グレース財閥の一族の関係者で、アラトリアと古くから付き合いのある女性が、オレンジぶらねつとの運営企画室にいること。そして、その人物から逐一アリスの情報を得ていたことなどを赤裸々に語った。

「な、な、なんとということ！」

「申し訳ありません！アリス様！わたくしは覚悟ができております！
ご随意に何なりとお沙汰をお下しくくださいませ！」

「もう！いったいどうなってるの？」

アリスは眉間にシワを寄せて、ほっぺを膨らませた。

少し離れたところにいた男性は、アリスの声に驚いて振り返り、不思議そうにその様子を眺めていた。

「ただ・・・」

「まだ何かあるのですか？」

「わたくしに協力した者の処分だけは、何卒寛大なるご処置をお願いいたします！」

「もう！」

アリスは呆れたように大きなため息をついた。

「はあく」

「でも、実際、結婚するとなったとき、どうするつもりだったのですか？」

「そこは、我が財閥の力をもってすれば、いかようにもできるかと」

「あの！」

「はい！」

「そんなことでいいんですか？」

「と、おっしゃいますと？」

「起業されるとおっしゃってましたよね？」

「ア、アリス様！覚えていてくださったので・・・」

「それに。私、忘れてませんから！」

「えっと、それは」

「灯里先輩を侮辱したことです！」

「ああ、それは、確かにわたくしの失言です」

「ほんとに思ってるんですか？」

「それは本当に反省しております」

アラトリアは、先日、ひとりARRIAカンパニーを訪ねて、灯里のゴンドラに乗ったことを話した。

「灯里様は、全ての仕事をお一人でこなされておられました。そして、何気ないお心遣いがゴンドラに乗っていた人たちに、安心感を与えていました。それに」

「それになんですか？」

「灯里様と出会った人たちは、皆さん笑顔で灯里様を迎えておられました。まるで昔から知っているお友達のように。わたくしは、これまでにそのような方と出会ったことは一度もありません」

アリスはアラトリアの真剣に話す横顔を見つめた。

「そこは私も同感です。灯里先輩は、友達作りの達人ですから」

アリスは灯里のことを思い浮かべるように、過ぎ行く水面を見つめた。

「アリス様の言いたいこと、わかっているつもりです。あのミス・パーフェクトと称されたアリシア様のあとを引き継いで、灯里様はプレッシャーを感じずにはおれなかったのではと、今ならわかる気がしま

す。それを何も考えずに簡単に言葉にしてしまった。今は正直、恥じております」

「じゃあなんで、そんな、なんでもかんでも簡単にできるようなことを言うんですか？」

「それは、アリス様のお役に立ちたかったわけ」

「私はまだ信用したわけではありませんから」

アラトリアは途方に暮れた表情で、ボートの先の水面を見つめていた。

「ただ、ここまで来た以上、アンドレさんの結婚式は、絶対に実現しなければいけないと思ってます」

アラトリアは、はっとした表情でアリスの横顔を見つめた。

第23話

「藍華ちゃん、ということなんだけど、どう思う?」

灯里から連絡があったことを営業から戻って聞いた藍華は、その足でARRIAカンパニーにやって来ていた。

それぞれ、その日の仕事の予定を済ませていたこともあって、少しゆっくりと話せそうだった。

「どう思うって言うけど、いったいどうなったら、そんな話になるの?」

「やっぱり無理かなあ」

「そうじゃなくて。灯里さあ、あんたってつくづく、そういうことなんだよね」

「何が?」

「だからさあ、なんで本人がそれに気づかないのかが、不思議なのよねえ」

「ごめん。藍華ちゃんの言ってる意味がわかんないんだけど」

「だからね、私がたまたまサン・ジョルジョ・マツジョーレ教会で結婚式を挙げたいというカップルに出くわしたかと思ったら、すでに灯里が観光案内していたカップルだというし。仕事で知り合っただけでたアサカさんは、昔すでに会っていた添乗員の人で、迷子になっていた娘さんを送り届けていたなんて、そんなエピソードまで出てくるし。そしたら今度はその娘さんが、このネオ・ヴェネツィアで結婚式を挙げたいって言うし。いったいこの話、どこまでいくの?」

「ホントだねえ」

「あんたのその感心ぶりが、私には不思議なのよ」

「だって、藍華ちゃんに言われて、ホントそうだねえって感じだよ」

「まあ、あんたがそう思うんなら、それでいいんだけどね」

「それで、どう思う?」

「つまり、合同結婚式ってこと?」

「そう。アンナさんがあまり結婚式に感心がないっていうのを、アサカさんが残念がっていて、その時カップルさんがサン・ジョルジョ・

マッジョーレ教会で結婚式を挙げたいって話を思い出して。それをアサカさんに話したら、それもいいかもってなって」

「でもそれって、まだ神父様には話してないんでしょ？」

「そうなんだけどね。でも多分大丈夫だと思う」

「なんで？ リンゴと一緒に食べた仲だから？」

「そういうわけじゃないけど。こないだ結婚式を挙げられるかを聞きに行った時に、私に営業を頼んじゃおうかって言ってたぐらいだったから」

「もちろん冗談だよな？」

「うん。たぶん」

「それであんたはどうしたの？」

「もちろん断ったよ」

「そりやそうよね」

藍華は少しため息をつくとき、灯里の入れた紅茶を口にした。

「そう言えば、こないだアリスちゃんも、結婚する予定の男性にムラーノ島を案内するって言ってた」

「何それ？」

「なんかね、彼女さんに送るためのヴェネツィアングラスを探してる人に出会ったらしくて。それならムラーノ島がいいんじゃないかってことになって」

「そうなんだ。後輩ちゃんも何かと忙しくしてるのね」

「そうみたいなんだよねえ」

「それで後輩ちゃんはどうかなの？ 最近は相談には来てないの？」

「ナイトパーティーのことでしょ？ そういえば、最近は来てないなあ」

二人はそう言いながら、何気なくカウンターの外の景色に視線を移した。

すると突然、そこにアリスが姿を現した。

ふたりと目が合ったアリスは、目を見開いてギクツと固まってしまった。

「な、な、な」

「アリスちゃん！」

「な、な、な」

「あんた、さつきから『な』しか言っていないわよ」

「なんなんですか!」

「それはこっちのセリフだと思うけど」

「だってふたりして、なんでこちらをじっと見ているのですか?」

「別にじっと見てたわけじゃないけど」

「そんなの、驚くに決まってるじゃないですか!」

「アリスちゃん、大丈夫?」

アリスは店内に入って来るなり、かなりの勢いで話始めた。

「ちよつと聞いてください!」

「どうしたの、アリスちゃん?」

「先日、ムラーノ島へヴェネツィアングラスの工房を案内するのにお連れした男性がですよ?」

「サン・マルコ広場で会ったっていう人のことですよ?」

「はい。その人が、なんと、私が魔法の粉をかけるはずの人だったんですよ!」

「あ、あのさあ、後輩ちゃん?何を言ってるわけ?」

「ですからあ、私が、ティンカーベルになってですね、魔法の・・・」

「ああ、あのおじちゃんになった企画の件でしょ?」

「それです!」

「その人とムラーノ島へお連れした人が同じ人だったの、アリスちゃん?」

「そうなんです!」

「そんなできすぎた話、ある?」

「本当だったんですよ!」

「アリスちゃんが驚くのもわかる気がする」

「それだけでも大変だったんですけど」

「まだ続きがあるの?」

「その男性の方、アンドレさんと言うんですけど、偶然サン・ジョルジヨ・マツジョーレ島が見えるところを通った時に、そこが教会だと知って、それならあそこで結婚式を挙げれるのかとなったんです

よ」

「何それ？」

「えっ、何がですか？」

「そんな偶然であるの？」

「どういうことですか？」

「灯里？」

「えっ、わたし？」

「あそこって、なんかあるの？」

「ただ、そこにはいろいろとありまして……」

アリスは先ほどまでの勢いとは違い、少し複雑な表情になっていた。

「どうしたの、アリスちゃん？」

「実はわたし、すごいストーリーカーに狙われているんです」

「ええ〜！ どういうこと？」

「あんだ、なんでそんな大事な話、黙ってたの？」

「そうだよ。アリスちゃんは、すでにそういったことがあったわけなんだから」

「すみません、先輩方」

アリスは、ウンディーネ志望の女の子が、最近近づいてくるようになり、挙げ句の果てには、オレンジぷらねっとに勤めている知り合いを通じて、アリスのスケジュールまで把握していたことなどをふたりに説明して聞かせた。

「しかも、先ほど話したアンドレさんの件にも関係してたようで……」

「何それ？ どういうことなの？」

「スケジュールが合わなくて、ナイトパーティーの件がなくなったのは事実だったんですが、それを勝手にフォローしようと画策していたんです！」

「あ、あんだねえ、スパイか何かみたいなこと言ってるけど」

「アリスちゃん、どういうこと？」

「その人、アラトリアっていう人なんですけど、私の大ファンらしく

て、役に立ちたいとかで、アンドレさんに結婚式が実現できるように働きかけていたんですよー!」

「はあ? 何それ?」

「ですから、私にわからないように、アンドレさんにですね、結婚式の話ですすね……」

「後輩ちゃん、今ストーリーカーって言ったわよね? それが結婚式を手伝うって言うの?」

「手伝うというんじゃないで、勝手に進めてたといったらいいでしょうか。それもオレンジズぷらねつとの社員を使っただけですよ!」

「でもなんでそこまでするの?」

「それはですね、私がどうしてもティンカーベルをやりたくないってことを知って、それなら一肌脱ぎましようとなつたみたいなのを、確か言っただよな……」

「結局それって、全部後輩ちゃんのためってことじゃないの?」

「例えそうだとしても、おかしくないですか? こんなこと!」

「まあ、そう言われれば、確かにちよつとやり過ぎかもね」

「それでアリスちゃんの方は大丈夫なの?」

「私の方は大丈夫ですけど」

「それはよかつたね。ちよつと心配しちゃった」

「灯里先輩、ありがとうございます。でも灯里先輩も怒っていいくらいなんですよー!」

「どうして? 私が?」

アリスはアラトリアと初めて会った時のことを灯里に話した。

「ほんとに失礼だったんですから!」

「アリスちゃん、そんな風に思っただけでくれたんだ」

灯里は嬉しそうにほほえんだ。

「だってそうじゃないですか? 就職するのに意味がないなんて言っただけで。私が怒ったもんだから、その後先輩のこと、一応見学に来たらしいですけど」

「見学に来たの、その人?」

「はい。ゴンドラにも乗ったって言ってましたよ」

「見学・・・」

「灯里？覚えてないの？」

「もしかして、あの就職希望の見学の人かなあ」

「来たんだ」

「でもすごく若い人だったよ。というか、学生さんて言った」

「ええ。十五才らしいです。ネオ・ヴェネツィア国際学院に通ってるって言ってました」

「十五才でネオ・ヴェネツィア国際学院って、バリバリのお嬢様じゃないの？」

「そうらしいですけど」

「そんな女の子がストーカー？なんかの間違いじゃない？」

第24話

「そんなことがあったの？フフフフ」

「アサカさん、ご存知なんですか？」

アサカは改めて、娘のアンナの結婚のことで、ARIAカンパニーを訪ねていた。

「アラトリアは、私がお世話になっっている方のお孫さんで、小さい頃からよく知っているの」

「そうだったんですか」

「彼女は、思ったら行動に移さないと、いてもたってもいられない性分で。その事が時として周りの誤解を生んでしまうこともあるんだけど、決して悪意はないのよ」

アサカは何かを思い出すような、穏やかな笑みをたたえた。

「ただ、今回はちよつとやり過ぎたかもね」

そういつて、今度は困ったような苦笑いの表情を灯里に向けた。

灯里は、そんなアサカの話や、やさしい笑みを浮かべて聞いていた。

「なんか、アリスちゃんのためならということだったらしいです」

「オレンジぶらねつとのアリスさんね？私も聞いている、そのはなし」

「ストーカーとかなんとか・・・」

「えっ？ストーカー？」

「私も最近そんな人に会ってたような、ないような・・・」

「灯里さん、大丈夫？」

「ああ〜私は〜大丈夫なんですう〜」

「そうなの？それならそれでいいのだけど」

「ただですね」

「ただ、ナニ？」

「ただ、話がですね、私の予想を越えて、ちよつと大きくなってきてしまったような・・・」

「どういうこと？」

「その、アリスちゃんがティンカーベルで魔法の粉をかける予定だったアンドレさんも、サン・ジヨルジョ・マツジョーレ教会の存在を知っ

て、それなら自分たちもそこで結婚式を挙げられないかって。そんな話になったようなんです」

「そうなんだ」

「ただそれには、そのアラトリアさんという方が、それはいいんじゃないかと、かなりプッシュされたということのようで」

「ああ、なるほど。アラトリアね」

アサカは、腕組をして、うくんとうなるように目を閉じた。

だが、軽く微笑むと、ふっと息を吐いた。

「彼女は彼女で、罪悪感を感じてるんだと思う。それに、アリスさんの信頼を損なったことは、アラトリアにとつて、本当に落ち込むような出来事だったと思うの。あの子、ああ見えて、根は純粹だから」

「はあ」

「ちよつとね、伝わりづらいところがあるのよ」

「そうなんですか」

「そうなの。大目に見てやってくれない？」

「いえ、私は、まだ、そんなに存じ上げていないので」

「そうね。でも多分だけど、これからあるかもしれないので」

「ええ〜！どういふことがあるんですか？」

「フフフフ。冗談よ、灯里さん！」

「アサカさ〜くん」

「それで灯里さんとしては、どう考えてるの？」

「それなんです」

灯里はちよつと難しそうな表情でアサカの顔を見た。

「最初は、このネオ・ヴェネツィアで結婚式だなんて、とても素敵なことだと思っていたんです。でもまさか、こんなふうに、続けて結婚式の話が出てくるなんて、考えもしなくて」

「それはそうでしょうね。私も話を聞いていて、そんな珍しいことがあるんだなって思った。灯里さんが困惑するのも無理もないと思う。ただ・・・」

「なんですか、アサカさん？」

「なんか、もう、答えが出てるような気もするんだけど」

「どういうことですか？」

「これまでの話、全て灯里さんがその中心にいるように、私には見える」

「私が？」

「そうじゃない？」

「ただの偶然かと・・・」

「こんなにも続く偶然であるの？それともう、必然といってもいいんじゃない？」

「必然・・・」

「そう。起こるべくして起こった、といったら言い過ぎかしら」

「でもアサカさん？さっき、答えが出てるって言ってましたけど、それってどういうことですか？」

「すべては灯里さんを指し示しているとしたら、灯里さんが思うことを、そのままやればいいんじゃないかってこと」

「私が思うこと」

「灯里さんが描いていた風景は、どんな風景なの？」

灯里はアサカの問いかけに、キョトンとした表情でアサカの顔を見返していた。

「その風景を、私にも見せてくれない？」

午後からの予約客のことを聞いたアサカは、ARIAカンパニーをあとにすることにした。

灯里の困った顔に対して、どんな結果になっても、アンナなら理解してくれるはずだと、灯里を安心させようと言葉をかけて店を出てきた。

そして、棧橋を渡ったところで振り返った。

明るい日射しの下、ARIAカンパニーは、いつもと変わらない姿をしていた。

その光景を見たアサカは、ARIAカンパニーが、これまでも、そしてこれからも、変わらずにARIAカンパニーであり続けていくのだらうと感じずにはいられなかった。

その時だった。

「あの、失礼ですが」

アサカは、不意に背後から声をかけられ、驚いて振り返った。

「あの、もしかして・・・」

目の前に現れたその女性は、かけていたメガネをはずしながら、アサカに改めて視線を向けた。

その、一層磨きがかかった美貌と、落ち着いた物腰、眩しさに目を細める表情の中にたたえた優しさは、見るものを魅了せずにはいられない輝きを放っていた。

第25話

「お会いしたこと、ありましたでしょうか？」

アリシア・フローレンスは、振り返った女性にそう声をかけた。

「ええ、何度か」

アサカは突然の出会いにそれ以上言葉が続かなかった。

「すみません。こんな尋ね方をしてしまつて」

「あ、いえ」

「ご用の方は、もうお済みですか？」

「えっ？」

「中から出てこられたので」

「あ、そうですね」

「そうですか」

「あの」

「はい」

「アリシアさん、ですよね？」

「ええ、そうです」

「私は」

「確か、旅行会社にお勤めの」

「えっ、なんでそれを？」

「なんとなく、そうじゃないかと。でも、すみません。お名前までは・・・」

「アサカ・マリアーノと申します」

「アサカさん。いつもARIAカンパニーをご贖下さり、まことにありがとうございます」

「いえ、こちらこそ」

「そして、当店のプリマ・ウンディーネをご贖下りにしていただき、心より感謝申し上げます」

アリシアは、ゆっくりと頭を下げた。

「アリシアさん」

アサカは、アリシアのその様子に、驚きを隠せずにいた。

もうすでに引退しているアリシアが、こんなことまでするだなんて。

だが、アリシアは頭をあげると、そんなアサカにニコツとほほえんだ。

「でもアリシアさん？ 実は、仕事を依頼するのは今回が初めてなんです」

「あら、そうだったんですか？」

アサカのその言葉に、アリシアは目を見開いて反応してみせた。

その瞬間、ふたりは思わず吹き出してしまった。

そのままお互い笑っていたが、アリシアはアサカにこう切り出した。

「あの、よろしければ、少し歩きませんか？」

「アリシアさんは、ARIAカンパニーによく来られるんですか？」

「時々です」

「もう引退されて一年以上経ってるんですよね？」

「ええ」

アリシアとアサカは、海岸線をゆっくりと歩いていた。

ふたりは対照的な印象だった。

女性らしい、柔らかな印象のアリシアと、ジャケットにパンツというキリッとした印象のアサカ。

「心配なんですね」

「以前は、そんな時もありました。でも今は信頼しています」

「でも灯里さんは、まだ少し不安を感じてらっしゃるようですね」

「灯里ちゃんをご存知なんですか？ 先程、初めてのご依頼だと」

「実は私も驚いているんです。灯里さんとのご縁は」

アサカは、これまでの経緯を簡単にかいつまんで説明した。

ここ最近遠ざかっていたネオ・ヴェネツィアに再び戻ってきたとき、灯里との再会をただの再会だと思っていたこと。

それが自分の勘違いだと知ったとき、灯里との縁が何度も巡っていたことに気づかされたこと。

「昔はアリシアさんに憧れていたんです」

アサカは立ち止まると、海の方に目を向けた。

「仕事で少し停滞ぎみになっていたとき、アリシアさんの姿を見たんです。ひとりでお店を切り盛りしながらも、優雅にゴンドラに乗る姿に、ただただ魅了されました」

そんな話をするアサカの横顔を、アリシアは神妙な面持ちで見ている。

「しばらくネオ・ヴェネツィアから遠ざかっていて、再びここへ来るようになったときには、すでに灯里さんがシングルとして、アリシアさんとゴンドラに乗っていた。その時、わたし乗ったんですよ。灯里さんとアリシアさんのゴンドラに」

「そうだったんですか」

「その時のアリシアさんと灯里さん、本当に楽しそうに観光案内をされていた。だから、その時の灯里さんの印象が強く残っていたんですね。初めて会ったのはその時だとばかり思っていた」

「でも違っていた」

「ええ」

ふたりの間に、少しの沈黙が流れた。

だが、アサカが何かを言おうとアリシアの方に顔を向けたとき、アリシアは、それに笑顔で答えた。

「ん？」

「アリシアさん」

「なんででしょうか？」

「最近思うんです」

「はい」

「娘の結婚が決まったとき、もしかしたら、灯里さんとの出会いは、この日のためにあつたのかもしれないと」

アリシアは少し驚いたように、アサカの顔を見つめた。

「それって、どういうことなんでしょうか？」

「うまく説明はできないんですけど、きっとそうだったんじゃないかって」

「アサカさん」

「ちよつと、大袈裟に思われるかもしれないですけど」

そう言つてアサカは苦笑した。

「その話、灯里ちゃんが聞いたら、きつと喜ぶと思います」

「そうでしょうか？」

「もちろんです。それに、きつと、自信につながると思います」

「自信、ですか」

「ええ」

「私みたいなのが、灯里さんの自信につながるのなら、それはとても光栄なことですけど」

ふたりは眩しく光る、アドリア海に目を向けた。

「アリシアさん？」

「はい？」

「ARIAカンパニーって、本当はあの頃と何も変わっていないのかもしれない。私が勝手に違ったように感じていただけかもしれないです」

「それって・・・」

「もちろん誉め言葉ですよ！」

「ええ。わかつています。でもアサカさん？」

「なんででしょうか？」

「嬉しいお話ですけど、違うんです」

「どういうことですか？」

「今のARIAカンパニーは、灯里ちゃんのARIAカンパニーなんです」

「アリシアさん」

「感じるんです。灯里ちゃんが撒いてきた種が、ようやく芽を吹き始めたって」

アサカは、アリシアの言葉に、驚きとともに深い愛情を感じずにはいられなかった。

「アサカさんは灯里ちゃんに何かを感じてくれた。それが何よりの証拠だと思えます」

「私が灯里さんに」

「私には、ここでこうしてアサカさんといることそのものが、灯里ちゃんもたらした奇跡なんじゃないかと」

アリスアはしあわせそうな表情で、青い空を見上げた。

「といたら、大袈裟でしょうか？」

はにかんだ笑顔を向けてそう言ったアリスアに、アサカは自然と微笑んでいた。

第26話

「ちよっと灯里？いったいどうなってんの？」

藍華は、ARRIAカンパニーの、そのカウンターの外から、やって来た勢いのまんまで話し始めた。

「藍華ちゃん、いらっしやい！」

「はい、どうもお邪魔します、って違うでしょ！」

藍華は、ARRIAカンパニーへ来る前に、灯里に電話を入れていた。

「今から行くけど、いるわよねえ？」

「うん、いるけど。何かあったの？」

「それはこつちが聞きたいの！」

藍華は電話を切つてからARRIAカンパニーに到着するまで、そう時間がかからずにやって来た。

「早かったねえ」

「あのね、灯里？あんた、なんでそんなに落ち着いていられるの？」

「ええ？何が？」

「何がってさあ、こんなこと聞かされて、普通は驚くでしょ？」
「うーん」

灯里は、天井に目を向けて思案していた。

「わざとじゃないわよね？」

「もしかして・・・」

「もしかして？」

「きのう」

「きのう？」

「アリシアさんが」

「そう、それよ！アリシアさんが、ナニ？」

「元気？って電話があつたけど」

ドタッ

「藍華ちゃん、大丈夫？」

「ダイジョウブ」

「鼻つまんでる」

「そんな解説はいいの！」

藍華はカウンターを乗り出さんばかりの勢いになっていた。

「特別チャーター便の件よ！」

「ナニそれ？」

「今朝、いきなり電話があつたの。この間、サン・ジョルジョ・マツジョーレ教会で結婚式を挙げられなかったって聞いてきたカップルがいたでしょ？あの人たちから！」

「そうなんだ」

「したら、教会で結婚式をやるから、その日一日よろしくお願いしますって」

「そうなんだあ。よかったねえ」

「あんた、ほんとになんにも知らないの？」

「何が？どういうこと？」

「あのねえ。その後よ！問題は！」

「ええ？」

「したら、今度は後輩ちゃんから電話がかかってきて、あのアンドレさんの結婚式が決まったって言うの」

「それはそれは」

「でも聞いて驚かないですよ！そのアンドレさんの結婚式の日が、あのカップルさんの結婚式と同じ日だったのよ！しかも場所も同じ、サン・ジョルジョ・マツジョーレ教会よ！」

「ええー！」

「しかも、後輩ちゃんも、アンドレさんからチャーター便を頼まれたんだって！」

「そうなのー？」

「こんな偶然で、あるわけないでしょ？」

「そう言われれば、そうかも」

「なんか知らないの？と言うかさあ、あんた、絶対なんか隠してるでしょ？」

「なんかかっていうか、結婚式の話が、確かに多いなあって思ってたよ」
「ほんとにそれだけ？」

「ああ、そういえば私の方も先日なんだけど」

「先日がどうしたの・・・」

藍華はそう言いながら、何気なく壁に掛かっているスケジュールボードに目を向けた。

だがその瞬間、藍華の顔が一変した。

「ちよつと、灯里、いったいどういうこと？」

「えっ、なに・・・」

藍華の様子を見て、灯里もスケジュールボードを見た。

「そこに、すごくくきになることが書いてあるんだけど」

「どれ？」

「それ。へアンナさん 結婚式（の予定）って」

「そうなんだよ。アサカさんの娘さん、結婚するんだって。ビックリしたあ〜」

「それももちろん、ビックリなんだけど。なんで同じ日なの？」

「何が？」

「何がじゃないわよ！あのカップルも、アンドレさんも、そしてアンナさんも。みんな同じ日に結婚式を挙げるんじゃない！」

「ええ〜〜！」

「もしかして、サン・ジョルジョ・マツジョーレ教会じゃないでしょうね？」

「そうなんだよねえ〜」

「はあ？なんなの、それ？」

その時、電話がなった。

「はい、ARIAカンパニーです。はい、はい、ええそうですけど。ええ、先ほどお聞きしました。おめでとうございます。いえいえ、そんなあ。まあまあ。そうですねえ」

「灯里、あんた、おばちゃんみたいなんだけど」

電話を切った灯里は、驚きでいっぱい笑顔で話し始めた。

「さつき藍華ちゃんが話してたカップルさんからだった！」

「何だって？」

「サン・ジョルジョ・マツジョーレ教会で結婚式を挙げる事が決まっ

たつて。それはみんな、ウンディーネさんのおかげだつて言つてた！」

「えつ、ちよつと待つて。私は？」

「藍華ちゃんのごとは、特に、何も」

「何も？」

「うん」

「そういう感じなのね、今回は」

「そういう感じ？」

「でもちよつと待つて！それじゃあさあ、なんで灯里に頼まないの？
チャーター便？」

「それはね、もう予約が入ってるからつてお断りをしたの。こないだ」

「えつ、なに？どういふこと？」

「一日貸し切りでお願いしたいつて言つてこられたんだけど、アサカさんの予約が先に決まつてたから、お断りしたんだよね」

「つまり、アンナさんの結婚は、すでに決定事項だつた、ということ？」

「そういうことになるねえ」

「はあくくなんか疲れた」

また電話が鳴つた。

「はい、ARRIAカンパニーです。はい。はい。ええ。そうなんです
かあ？それは良かったですねえ。おめでとうございます！はい。はい。
はい！そうですね。いえ、こちらこそよろしくお願いします」

受話器を置いて、振り返つた灯里は、またもや笑顔満面だつた。

「アンドレさんからだつた！」

「はあ？アンドレさんていつたら、あのアンドレさん？まだ会つたこと
ないけど」

「なんかね、アリスちゃんと話をしてたら、サン・ジオルジョ・マツ
ジョーレ教会での結婚式は大丈夫だろうとなつて。それで神父様に
尋ねたら、やつぱりオーケーだつたてことらしいの」

「ふくん。そうなんだあ・・・」

「藍華ちゃん、どうしたの？急にトーンが落ちてるようだけど」

「なんとなく察しはついてるんだけど、一応聞いてあげる」

「それでね、神父様の方から、合同結婚式のかたちになりそうだけどつて話したら、それはとてもサプライズですばらしいってことになったんだって」

「なるほど。それで？」

「それでね、それを発案したのは、わたしだって話したらいいの」

「ふくん。発案してたのね」

「うん、してた」

「それで？」

「それなら、ARIAカンパニーに一度お礼の電話をしておこうとなったらしくて・・・」

「そうよね。お礼ぐらいはするもんよね」

「ねえ、藍華ちやくん。どうしたの？」

「あのさあ、私が驚いてるのって、なんかバカみたいじゃない？」

「そんなことないと思うけど」

「はあくああ。今回の私は脇役も脇役。というより、灯里の引き立て役ということね」

「それ、どういうこと？」

「そうでしょ？どう考えたって、そうとしか思えない・・・」

また電話が鳴った。

「はくい、灯里いく！電話でございます！」

「はい、ARIAカンパニー・・・アサカさん！」

「やっぱりね」

「はい。先日はどうも。はい。はい。はい。そうなんですか？それは良かったです。ええ。はい。はい。こちらこそよろしくお願います。アンナさんよろしくお伝えください！」

灯里は、三度目の満面の笑顔で藍華に向けた。

「決まったんでしょ？」

「えっ、なんでわかるの？」

「わかるわよ！誰だって！」

灯里は満足げな表情で、きらめく海に目を向けた。

「藍華ちゃん」

「なんでございますか？」

藍華はカウンターに肘をついて、両手にあごを乗せ、あきれたような顔で返事した。

「こんなことって、あるんだねえ」

「そうねえ」

「あのカップルさんに出会って、そしたら今度はアリスちゃんの出会
いから繋がってアンドレさん、そしてアサカさんにアンナさん」

「そうね。そんな偶然で珍しいわよねえ」

「そうだよ！滅多にあるものじゃないよ！」

「はい。ということ、いつものあれ」

「まるで、このアクアが、みんなの結婚を祝福して、お祝いのメッセー
ジを送ってくれてるみたいだね」

「はい！恥ずかしいセリフ、禁止っ！」

「ええー！」

第27話

サン・マルコ広場の目の前にある船着き場には、3艘のゴンドラが係留されていた。

他のゴンドラの姿はなく、その様子はまるで、その3艘のゴンドラのために用意されたような光景だった。

しかも、普段一般客用に係留されているものでなく、特別な装飾を施したプリマ・ウンディーネ専用のゴンドラだったため、誰もが目を引く光景になっていた。

そして、その船着き場の側には、三人のウンディーネが並んで立っている。

それぞれ、違う会社の制服を着ていた。

そのことが、一層周りの興味を惹き付ける理由となっていた。

「あのさあ、さつきからジロジロ見られてるような感じがするんだけど」

「藍華先輩？見られてるようなではなく、はっきりと注目を浴びています」

「でも、なんかドキドキするねえ」

「それにさつきから気になってんだけど。あそこの人だから、なに？」

「ほんとだねえ。なんだろう」

「あ、あれは、おそらく・・・」

「後輩ちゃん？なんか知ってるの？」

「多分なんです、プロポーズの儀式かと」

「何それ？そんなの、やることになってたの？」

「確か、そんなような・・・」

「灯里、聞いてた？」

「わたし、聞いてないよ」

その時、その人ばかりを掻き分けて、ひとりの少女が飛び出してきた。

「アリス様くっ！おはようございますくっ！」

「明らかに後輩ちゃんを呼んでるわよね。誰？」

「えっと、あの人はですね・・・」

「アラトリアさんでしょ？あの人」

「灯里、知ってる人？」

「ほら、アリスちゃんの大ファンだっという人」

「じゃあ、あの子がお嬢様でストーカーだっわけ？」

アラトリアは三人の前までやって来ると、息を弾ませ、そしてアリスの方に顔を向けた。

「アリス様、本日はお日柄もよく、好天に恵まれ、このような良き日を迎えることができ、本当に良かったですわ！」

「そうですね。それは何よりで」

「はい！」

「後輩ちゃん、なんかやる気なさそうなんだけど」

藍華が不思議そうにしている横で、アリスは、なぜかばつの悪そうな顔をしていた。

「それにしても、せっかくの結婚式なのに、あんなところで騒がれちゃ台無しよねえ」

「藍華様？」

「わ、わたし？」

「ええ、もちろんですわ。それに灯里様」

「ええ〜！私も何かあるの？」

「この度の合同結婚式に、わたくしも協力させていただける機会をいただいたこと、本当に感謝いたしておりますの」

「協力？」

「ええ、そうでございますわ」

「協力って、何？」

「プロポーズですわ！」

「ちよっと、後輩ちゃん？どういうこと？」

「ああ〜！だから賛成しなかったのにい〜！」

「アリス様？今さら何をおっしゃっておいで？」

「どういうことよ？」

「つまりですね、この船着き場付近をお借りして、プロポーズの儀式を行うということで」

「どうせなら、盛大に行いましょうとなった次第ですわ。藍華様？」

「誰がそんなことを？」

「もちろん、アリス様とわたくしの案でございます！」

「アリスちゃん、素敵なアイデアだねえ〜」

「灯里様！そう言っていただけだと思っておりました！」

「でも、もうひとりの発案者は、あまり乗り気ではないように見えるけども」

アリスは、その場で思いっきりため息をついた。

「アンドレさんの件は、これまでの経緯もありますし、絶対結婚式を実現しないと、と言ったんです。だからそれについては、私の方も協力するつもりだとは言いました」

「言ったのね？」

「確かに言いました！でもこんな派手な演出を頼んだわけではありません！第一、結婚式は、あのサン・ジョルジョ・マツジョーレ教会で行うわけですから」

「でもこれからここでプロポーズをするんでしょう？アリスちゃん！素敵なアイデアだと思うよ！」

「灯里さあ、あんたは本当に、そうやってマイペースで生きてくのね。わかってたことだけでも」

「なんか、へん？」

「三組の合同結婚式をサン・ジョルジョ・マツジョーレ教会で行うっていうだけでも、派手なことだと思うけど。こんな形で注目を集めてさあ、悪目立ちしちやってるってことないの？」

「その辺は大丈夫でございませぬの、藍華様？」

「なんで大丈夫なの？」

「そこはちゃんと、ネオ・ヴェネツィア行政区より許可をいただいておりますので」

「許可？そんなのが下りんの？」

「はい！」

「一般の人よねえ？今日結婚する人たちって」

「あのお、藍華先輩？時間がかかりそうなので、その辺はおいおい、ということまで」

「もういいわ。詳しいことは後で聞くから。それよりも、また人の数が増えてんじゃないの？」

「ほんとですわ！こんなことをしている場合ではありませんわ！」

アラトリアは勢いよく、走り去っていった。

「じゃあ、私たちはしばらくここで待ってるってこと？」

「まあ、そんな、感じで」

「はあくそうですか・・・ん？」

カメラを持ったひとりの男性が、海の方にカメラを向けていたかと思うと、そのカメラを藍華たち三人の方に向けてシャッターを切り出した。

バシヤツバシヤツバシヤツ

「ちよつと、その人？さつきからバシヤツバシヤツつて、何勝手に撮ってるの？」

「あつ、ウンディーネさん！お久し振りです！」

「あ、あんた！あのストーカー男！」

「あの時はお世話になりました！」

「お世話つて、いったいどういふ・・・」

そのタキシード姿の男は、藍華の前を通りすぎると、灯里の前で立ち止まり、感激した表情で灯里の両手を握った。

「はひっ！」

「ぬな？」

「おおー」

「何がへおおーなのよ、後輩ちゃん？」

「もしかして、灯里先輩もプロポーズだったんですか？」

「お世話になりましたっていうプロポーズが、いったいどこにあんの？」

「私がプロポーズの一番目なの？」

「ああ〜！わけがわからん！」

「専属カメラマン？」

「はい！今回の合同結婚式のカメラマンに任命していただきました
！」

「ちよつと待つて。そんなのさあ、任命するとかしないとか、そもそも
誰がそんな許可を出せるわけ？」

「そうですよ。そもそも結婚式を行うことが決まってるだけで、主催
者がいるとか、そんな話はないはずですよ」

「アラトリアさんという方ですけど」

その場の三人が、一瞬凍ったかのように動きが止まった。

「後輩ちゃん」

「アリスちゃん」

「し、知りませんよ！そんな、ふたりして見ないでください！」

アリスは必死の表情で否定した。

「大丈夫です！任せておいて下さい！バッチリいいのを撮りますよ
！」

藍華は横目でジロリと、その男を見た。

その前で、固く手を握る男の満面の笑顔を見ながら、灯里は苦笑し
ていた。

「あんた！いつまで手を握ってるの！」

第28話

デユカーレ宮殿から海岸近くまでが、多くの人で埋め尽くされていた。

だが、その中央には、周辺に人を排除して、丸く大きな空間ができていた。

そこには、純白のウエディングドレス姿の三人の花嫁たちが、少し距離をおいて立っていた。それぞれ胸に小さなブーケを持って。

その三人の前には、それぞれタキシード姿の花婿たちが膝まづいて、目の前にいる花嫁たちに手をさしのべていた。

花嫁たちがそれぞれの花婿の手に手を重ねると、花婿たちはその手に口づけをした。

その瞬間、周りからは盛大な拍手と歓声が沸き起こった。

その人だかりの輪の最前列にいた灯里、藍華、アリスたちは、拍手をしながら感激に浸っていた。

その少し離れたところには、目に涙を浮かべているアサカの姿もあった。

三組のカップルが腕を組んで歩き出すと、その人だかりが左右に別れ始めた。

その先を進んでいた灯里たちは、それぞれのゴンドラの前に立ち、その三組のカップルたちを待ち構えた。

サン・ジヨルジョ・マツジョーレ島を貸しきれないかと相談していたあのカップルは、藍華の前で立ち止まった。

何かとアリスと縁のあったアンドレと忙しいお相手は、アリスの前に。

そして、アンナとその相手の男性は、灯里の前で立ち止まった。

「アンナさん、とってもキレイです！」

「ありがとう、灯里さん」

三組のカップルは、それぞれに用意されたゴンドラに乗り込んだ。

そして、灯里、藍華、アリスは、それぞれ手にオールを持つと、確認し合うように視線を交わした。

「それでは、出発します」

灯里は、そう声をかけると前を向き、ゆつくりとオールをひとかきした。

海の上を滑るように、ゴンドラが動き出した。

灯里のゴンドラに続いて、藍華、アリスのゴンドラも動き始めた。

灯里のゴンドラを追うように、その両側に藍華とアリスのゴンドラが続いた。

それぞれのゴンドラに乗る三人の花嫁たちのベールが、風に吹かれ、長く尾を引いている。

サン・ジョルジュ・マツジョーレ教会へ進むゴンドラたちの姿は、ここにいる見るものすべてを魅了していた。

そして、岸から離れてゆくゴンドラたちを、みんな名残惜しそうに見送っていた。

「よかったですわね、アサカさん」

目に涙を浮かべ見送っているアサカのそばで、アラトリアもその光景を見送っていた。

「アラトリアは行かなくていいの？」

「わたくしは、ここで結構ですの。いくらわたくしでも、そこまでヤボではございませんの」

「そうなんだ」

「ええ。わたくしの役目はここまで。ここからはアリス様の舞台ですわ」

「花嫁たちではないのね」

「まあそうですね。そんなことより、アサカさんこそ、なぜここにいらっしゃるのですか？あなたこそ、あちらにいななければいけない人では？」

「うん、わかってる」

「じゃあ、早く」

「もう少しだけ見ていたいの」

「どうしてですか？アんなさんのことをですか？」

「それもああるけど」

アサカは離れてゆくゴンドラたちの姿を、眩しそうに、そして嬉しそうに眺めていた。

「この風景だったんだ、って思ったから」

「この風景？」

「そう。灯里さんの描いた風景」

「灯里様の？」

「ぜひ、それを見せてほしいって言ったの」

すると、少し離れたところから、アサカを呼ぶ声が聞こえた。

「アサカさん、呼んでますわ。あれ、教会のチャーターしたボートではありませんの？」

「うん。それじゃあ、アラトリア。行ってくる」

「お気をつけ下さいましっ！」

ボート乗り場へ急ぐアサカを見送りながら、アラトリアは、改めてサン・ジヨルジョ・マツジョーレ島へ向かうゴンドラたちに目を向けた。

「灯里様が描いた風景」

不思議そうにポツリと呟いたアラトリアは、そのままニツコリと微笑んだ。

「素晴らしい風景ですの」

すると、アラトリアの背後から声がかげられた。

「あのく、お嬢様？」

「こないない気分浸っているときに、誰ですの？」

そこには、アラトリアに抵抗できない、例のアムネジアが立っていた。

「あら、アムネジア。あなたも来ていたのですか？」

「だって、お嬢様？あれから、全く連絡が取れなくて困ってたんですよ」

「ああ、それは申し訳なかったですわ。かなりバタバタしてましたから」

「それですね、どうになりましたでしょうか？」

「どうなったって、あなた、見れば一目瞭然ですわ」

「ああ、それはご結婚おめでとうございます。そうじゃなくてですね？」

「他に何かありました？」

「お嬢様くく」

「なんなのですか？その変な声は」

「あのお二人に、こちらの話に乗っていただく代わりに、ナイトパーティーの代替案をご用意していただけると、おっしゃいましたよね？」

「ああ、その件」

「はい、その件です！」

「なくなりました」

「はあ？」

「アリス様が、わたくしの用意したドレスは絶対着ないとおっしゃったので、却下となりました」

「じゃあ、代替案は？」

「ですから、いま却下と」

「お嬢様くく」

「だからなんなんですよ、その声！」

「社内でも、今日のこの話題で持ちきりなんです。それに私が関わっていたなんてことが知れたら、もうオレンジぷらねっとには、いられなくなります！」

「そこは大丈夫じゃないかしら？」

「どうしてですか？」

「アムネジア？あなた、アリス様をなんだと思ってるのですか？あのアリス様ですよ！」

「それはどういう・・・」

「後でわかることですわ！」

「お嬢様くく」

第29話

サン・ジヨルジョ・マツジョーレ教会では、三組のカップルの親族が集まったこともあって、盛大な結婚式が執り行われた。

三組の新郎新婦を教会へ運んだウンディーネということで、灯里たちも式に参列していた。

そして三組同時に、指輪の交換と、誓いの口づけを交わしたところで、結婚式はその日一番の盛り上がりを迎えていた。

神父様はというと、終始満足げな表情で喜びをあらわにしていた。式を終えると、三組のカップルは大きな正面玄関の前に出てきた。

その場にいる大勢の関係者の前で、三人の花嫁のブーケが同時に大きく宙を舞った。

その瞬間、若い女性たちがそれにむらがって、教会前は大きな歓声がかたました。

そしてライスシャワーを浴びる中、三組のカップルは、もう一度ゴンドラに乗り込んだ。

三艘のゴンドラは、大きな祝福の声の中、再びネオ・ヴェネツィア本島へと舵を切った。

花嫁と花婿たちを乗せたゴンドラたちは、そこからしばらくの間、ネオ・ヴェネツィアをめぐる短い旅へと向かったのだった。

その頃には、今日の合同結婚式の情報が知れわたっていたようで、ゴンドラの姿が見えると、あちらこちらで歓声が沸き起こり、祝福の言葉が投げ掛けられた。

今日一日だけは、間違いなくこの三組の花嫁花婿たちが、ネオ・ヴェネツィアの主役だといえた。

藍華とアリスは、報告もかねて、それぞれの会社へと戻った。

灯里は、夕日が沈みかけた海を、ARIAカンパニーのデッキの手すりにもたれ、ぼんやり眺めていた。

「ぷいっゅいっ」

足元では、アリア社長と一緒に夕日を眺めていた。

「アリア社長？お留守番、お疲れ様でした」

「ぶいにゆい？」

「わたしですか？そうですねえ。ちょっと疲れたかもです」

灯里はアリア社長に、そう返事をする、また海に視線を移した。「でも、よかった。あんな経験、これからもあるかどうか、わからないですから」

確かに少し疲れてはいたが、灯里の表情は満足げだった。

ひとりのプリマ・ウンディーネとして、ひとつやり遂げた達成感を味わっていた。

今日という日が終わろうとしてる、そんな薄暗くなり始めた海を、灯里はいつまでも眺め続け、その場を動こうとしなかった。

「灯里ちゃん？」

その声に驚いて振り返った灯里は、デツキの角のところに立っているアリスアに、大きく目を見開いた。

「アリスアさん！どうしたんですか？」

「ごめんなさいね、灯里ちゃん。お疲れのところ、お邪魔しちゃって」
優しく微笑むアリスアは、そう言っただけで灯里の横に並んだ。

「今日は本当にお疲れ様。大変だったでしょ？」

「はい。あんな経験はじめてだったので」

「それはそうね。私だってこんなこと、経験したことないわ」

「そうですね」

「ある意味、A R I Aカンパニーにとっても、これまでに経験したことのない一日だった。そういえるんじゃないかしら」

「A R I Aカンパニーにとってですか？」

「そう。それを灯里ちゃんがもたらした。このA R I Aカンパニーにね」

「わたしが・・・」

「そういうこと」

アリスアは灯里の横で、嬉しそうに遠くの海を見つめた。

灯里はそのアリスアの横顔を、不思議そうに眺めていた。

「灯里ちゃん？」

「はい」

「もうひとつ、灯里ちゃんに伝えたい話があるの」

「なんででしょうか？」

「アサカさんのこと」

「アリシアさん？やっぱりアサカさんをご存知だったんですか？」

「昔、灯里ちゃんがシングルの時に、ゴンドラに乗ったことがあるって
言っただらしたわね」

「はい、そうなんです！」

「でも本当は、それよりもっと前に会っていた。アンナさんが小さい
頃にね」

「なんでそんなことまで知ってるんですか？」

灯里は大きく目を見開いた。

「実は先日お会いしたの。そのときにいろいろ聞かせていただいたと
いうわけ」

「そうだったんですか」

灯里は納得したように、息を吐き出した。

「はへえ〜」

「あの、灯里ちゃん？」

「なんですか、アリシアさん？」

「わたし、実はメガネを忘れてきて・・・」

「そうだったんですか」

「うん、だからね？」

「はい？」

「そろそろ、灯り、点けない？」

「はひっ！す、すみません！」

「ありがとう」

灯里はアリシアの前に置いたカップに紅茶を注いだ。

そして、アリシアのテーブルの向かい側に座った。

「そんなに時間はとらせないから。明日もお仕事あるんでしょ？」

「はい。予約のお客様が来られる予定です」

「そうなの」

アリシアはカップの紅茶に口をつけると、そのカップをそつと戻した。

「アサカさんがね、灯里ちゃんに、何か特別なものを感じていたとおっしゃって」

「私にですか?」

「ええ。アンナさんの結婚が決まったとき、もしかしたら、灯里ちゃんとの出会いは、この日のためにあったんじゃないかって」

「そんなこと、おっしゃってたんですか?」

「そうなの」

「でもそれって、どういうことなんでしょうか?」

「それについては、アサカさん、はつきりとは話さなかったのだけど」

「はあ」

「おそらく、なんだけど」

アリシアは頬杖をついて、灯里の顔を見つめた。

「若き日の自分と灯里ちゃんを、重ねていたんじゃないかって」

「わたしと?」

「そんな感じがしたの。アサカさん、以前、仕事に行き詰まったことがあったって。そんな時に限って、離れていたこのネオ・ヴェネツィアに、訪れる機会が巡って来るんだって」

灯里は神妙な表情で聞いていた。

「振り返ってみたら、どこかで私や灯里ちゃんに出会っていた。だから、このARRIAカンパニーに、そして灯里ちゃんに、何か特別な縁を感じていたのかもしれない」

「アリシアさん」

「なに?」

「そんなふうに思っていただけなんって、ほんとにうれしいです!」

「そうね」

「この仕事を選んで、本当によかったって思います!」

「あらあら」

アリシアは灯里の表情を見て、うれしそうにほほえんだ。

「そうだ。灯里ちゃん？あのジャム、今年も送られてきたかしら？」

「はい。アリシアさんが一番のお気に入りなのやっですよね？」

「なんか、あつかましいわよね」

「そんなことありませんよ。いつでも来てください！」

席を立とうとした灯里に、アリシアは自分で取りに行くと言って、キッチンへと向かった。

「今日は灯里ちゃん、疲れたでしょうから……」

ジャムの瓶をひとつ、手に持って戻ってきたときには、灯里はすでに眠り込んでいた。

「灯里ちゃん、風邪を引くから……」

灯里は、アリシアの声にはまったく反応せずに、スヤスヤと眠っていた。

アリシアは、二階からブランケットを持って降りてくると、灯里の背中にそっとかけた。

そして、元の椅子に腰かけると、また頬杖をつき、灯里の寝顔をそっと眺め続けた。

第30話

ネオ・ヴェネツィアには、少しの間だが、結婚ブームが到来していた。

サン・ジオルジョ・マツジョーレ教会でおこなわれた合同結婚式のニュースは、かなりの話題となり、結婚式をネオ・ヴェネツィアで、そしてサン・ジオルジョ・マツジョーレ教会で行いたいという問い合わせが、ツアー会社や水先案内店に相次いだ。

そのためか、各水先案内店は、例年以上の忙しさに追われていた。そして、アサカの意向もあつて、ARIAカンパニーにはこれまでにないほどの仕事が増え込んでいた。

「アサカさくん！もう、ご祝儀は結構ですう〜」

急激に仕事が増えたことで、灯里は連日、朝から日が沈むまで忙しさに追われていた。

そんなある日、お客様を送り出した灯里は、店内に戻ると、テーブルの椅子に腰掛け、大きなため息をついた。

「今更だけど、アリシアさんて、こんなことをよく続けてたよねえ」
思わずひとり呟いたところに、アリア社長がそばまでやって来た。

「ぶいにゆい」

「ホントにそうだよねえ。どうしたら、あんなふうに毎日をすごせるのか。わたし、ちよつと自信なくしそうです」

アリア社長の優しさに癒されて、灯里は思わず笑顔になっていた。

「あの〜、いらつしやいますか?」

「はひっ!」

アリア社長と顔を見合わせていた灯里は、驚いて顔を上げた。

カウンターの外には、中を覗き込むようにして、藍華が言うところの、あのストーカー男が立っていた。

「ウンディーネさん、先日はどうも!」

「どうしたんですか?」

「一度、ちゃんとお礼方々、挨拶しておかなくちゃって思ってたんですよ!」

「そんなぐ丁寧に、挨拶だなんて」

「それに、ウンディーネさんの顔も見たかったしネ！」

そう言つて灯里にウィンクしてみせた。

「はあくそれはくどうもですうく」

「ハハハハ」

灯里がどうリアクションしていいか戸惑っている姿をみて、男はうれしそうに笑つた。

「それと、一応これをを渡しておこうと思つて」

男は一枚の名刺を灯里に手渡した。

「アマント、さん？」

「はい。よかつたら、覚えておいてください。また来ますから」

「はい、わかりました。でも、ということは・・・」

「今日、ネオ・ヴェネツィアを離れます」

「そうだったんですか」

「ひとつの街にここまで長くいたのは、このネオ・ヴェネツィアが初めてです。だから少し離れがたい気持ちではありますが」

「これからどこへ行かれるのですか？」

「まだ、何も決めてません。ただ、アクアのどこかだけは確かです」

そのアマントと名乗る男は、海の方を振り返つて、眩しさに目を細めながらそう言つた。

「ありがとう、ウンディーネさん。あなたに会えて本当に良かったです」

アマントは、灯里に優しい眼差しを向けた。

その瞳には、離れがたい気持ちと旅立ちの決意のようなものが溢れていた。

「それじゃあ、また」

「はい。アマントさん、いつでもお待ちしております！」

アマントは、その灯里の言葉に何か答えようとしたが、ニツコリと笑顔だけを残して立ち去つた。

その後、水先案内業界にひとつのトピックスが流れた。

新進気鋭の写真家が、ネオ・ヴェネツィアで働くウンディーネたちに焦点をあてた作品を発表した。

この作品が発表されるやいなや、アクアのみならず、マンホームでも大きな話題となっていた。

「つまり、あのストーカー男がそうだっていうの?」

「藍華ちゃん、アマントさんだよ」

藍華は、記事となった新聞を見ながら、少々納得がいかないといった表情になっていた。

「人ってわからないものねえ」

「そうだねえ」

「それでニニ? 灯里には、そういうのを送ってきたってわけ?」

灯里の手元には、一通の封筒が届いていた。

中には、笑顔いっぱい灯里の写真が一枚入っていた。

そして、その裏にはこう綴られていた。

「ネオ・ヴェネツィアで見つけた宝物 それはあなたの笑顔」

灯里はそのことばを声に出して読んでみた。

「あんたさあ、よくもまあ、声に出して読めるわよね」

藍華は呆れた顔で灯里を見た。

「だって、そう書いてあるもん」

「そう書いてるからって」

灯里は、その写真を見ながら、うれしそうにほほえんだ。

「でもさあ、そんな人だったのなら、誰か知らなかったの?」

「なんかねえ、アリスちゃんが言ってたんだけど、アラトリアさんは知ってたんじゃないかって」

「あの小生意気なお嬢様が?」

「うん。もしかしたら、作品として発表するのも、アラトリアさんが勧めたかもって言った」

「だから、あの合同結婚式するとき、専属カメラマンとかに任命されたって言ってたわけなの?」

藍華は腕を組んで、眉間にシワを寄せていた

「あのお嬢様は、いったいなんなの?」

「それで、結局のところ、どうするおつもりなんですか?」

アリスは、とにかく困り果てた顔のアムネジアにたずねた。

「それが、あのく、私もあまり詳しいことまでは知らされておりませんので」

「そうなんですか。そういうことなんですね」

「ア、アリス様く」

「へんな声、出さないでください!」

「申し訳ございません」

アムネジアは消え入りそうな声になっていた。

「とにかく、もうウンディーネは諦めた、ということでもいいんですね?」

「諦めたと言っているのかわかりませんが、先ほどもお答えしました通りですね、ブライダルの方にご興味を抱かれたというわけで」

「ブライダル」

アリスは、周りの人が思わず振り返るほどのため息をついた。

「はあくく」

オレンジぶらねつとの廊下の隅で、二人は話していた。

その様子は、誰が見ても、明らかに怪しく思える組合せと言えた。

特にアムネジアは、辺りをキョロキョロ見回していて、どう見ても不審者にしか見えない状況だった。

「あのく、それで、アリス様?」

「なんですか?」

「私は今後どのようになればよろしいのでしょうか?」

「どうもこうも、アラトリアさんが面倒を見るんじゃないんですか?」

「アリス様くく」

「ちよつと、その声!変に思われるので、やめてください!」

「私は、これまでも、そして、これからも、オレンジぶらねつとの社員として」

「好きにすればいいじゃないですか?私にどうこうできる権限なんて、そもそもありませんから」

「アリス様くく!一生ついて行きますうくく!」

「その声!」

第31話

ネオ・ヴェネツィアは、いつもの風景を取り戻していた。

ウンディーネたちの姿は、これまでと変わることなく、この街に華やいだ雰囲気をもたらしていた。

そして、ARIAカンパニーの水無灯里も、これまでと変わらない姿でいた。

ただ、明らかにこれまでと違うのは、忙しい日々を追われていることだった。

それ故に、灯里、藍華、アリスの三人は、これまで以上に会う機会を失っていた。

でもそれは当然といえることで、三人それぞれ、これまで以上にその役割が増している証拠でもあった。

そう。これまでとは違う。
プリマとしての日々は、また新たな一歩を踏み出すことでもあった。

藍華は、今日も自ら営業へ出る予定でいた。

そんな藍華が、ゴンドラで朝早くARIAカンパニーの前にいた。

「おはよー！灯里いー！」

「藍華ちゃん？どうしたのー！」

灯里は驚いた様子で、カウンターから身を乗り出していた。

「調子はどうなのー？」

「バツチリ大丈夫だよ！」

「最近さあ、全然顔見れてなかったから、ちよつと心配だったんだけど。その調子だと、大丈夫そうね」

「ありがとう、藍華ちゃん！」

「じゃあ行ってくるね！」

「行つてらっしゃーい！気を付けてねえー」

だが藍華は、その場で振り返った。

「あのさあ・・・」

「なに？どうかした？」

「うん・・・」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

灯里は、藍華の少しためらった表情に戸惑いを感じていた。

「あのさあ、灯里？」

「なに？」

「今度時間作れない？」

「時間？うーん。今すぐには答えられないけど」

「そうだよね」

「でも、藍華ちゃんが言うなら」

「そう？それじゃあ考えといて！」

「うん、わかった！」

お昼過ぎ、ARIAカンパニーの前には、アリスの姿があった。

「せんぱーい！灯里せんぱーい！」

「アリスちゃん、どうしたの？」

「やっぱりいましたね。この時間ならいると思ってました」

灯里は、カウンターに両手をつけて、身を乗り出していた。

「何かあったの？」

「いいえ、特にはありません」

「そうなの？」

「ただ、最近先輩の顔を見てないなあって思いました」

「アリスちゃん」

アリスは灯里に向かって、ニツコリと微笑んでみせた。

「そういえば、今朝なんだけど、藍華ちゃんも来たんだよ」

「藍華先輩もですか？」

「うん」

「以心伝心ですね」

「なに？」

「それでは、お仕事の続きがありますので」

「はあ」

アリスは、何か納得したような顔で、そのまま帰って行った。

「なんなんだろう・・・」

その日の夕方、灯里はARIAカンパニーで部屋の掃除を終え、いつものようにシャツターを下ろそうとしていた。

その時、その側の電話が鳴った。

「はい、ARIAカンパニー・・・藍華ちゃん！」

「灯里、生きてた？」

「うん、生きてた」

「そう。それは良かった」

「なに？」

「今朝話したこと、覚えてる？」

「時間作れるかって話でしょ？」

「そうそう」

「少し先なら大丈夫だと思うけど」

「そうなんだ」

「なに？なんかあるの？」

「あるっちゃー、あるけども」

「なに、それ」

灯里は藍華の反応にクスツと笑った。

「実はね、ちよつと息抜きにどっか出かけようかなって思ってね」

「ええ、そうなのお？？なんで？」

「何なんでって」

「だって藍華ちゃん、忙しいでしょ？」

「だからよ。このままだと、ますます三人で出掛けるなんて、できそうにないじゃない？」

「えっ、三人？てことは、アリスちゃんも？」

「当然でしょ？」

「そうなんだあ」

「今がいいチャンスなんじゃないかって思ったわけ」

「いいチャンス？」

「というか、今しかないかもって思ったんだけどね」

「今しか・・・」

灯里は少し戸惑いの表情になっていた。

「三人でゆつくり会うための、ね！」

「そうだね。それでどこに行くの？」

「それはまだ決めてない」

「なんだ。そうなんだ」

「灯里、どこか行きたいとこ、ある？」

「うくん。そうだねえ」

「どこ？」

「うくん。どこがいいかなあ」

「まだ時間あるからさあ、考えといてよ」

「うん、わかった。あつ、でも」

「なに？なんかあるの？」

「具体的にあるわけじゃないけど、私たち三人の思い出がある場所ってどうかなあ」

「三人の思い出の場所かあー」

「アリスちゃんは言うてるの？」

「まだ聞いてないけど」

「そうなんだ。お昼に来たんだよ、アリスちゃん」

「そうなの？」

「藍華ちゃんのこと話したら、なんか以心伝心なんて言ってたけど」
「へえ。そんなこと言ってたの、あの子」

第32話

「晃さーん!」

「おお、灯里じゃないか!」

サン・マルコ広場近くの船着き場で、お客様を見送っていた灯里は、後輩たちに指導している晃に遭遇した。

「元気か? 最近、特に忙しそうだってな!」

「はい、お陰さまで」

「そうか。それはいいことだ」

「後輩の皆さんのご指導ですか?」

「まあ、そんなところだ。でも今日はこれで終了だ」

「そうですか」

「なに? どうした? なんかあったか?」

「うくん。あるような、ないような・・・」

「なんだ、それ」

「あつ、いえ、エヘヘ」

灯里は少し困惑したような顔をしていた。

晃はその灯里の表情を見て、ここう声をかけた。

「このあと、まだ仕事か?」

「いえ、今日の予定はこれで終わりなんですけど」

「そうか。じゃあちよつと、付き合ってくれないか?」

「私とですか?」

「そうだ」

陽が傾き始めた船着き場で、晃はニツコリと笑顔で応えた。

晃と灯里は、どこかという目的があるわけでもなく、サン・マルコ広場周辺の小路を歩いていた。

夕暮れのせいか、なんとなく、すれ違う人たちが足早に通りすぎてゆくように感じる。

「あの一、晃さん?」

「なんだ?」

「いったいどちらへ行かれるのですか?」

「特に、目的地はない」

「ええー？どうということなんですか？」

「たまには、こんなふうにはブラっとしてみるのも、いいんじゃないか？」

「そうですねえ・・・」

「嫌か？」

「あつ、いえ、そんな、嫌なことなんて、ありません」

「それなら、いいな？」

「はい・・・」

「ハハハハ」

「晃さん」

「すまんすまん。そんなに時間を取らせるつもりはないから。安心してくれ」

「最近、藍華たちと会ってるか？」

「いえ、それが最近はみんな忙しくて」

「そうだろうな」

晃は少し笑みをたたえながら、前を向いたまま歩き続けた。

「私たちもそうだった。アロシアとアテナ、そして私。いつも三人揃ってバカ言い合って、よくつるんでたけど、ある時期から会わなくなった。いや、会えなくなった。の方が正解だな」

「はあ」

「忙しいということとは、それだけより期待されるようになったということだ。それは、プリマとして誇らしいことだ。そう思わないか？」

「そう、思います」

「それにだ」

晃は立ち止まった。

「それに、以前と同じようにしてるつもりでも、どこか違うってことも感じていた」

「お三人が、ということですか？」

「そうだ。それぞれに、そう感じていたと思う。でも、それは悲しいことじゃないんだ。そうやって、それぞれの道を歩きだしたってこと

だ

そう言つて、晃は再び歩き出した。

「灯里？」

「はい」

「まだ、決心がつかないんだつて？」

「ああ、はい、そうなんですが・・・」

「藍華が時々そう言つてるんだ」

「藍華ちゃん」

「無理することはないと思う。だが、いつかはやってくることではあると思う」

「はい。それは理解しているつもりです」

「そうか。それならそれでいい」

二人はいつしかサン・マルコ広場に戻つていた。

夕陽に染まる広場には、燃えるように大鐘楼がその姿を見せていた。

晃はその大鐘楼を、眩しそうに見上げた。

そして、両手を腰に置いて、懐かしそうに笑みを浮かべた。

「今の時間は今しかない。今思っていることは、今の自分だからな」

「それって・・・」

灯里は、眩くように言つた晃の言葉の真意を、必死に汲み取ろうと
していた。

「先日、藍華が休暇をくれないかつて頼んできた」

「藍華ちゃんが？」

「そうだ。支店はどうするんだつて聞いたら、なんとかするつて言つ
ていた。それなら自分で決めればいいつて話したんだ」

「そんなことを」

灯里は、晃の言葉を聞いて、ハッと何かに気付いた。

「藍華ちゃん、気晴らしにどこかに行こうつて誘つてきたんです」

「そうか。藍華、そんなこと言つてたんだ。あいつらしいな」

「でも本当はわざわざ時間を作つて・・・」

灯里は目を潤ませていた。

そして、その目元が夕陽に輝いていた。

「はあー」

だが、その横で晃が大きなため息をついた。

「晃さん？」

「あのなあ。どうしてお前たちは、そうやって手間がかかるんだ？」

「お前たち？」

「そうだ！アリシアも！そして、灯里！お前もだ！」

「はひっ！」

晃は、もう一度夕陽に染まる大鐘楼を見上げ、ゆっくりと息を吐いた。

そして、灯里の方に向くと、こう言った。

「どこへ行くのか知らないが、思う存分楽しんで来い！」

「はい！」

灯里は、その笑顔の先輩に、嬉しさと頼もしさと、ちよっぴりの恥ずかしさを感じていた。

第33話

「後輩ちゃん、決まった?」

「いえ、なんにも決まってるません」

「じゃあ、どうすんの?」

「そんなの、私に聞かれても困ります」

「はあ」

藍華とアリスは、ふたりそれぞれのゴンドラの上に立っていた。

ゴンドラを止め、距離を縮めると、改めて話し始めた。

「だって藍華先輩?私、言いましたよね?」

「なんか言った?」

「ちゃんと言いました!」

「わかってるわよ!そんなに言わなくても!」

「じゃあ、なんでこんなことになったんですか?」

「それはなんというか・・・」

藍華は腰に手を当て、アリスはだらりと手を下げて、ふたりして途方に暮れていた。

ふたりはARRIAカンパニーまでゴンドラで行き、そこで合流するつもりだった。

だが、前日までに、息抜きのための小旅行の行き先を考えるつもりでいたが、忙しさもあって、結局当日の朝を迎えてしまったというわけだった。

「それに、これは灯里先輩を元気付けるためでもあるから、サプライズにしようって、藍華先輩が急にハードルを上げたんですからね。私はあくまでも、行けるところで考えましょうって言ったんですから」

「わかってるわよ!そう何度も言わなくてもいいでしょ!」

「ちよつと、藍華先輩!朝から声が大きいですよ!」

藍華は思わず手で口をふさいでいた。

岸では屋台の準備を始めているおじさんが、不思議そうな顔で藍華たちの様子を見ていた。

「それで、どうするの?」

灯里は、カウンターのの中からデッキに立っている藍華とアリスを、キョトンと眺めていた。

ふたりは気まずそうに、灯里には目を合わせないようにしていた。

「うん、そうねえ」

「そうですねえ」

「なに？ふたりしてヘンな感じなんだけど」

「あのね、とりえず、その辺をブラツとしながらさあ・・・」

「考えようかなんてですね・・・」

「はあ」

「あははは」

「はははは。今日はいい天気だよね」

「つまり、なに？」

観念したように、藍華が大きなため息をついた。

「ごめん、灯里。実は話してた小旅行の件なんだけど、まだなんにも決まってるないの」

「なんだ。そんなこと気にしてたの？そんなの別にどこでもいいのに」

「どこでもは良くないよ。だって、灯里を誘ったのは私の方だし」

「そんなに気をつかわないで。ほんとにどこでもいいんだから」

「でも灯里先輩は、三人の思い出の場所がいいって言ってたとか」

「そうだねえ。でも三人でこれから行くんでしょ？そしたら、それが思い出の場所になるんじゃない？」

「先輩、なんかいい感じですよ」

「恥ずかしいセリフ・・・」

「藍華先輩？途中で止まっていますけど」

「もういいの！」

三人は、ARRIAカンパニーにある予備の黒いゴンドラに乗り込んだ。

「このゴンドラに乗るのも久し振りですね」

「そうだねえー」

「ぷいにゆい！」

アリア社長が灯里の膝の上で笑顔いっぱいになっていた。

「いつものプリマ用のゴンドラだと目立つからね」

「藍華先輩、いいアイデアです」

「そう?」

藍華はオールを手にすると、グイッと一掻きした。

隣あつて座つていた灯里とアリスは、その勢いで背もたれに軽く押し付けられていた。

床に降りていたアリア社長は、そのままスライドしていた。

「ぷくいかにゆきい」

そして、順調に進み出したゴンドラは、岸を横目にゆつくりと進んでゆく。

「こんなにもゆつたりした気分でいられるのって、どれくらいぶりかしらね」

「そうだねえ」

「やはり、みんながプリマになる前くらいでしょうか?」

「確かにそれくらいかもね」

「そうだねえ」

「鼻の長い動物は?」

「そうだねえ」

「象でしょ!」

「そうだねえ」

「牛の鳴き声は?」

「もうだねえ」

「ちゃんと答えています」

「じゃあ、オールをさばくことは?」

「そうだ、ねえ」

「もうやめよう」

「そうですね」

「そうだねえ」

ゴンドラは、少し狭くなった運河へと入っていった。

「あんまり賑やかなところじゃなくて、のんびりできるところの方が

「いいと思うんだけど」

「私もそれでいいと思う」

「私も灯里先輩に同感です」

「じゃあ少しこのまま行ってみるわね」

するとゴンドラは、より一層狭いところへと入っていった。

「あれ？珍しい取り合わせだねえ」

三人がよく通っていたパン屋のマスターが岸を歩いてきた。

「お久し振りです！」

「今日はなんなの？休み？」

「はい！気ままな小旅行なんです」

「それはいいねえ。うらやましいよ。そういえば灯里ちゃん？こない

だの試作品の味、どうだった？」

「はい！とつてもおいしかったです！」

「それは良かった！」

「えっ、ちよつと待って！なんで灯里だけ？そんなのズルいく！」

「先輩だけ抜け駆けなんて、許せません！」

「だってえくたまたまだったんだもくん」

「ハハハハ。それなら、みんなでもた来ればいいんじゃないの？」

「それができれば苦労しないんですけどねえ」

「ほんとです」

「そんなに忙しいの？」

「そうですねえ。お陰様で」

「さすが、ネオ三大妖精の異名は伊達じゃないんだ」

「な、なんですか、それは？」

「本人さんたちが知らないの？あの水の三大妖精の教え子たちだって

噂になってるよ」

「灯里、知ってた？」

「知らないよ」

「後輩ちゃんは？」

「私も知りませんでした」

三人はお互いの顔を見ながら、啞然としていた。

「ところで、その小旅行の目的地はどこなの？」

「特に決めてはいないですけど」

「そうなんだ。なんか三人の姿を見ると、宝探しでもやってるのか
と思った」

「宝探し・・・」

三人同時にその言葉に反応していた。そしてお互い顔を見合わせ
た。

「それだ！」

「それです！」

「それだね！」

「ぶいぶい！」

パン屋のマスターは、キョトンと目を丸くしていた。

第34話

「確かこの辺でしたよね」

オールを手にしていたアリスは、その先を確かめるように狭い運河を進んでいた。

「後輩ちゃんがわかるっていうから、当てにしてんだからね」

藍華は怪訝な表情で運河の先を見ていた。

「あつ、あれじゃない？」

灯里が指差した先には、運河に面した建物の壁の中に MARIA 像が立っていた。

「確か、あの足元に・・・」

藍華は、ゴンドラがその MARIA 像に近づくと、足元の台座のところを覗き込んだ。

「どうですか？」

「これを開けたのよね」

藍華は、その台座の横にある小さな扉を開けた。

「あつた」

「あつたの？」

「やりましたね」

そこから小さな宝箱のような木箱を取り出した藍華は、ふうーとほこりを軽く吹き飛ばした。

「ゲホゲホ」

「藍華ちゃん、大丈夫？」

「ダイジョウブ」

「鼻つまんでる」

「それはいいから」

アリスは心配そうに後ろから覗き込んだ。

「中はどうですか？」

藍華が箱を開けると、中には紙切れが一枚入っていた。

「まだあつた！」

「ほんとだあー」

「でっかい驚きです」

その紙を広げると、こう書かれていた。

〈この地図を手に入れし者よ。我の言葉に従いて、汝が宝を手に入れよ〉

藍華がそれを読み上げた。

「そんな文章だった？」

灯里はその言葉を聞いて、不思議そうな顔をしていた。

「次の場所を知らせるキーワードみたいなのがありませんか？」

アリスが問いかけた。

〈長靴カッレで高らかに 元気に足踏みひと休み〉

「そんな感じだっけ？」

「そうですね」

藍華の読み上げた言葉に、アリスは、フンと自慢げに鼻から息を吐いた。

三人はゴンドラを下りると、建物が並ぶ小路を進んだ。

「ねえ、ほんとに大丈夫なの？」

藍華は心配そうにアリスにたずねた。

「一度行ったことがあるわけですから、だいたいはわかると思います」

マリア像の前で地図の内容を確認した三人は、地図を宝箱の中に入れて、元の扉の中に戻っていた。

「アリスちゃんて、散歩の達人さんだもんね」

「そうでございますか！」

「そんなことを言っていた時期もあったような……ありました」

長靴を模した看板が店先にあった。

「ということは」

「灯里い？あんたの出番よ」

「えっ？」

「先輩！そこですー！」

「ああ〜そういうことね」

クルツポ クルツポ クルツポ

灯里は、建物の壁の穴の中にいる鳩に話しかけながら、ゆつくりと近づいて行つた。

「そこだけは真似できないわ。まあ、真似したいと思つてる訳じゃないけど」

藍華は呆れ顔でその様子を眺めていた。

「あつた！」

「でっかいすごいです」

「箱は小さいけどね」

灯里は、鳩のそばにある箱をそつと取り出した。

〈小さなカンポで待っている　小さな窓辺の魔法のランプ〉

「魔法のランプ？」

「ああ、わかりました」

「後輩ちゃん、そんなんでわかるの？」

三人は、またもや宝箱を元に戻し、その次の場所へと向かった。

狭い小路を抜けると、小さい広場に出た。

中央には噴水があり、その周辺では、大道芸人がパフォーマンスを披露していた。

「ほらあー！藍華ちゃん！見て見て！」

「ぶいにゅーい！」

「ちよつと、あんたたち！宝探しはどうすんの？」

そんなふたりと一匹を横目に、アリスは淡々と周辺を見渡していた。

「まるでデジャビユ、ですね」

やかんを型どつた看板の金物屋。

アリスは、その場にすつとしゃがみこむと、床下をのぞき込んだ。

「ありました」

戻つてきた灯里と藍華は、アリスの持っている箱に気がついた。

「なんだ。もう見つけたの？」

「アリスちゃん、すごいねえー」

「ばいちゃ！」

〈カフェの香りに影追えば　光り眩しい石一つ〉

「ああ、これね。さすがにこれは、わたしでもわかるわ」

「そうだねえー。三人であそこに行くのも久し振りだよねえー」

「先輩方、このへんで少し休憩にしませんか？」

サン・マルコ広場は、今日も観光客で賑わっていた。

テーブルに陣取った三人と一匹は、当然のようにカフェ・ラテを注文した。

アリア社長にはホットミルクを。

「ぷいぷいぷいー！」

「やつぱりここで飲むカフェ・ラテは最高ねー」

「ホントだねえー」

「ほっとします」

灯里がひとりクスクス笑っていた。

「何がおかしいのですか、灯里先輩？」

「だって・・・」

「ああ、はいはい」

「なんなんですか、藍華先輩？」

「灯里本人に聞いて」

「だってアリスちゃん、ホット頼んでほっとするって」

それを聞いたアリスは顔を真っ赤にしていた。

「なっ、何を言ってるんですか？私はそんなダジャレなんか言った覚えありません！」

「別にいいんじゃないの？たまには、そんなオジサン臭いのも」

藍華はそう言って、ニヤリとアリスの方を見た。

「違います！偶然ですから！」

「いいからいいから」

「もうー！」

アリスは、納得いかないといった表情で、ほっぺを膨らませていた。「賑やかでよろしいですな」

大柄の紳士が、テーブルのそばに来て、声をかけた。

「店長さん！」

カフェ・フローリアンの店長が、ハットの縁を持って、軽く会釈し

た。

「みなさんが一同に揃うとは、最近では珍しいことですね」

「そうなんです。みんな忙しくて、最近は全然来れてなかったです」

「お忙しいとはよろしいですね。お噂はかねがね聞かせていただいておりますよ」

「お噂？」

「水のネオ三大妖精とは、お三人さんのことですね。ご来店頂いて誠に光栄です」

「またそれ？」

「ぶいにゆーい！」

「アリア社長はそこには入ってないんですけど」

「ぶいにゆー？」

「本日はお休みですか？」

「はい、そうなんです。ちよつと、気晴らしの小旅行に行こうってなつて」

「なるほど。それはよろしいですね。忙しいのはいいことですが、そればかりでは息がつまります」

「そうですね」

灯里は店長にっこりとほほえんで返した。

「で、どこへ行かれるのですか？」

「ああ、それはですね、なんて言ったらいいか・・・」

「まあ、この辺をブラっとしようかなんてことになりました」

いわずらそうにしている灯里の横で、藍華はあっさりと答えた。

「ぶらつと、ですか」

「その実、宝探しなんですけど」

アリスが付け足した。

「宝探しと」

店長は何かを思い出したような表情になった。

「確か以前にもそのようなことをおっしゃってましたね？」

「はい、店長さん！覚えていてくれたんですか？」

灯里は嬉しそうに笑顔満面だった。

「覚えています。最後には、幸せそうな笑顔で帰ってこられた。だからわたくしが、幸せの達人と申し上げました」

「はい！サン・マルコ広場の達人さんからです！」

「そうでしたな」

灯里と店長は、嬉しそうに笑いあっていた。

すると、周りの様子があわただしくなり始めた。

「うわっと」

「あれ〜」

「ばばあーい！」

「影追い、ですね」

灯里たちはそれぞれの椅子を持ち、店長はテーブルを抱えて、従業員や他の客たちと一緒に、大鐘楼の影を追った。

再びテーブルについたところで、アリスが何かに気づいたようだった。

「先輩方、あれを見てくださいー！」

「何、後輩ちゃん？」

石畳の中のひとつの石だけが、キラキラ輝いていた。

「またもや、デジャビュ」

「でじゃびゆ？」

「ぷいにゆ？」

三人は、その輝く石の蓋を持ち上げた。

「ちやんと」

「あります」

「はへえ〜」

〈殺人カツレに潜むのは、ピカピカ目玉の真つくろ黒猫〉

三人は文面を確認すると、またまた箱を戻そうとした。

「あつ、ちよつと待ってー！」

そのとき、藍華がそれを止めた。

「どうしたの、藍華ちゃん！」

「ほら、底のところ、よく見て」

箱をもう一度持ち上げ、よく目を凝らして、三人は中を覗き込ん

だ。

「箱を置いた跡が、明らかに増えています」

「そうよ。あれからまだ、この宝探しは続いていたということよ!」

「はひいー」

箱の底の跡形が、いくつもいくつも残っていた。

消えかけのものや新しいもの。

アリスのいう通り、その数は、以前見たときよりも明らかに増えているように見えた。

「宝探しがまだ続いてたなんて、なんて素敵なことなんだろう。それはまるで、この

ネオ・ヴェネツィアがこっそりと素敵な贈り物を、ちゃんと用意して待っていてくれたみたいだねえ」

「恥ずかしいセリフ禁止ー!」

「はひい!」

「こっそりなの? ちゃんとなの? どっちなの?」

「エへへへ」

カフェ・フロリアンの店長に別れを告げると、その殺人カツレを指した。

灯里たちは、なんとなく身を寄せあいながら、そのカツレを進んだ。

「やっぱりいつ来ても、なんか不気味よね」

周りをキョロキョロしながら進むと、あっけなく到着した。

黒猫の置物の足元に、当たり前のように宝箱が置いてある。

「あるねえ」

「そうだねえー」

「ありますね」

そこからは次の箱また次の箱と、箱の中の地図の指し示す通りに進んで行った。

だが、途中からその先がどこに繋がっているかを、三人は思い出し
ていた。

それでも、そのまま順番に進んで行った。

いつの間にか三人は、宝箱がまだ存在しているだろうか、確かめ

たい気持ちになっていた。

〈喜劇カッレを下ってみれば　そこはお空の別世界〉

地図の中身を確かめると、箱に戻し、ゆっくりと蓋を閉じた。

三人は、その小さな宝箱を、少しの間、感慨深く眺めていた。

「これで最後ね」

「そのはずです」

「そうだね」

灯里は、その箱をそっと元の場所に戻した。

第35話

その石畳の続く細いカッレを進んでいた。

灯里たち三人は、なんとなく霧囲気にひたりつつ、歩き続けていた。

「ところでさあ、こんな感じで良かったの？」

「確か、扉を見つけたはずですけど」

「そんな感じだったよねえー」

「誰もちやんとしたこと、覚えてないってゆうの？」

「藍華先輩こそ、どうなんですか？」

「私はさあ、ほら、引率というか」

「なんなんですか、それ」

灯里が抱えていたアリア社長が、何か主張し始めた。

「ばいばいばいばーい！」

「アリア社長、どうしたんですか？」

「何かわかつたんじゃないの？」

「アリア社長は、そういう勘の鋭いところ、ありましたよね！」

「そんなのあった？」

アリア社長は灯里の腕から飛び降りた。

「おっ！飛んだ！」

ドタッ

「落ちたと言った方が正しいかもしれません」

「ほんとに」

「大丈夫ですかあ〜？アリア社長〜！」

だがアリア社長は、そこから一目散に走りだした。

「やっぱり何かわかつたんじゃないの？」

しかし、すぐに坂道を転がり始めた。

ゴロゴロゴロゴロ

「転がってるようにしか見えませんが」

「確かに」

「アリア社長〜！ほんとに大丈夫ですかあ〜！」

勢いよくそのまま転がり続けるアリア社長。

「それにしてもよく転がるわね」

「やはり、もちもちポンポンのせいでしょうか」

「アリア社長お〜〜！」

ピタッ

「あつ、止まった」

アリア社長は、ムックと起き上がると、遠く離れた三人にジェスチャーでアピールしていた。

「なんか、こちらに向かつてアピってます」

「アピってるって、なにそれ？今時の若い子みたいに」

「私は若いですよ。少なくとも先輩方にくらべたら」

「ちよつと！何よ、それ！」

「事実を言つたままでですが」

「アリア社長が何か見つけてくれたんだよ！」

三人は駆け足でアリア社長のところへ向かった。

「ほんとだ！」

「この扉だったのですね」

「アリア社長〜！ありがとうございます〜！お手柄ですう〜！」

「ば〜いば〜い！」

アリア社長はその扉に手をかけ、格好をつけてもたれかかった。すると、そのまま扉が開いていった。

ぎい〜

「ぶ〜い〜にゆ〜い〜」

「アリア社長お〜！」

アリア社長はそのまま階段を転がり落ちていった。

灯里は、アリア社長の後を追って階段を駆け降りた。

「ちよつと！灯里い〜！」

藍華も走りだした。

「せ、先輩方！」

アリスもその後を追った。

「ぶぶ〜いにゆ〜ぶぶ〜いにゆ〜」

アリア社長は順調に階段を転がり落ちていた。

「アリア社長おー！大丈夫ですかあー！」

「ちよつと灯里いー！待ってよー！」

「なんで走るんですかあー！危ないですよー」

三人は、転がり落ちるアリア社長を追って、暗い階段をかけおりていった。

途中とところどころから差し込む、外からのほのかな明かりが頼りだった。

灯里は振り返って藍華の手を、藍華は必死について来るアリスと手をつないだ。

すると、少しずつ、前方に光が差し込んでくるのが見えてきた。

「あれ、出口じゃない？」

アリア社長は、そのまま開きかけの扉に勢いよくぶつかかった。

「ぶぶぶぶぶいーいー！」

その勢いで扉が開いた。

そこを走り抜けた三人は、明るい日射し下に飛び出した。

眩しさに目を細める灯里、藍華、アリス。

次の瞬間、大きく広がるネオ・ヴェネツィアの街並みが目に飛び込んできた。

眼下に広がる景色を前に、三人は、ただ茫然と立ち尽くすしかなかった。

「この景色」

「この景色ですね」

「うん」

灯里はそれ以上言葉が出てこなかった。

確かに見たことのある景色。

でも灯里には、それ以上に心に響くものがあつた。

「灯里、大丈夫？」

「うん。なんか、感動しちゃった」

手をつないだまま、三人は目の前に広がる景色に見とれていた。

だが、アリスがふと振り返った。

「あつ、ああ、あああ〜」

「ちよつと、後輩ちゃん！なに変な声出してんの？」

「せ、先輩方！」

「どうしたの、アリスちゃん？」

「見てください！」

アリスに言われて、灯里と藍華はその場で振り返った。

「えっ、どういうこと？」

「ない」

振り返った壁には、あるはずの文字が消えてなくなっていた。

「ちよつと！あの〈GOAL!〉の文字はどこ？」

「消えています。他の文字も全部！」

「どうしてなのぉー」

愕然とした顔で三人は、その壁を見上げていた。

「もしかして、まだ宝箱の続きがあるとか？」

藍華は辺りをキョロキョロ見回した。

それを見て灯里とアリスも探し始めた。

「ありません」

「ないねえー、なんにも」

「じゃあ、ゴールは？私たちのお宝はどこなの？」

その時、近くの茂みがガサガサ音を立てて揺れ始めた。

「うわあー！なんか出たあー」

「何が出たんじゃ？」

おじいさんがひとり、出てきた。

第36話

「さつきからそこで何を騒いでおるのじゃ？」

「お、おじいさんこそ、そこで何してるんですか？」

灯里、藍華、アリスの三人は、茂みから姿を現したその老人を前に、思わず後退りしていた。

「わしはこの管理を任されておるのじゃよ」

「そ、そうなんですか」

三人は揃って、大きなため息をついた。

「あんたらはここで何をしておるのじゃ？」

「私たちはですね、宝物の在りかを探して、ここまでたどり着いたというか」

「宝物？」

その老人は少し疑いの眼差しで三人を見た。

「あわわわ！私たち、別に怪しい者じゃないんですう」

灯里はあわてて疑いを晴らそうとした。

「ですから、ここに書いてあったことを目指してですね、ここまでやって来たわけです」

アリスが冷静に灯里のあとに続いた。

「書いてあった・・・ああ、あれかあ！」

「あれです！」

「なんか薄汚れた文字でなんか落書きしておったのう」

「薄汚れた」

「落書き」

藍華とアリスは、その老人の言葉を啞然と繰り返した。

「それでその書いていたものはどうなったんですか？」

灯里は真剣な眼差しでたずねた。

「消した」

「ええー！」

「消したんですか、おじいさん！」

「ああ、消した」

「なんでですか？」

「なんでって、落書きは普通消すもんじゃろう？」

「はあく」

「確かにそう言われればそうですが・・・」

「ちなみにいつ頃ですか？」

「きのうじゃ」

「き、きのう？」

「なんてタイミングが悪いの、私たち」

三人はすっかりうなだれてしまった。

「私たちの今日一日って、なんだったの？」

「あれを見ないと終われません」

「ほんとそうだねえ」

「そんなに大事なもんじゃったのか？」

「まあ、ある意味、私たちにとってはですが」

「いえ、先輩？それだけではありません」

「なに？どういうこと？」

「今日まで続いてきた宝探しに関わった、多くの人たちにとってもですー」

「アリスちゃん」

アリスの真剣な眼差しに、灯里はウルウルしていた。

「そんな大事なもんじゃとは、気づかんかったのおー」

そう言っておじいさんは、また茂みの中に消えていった。

「あ、あの、おじいさん？いずこへ？」

三人はその光景を、ポカンと口を開けて見ていた。

だがすぐに、その茂みから、おじいさんが戻ってきた。

「ほれ」

「はひっ」

「ぬな？」

「おおー」

おじいさんは、両手にいくつもの塗料の入った缶を持ってくると、三人の前に置いた。

「ぶいにゆーい！」

「あつ、アリア社長、復活しました」

アリア社長が、その色とりどりの塗料の缶に、興味津々で顔を突っ込んでいた。

「アリア社長？顔にペンキが着いちやいますよ！」

「ぶいにゆーい？」

アリア社長の顔に丸いペンキの後が着いた。

「あの一、これはいったいどういうことですか？」

アリスは冷静にたずねた。

「ペンキ屋が今度取りに来るって言って置いて帰ったんじや。実際来るかどうかわからんがな」

「えつと、つまり・・・」

「好きにすりやええ」

三人は一斉にそのおじいさんの、しわくちゃな顔を見た。

「好きに」

「すれば」

「ええと」

「ぶい？」

沈黙が流れた。

「本当ですか？」

「ああ、本当じゃ。男に二言はない！」

「おじいさん、カツコいいです！」

「そうか？」

その老人は高らかに笑い声をあげた。

第37話

「Welcome! っってどうですか?」

「ええ〜! 変えちゃうのお〜?」

「その心は?」

「ようこそ! 到着おめでとう! 的な意味なんです」

「う〜ん、どうかしらねえ。なんかもうひとつ、ピンとこないような・・・」

「じゃあ、藍華先輩は、どういのがいいと思うのですか?」

「そうねえ。へこんなん出ましたけど〜は?」

「却下です」

「はやっ!」

「ねえねえ、変えちゃうの? 前のままでいいんじゃないの?」

「何言ってるの、灯里? せっかくのチャンスなのよ? ここは私たちが、ゴールを祝福しての、なんかいい言葉を考えれば、記念に残るわけですよ!」

「藍華先輩? 今自分でゴールって言いましたよ」

「そういうことじゃないの!」

三人がああだこうだと言っている間に、管理をしているという老人は、いつの間にか用意した椅子に座って、お茶をすすっていた。

「日が暮れるまでには終わるよう頼んだぞおー」

「すみませーん」

灯里たちは、申し訳なさそうに頭をさげた。

「じゃあどうする?」

「だから、私はそのままでもいいと思う」

「そうですね。いまさら変えるっていうのも、どうかと思いますし」

藍華はふたりの顔を交互に見比べると、あきらめたようにため息をついた。

「そうか。じゃあどうする?」

「うん!」

「右に同じです!」

三人は、壁を見上げながら、どんな感じに仕上げるかを相談し始めた。

少しして、灯里がその老人のそばにやって来た。

「あのー、管理人さん？」

「なんじゃ？」

「ちよつと高いところが大変そうなんですけど」

灯里の申し訳なさそうな様子を見て、その老人は、また茂みの中に消えていった。

「はあく」

「ちよつと灯里い？おじいさん、また消えていったじゃない？」

「あの茂みの奥、でつかい謎です」

三人は、恐る恐るその茂みに近づいていった。

すると、その横をすり抜けて、アリア社長がその茂みに突進していった。

「ばあばーい！」

「アリア社長おー！」

「ぶい？」

アリア社長は、お尻がつつかえて途中であえなく失速してしまつた。

「威勢がいいわりには、結局こういうことよね」

藍華が冷めた目で、そのまん丸なお尻を見つめていた。

しかしアリア社長は、お尻を一生懸命左右に振って、なんとか茂みに中に入つていった。

「入っちゃいました」

「そうね」

「大丈夫ですかアリア社長〜！」

「でもさあ、考えたらこん中つて、いったいどうなってるの？」

「なんか不思議な入り口があるとか」

「ええーアリスちゃん！なにそれ〜」

「またそんな話になると食いついてくるんだから、あんたは」

「例えばですよ？異世界への入り口があるとか」

「そうなのおー?」

「でもさあ、ああいう話は、大体はこっちからあつちに転生しちゃうもんじゃないの?」

「まあ、大概はそうですけど」

「じゃあ、アリア社長は、その異世界に行っちゃったってこと?」

「あのさあ、灯里?今、例えばの話って・・・」

「どうするの?」

「いや、あのね、例えばって」

「大丈夫だと思います」

「なんでえ?」

「アリア社長なら、きつとギルドの綺麗なお姉さんと親しくなって、なんとかやってるんじゃないかと」

「そうなの?」

「以外とモテモテかもです」

「アリア社長くさすがですう」

「さすがに、冒険者は無理ですけどね」

「あ、あのね、あんたたち・・・」

灯里は、何か意を決したかのように、緊張みなぎる表情になった。

「じゃあ、わたし、行ってくる!」

「い、行くってどこに行くつもりなの?」

「異世界に行って、アリア社長を連れ戻してくる!」

「後輩ちゃん、どう責任とるつもり?」

「わ、わたしですか?」

「だってそうでしょ?やたらと張り切っちゃってるじゃない!」

バサッ

「灯里先輩、首を突っ込んでます」

「ぬ、ぬな?」

灯里は茂みに首をつっこんだまま、身動きひとつしなくなった。

「どうしたの?」

「なんか不気味な格好です」

バサッ

灯里は、茂みに突っ込んでいた頭を元に戻した。
「どうなってた？」

「なんか、普通にドアがあった」

藍華はそれを聞いてダルそうにため息をついた。

「はあく。そんなことだろうと思っただけだね」

すると、ドアが開く音がした。

「あつ、誰か出てきます」

「誰かって、大体決まってると思うけど」

茂みから、ポコンとアリア社長が顔を出した。

「ぶいぶい〜」

「お帰りなさい！アリア社長〜！無事だったんですね〜」

「あんたたち、南極でも行つてみたいな感じ出してんだけど」

アリア社長に続いて、茂みからニヨキつと梯子の先端が顔を出した。

すると、脇に梯子を抱えた管理人の老人が姿を現した。

地面につきそうな後ろを、アリア社長が懸命に支えている。

「ぱーぱい！ぱーぱい！」

「さあ、これを使え。これなら届くじやろて」

三人は、その場で梯子を受けとると、壁の前まで協力して運んでいった。

「ぶいにゆ〜」

アリア社長は、大きなため息と同時に、その場に大の字になって寝転んだ。

「お疲れ様です、アリア社長。ギルドのお姉さんはどうでしたか？」

「ぶい？」

「灯里？まだそんなこと言ってるの？あんた、ラノベ作家にでもなつたらっ？」

「悪くないかもです」

「はいはい。とつとと始めるわよー！」

「はーい！」

「でっかいコメディです」

第38話

GOAL!

その壁に大きく描かれた文字は、以前あったときとは違い、色とりどりのカラフルなものへと変わっていた。

大胆に大きく、だが、どこかしら女の子らしい、かわいらしい仕上がりになっていた。

「灯里いー！もつと右いー！後輩ちゃん！そこもうちよつと大胆に！」

梯子を交互に登り、ああだこうだと言い合いながら、三人はなんとか描き上げた。

その下は、アリスが覚えていると言うことで、彼女が一気に描き上げることになった。

Now you get a treasure in your heart.

「結構いいんじゃない？」

「上手くいきましたね」

「今、あなたの心に宝物が刻まれました」

灯里は、その言葉をポツリとつぶやいた。

三人は、ほっぺや額にペンキの後がついた顔で、誇らしげにその壁を見上げた。

「でもアリスちゃん、よく覚えてたねえー」

「まあ、それなりに」

「あんた、まさか、一人でこつそり来てたんじゃないでしょうねえ？」

「そんなこと、してません！」

充実感に浸っていた三人は、しばらくそこから離れられそうになかった。

「でもよかったね。これで、またちゃんとゴールにたどり着けるね」

「そうねえ。でもこの風景をみれば、わかるんじゃない？ここがゴールだって」

「藍華先輩、結構メルヘンですね」

「なっ、メルヘンって何よ!」

椅子の上ですっかり眠り込んでいた管理人の老人を起こさないように、三人はこっそりと茂みの向こうのドアの中に、ペンキの缶とはけ、そして梯子を戻した。

途中、梯子が茂みに引つ掛かったときは、さすがに起こしてしまつたかと思つたが、なんとかうまく切り抜けた。

「なんか、普通の部屋だったねえー」

「あんたはいつたい、何を期待してたの?」

「異世界への入り口ですよね」

「アリスちゃん?その辺のところをもうちよつと詳しく教えてくれないう?」

「ぶいにゆーい?」

「そんなの、ないの!」

「ちよつと藍華先輩!おじいさんが起きますよ!」

「ぬな!」

三人は足音を立てないように、ゆっくりと元来た階段を戻ろうとした。

「もう満足か?」

「はひっ!」

老人はその文字を、壁を見上げながらじつくりと眺めていた。

「これはいつまで残しておけばいいのじゃ?」

灯里は、すまなさそうに上目遣いで答えた。

「できれば、ずっと・・・」

その老人は、三人が描いた文字を見上げながら言った。

「わかった。ずっとじゃな!」

三人は驚いて老人の顔を見た。

「はあー」

「いいんですか?」

「でっかい男気です」

老人はその場で、大きく足を広げ、腰に両手を当て、高らかに笑い声を上げた。

灯里、藍華、アリスは、帰り道を急いだ。

夕日に染まるネオ・ヴェネツィアの街は、オレンジ色一色に染まっていた。

駆けて行く子供たち、どこからか漂う夕げの匂い、洗濯物を急いで取り込むベランダの女性。そして、そして……

三人は、サン・マルコ広場を抜けて行こうと声を掛け合った。

大鐘楼の大きな影が広場に横たわっている。

オープンカフェの片付けに追われている店員たちのそばで、それは別に、いくつかの影が見えた。

大柄の男性と三人の女性。

ひとりは間違いなくウンディーネの姿をしている。

影となつている姿たちが、灯里たちに気がついて、合図を送っていた。

先頭を歩いていた藍華が、そこへ近づくとつれ、その姿に驚いていた。

「なんでこんなところに……しかも、三人で」

後ろにいた灯里、アリスも気がついた。

「アリスアさん！それに晃さん！」

「どうしてアテナ先輩まで……」

三人は、驚きのあまり、その場で立ち尽くしていた。

「あらあら、三人お揃いでどこへ行ってたの？」

「ああそうか。今日がその日だったのか」

「ええー！晃ちゃん、何か知ってるのおー？」

小脇に書類を抱えたアリスア、いつものユニフォーム姿の晃、改まったようにフォーマルな出で立ちのアテナ。

そしてそのそばには、カフェ・フローリアンの店長が立っていた。

「でもどうしたの？みんなの顔、それペンキ？」

「なんだなんだ？いったい何があったんだ？」

「なんか、みんな子供みたい。かわいい！」

アリスアたちは灯里たちの姿をみて、それぞれに感想を口にした。

「ああ、これはですね、宝探しをしていたらこんなことになりました
て・・・」

「なに？宝探しって」

「見つかりましたかな？」

アリシアの横でカフェ・フローリアンの店長が灯里にたずねた。

「はい！ネオ・ヴェネツィアには、まだまだこんなにも幸せの宝物があ
るんだってわかりました！」

「そうですか。それはよかったです」

「あらあらうふふ。是非聞かせてほしいわね」

「恥ずかしいセリフ・・・」

そのそばで藍華が、突っ込みかけていた。

「ん？藍華、どうした？何かあるのか？」

「いえ。特にはないような、あるような・・・」

「なんだ。煮え切らないやつだなあ」

逆に晁に突っ込まれて、藍華はタジタジになっていた。

「アテナ先輩？今日はおめかしさんですけど」

アリスは、さつきから気になっていたアテナのその姿のことをたず
ねた。

「ああ、これ？今日はねえ、アリシアちゃんと晁ちゃんとデートだつた
の！」

「ええー！」

灯里たち三人は、一斉に声をあげた。

「もう、アテナちゃんたら。みんな驚いてるわよ」

「違うんですか？」

「違うわよ」

「アテナ先輩？なんなんですか、それ」

「今日はね、みんなで久し振りにお茶しに来たの！」

「はあ？」

「アテナさん、うそバレバレのようです」

藍華がすかさず鋭いツツコミを入れた。

「ええくバレちやつてるの〜？」

「いったいなんの時間だ、これは？」

今度は、耐えかねた晃がツツコんだ。

「楽しい時間よねえー、アリスちゃん！」

「本当のところ、なんのご用だったんですか？」

「ええー、もう終わりなの？つままない！」

「実はね、今日はゴンドラ協会の会合があったの。それを、ここ、カフェ・フローリアンをお借りして行った、ということなんです」

「そうだったんですか。でも、晃さんはわかりますが、なんでアテナさんまでいるんですか？」

「今日の議題はへ今後の水先案内業界についてだったのね。各方面から意見を聞いてみようとなつて、現在ウンディーネの中で、牽引者として頑張ってもらっている晃ちゃんと、この業界の経験者で、エンターテイメントの立場からも意見をということであテナちゃんにも来てもらったというわけなの」

「それでお三人さんが集結したということだったんですね」

「だからアテナ先輩、そんな装いだったわけだ」

「ちよつと見直した？」

「服装だけは」

「ええくなんか別の言い方ないの？」

「なんて言えばいいんですか？」

「だからあ、今日のアテナ先輩って素敵ですね、とか」

「まあ、普段とは違って、いい感じだとは思いますが」

「ええー！アリスちゃん！」

「そろそろ帰るけど、いいか？」

「ちよつと晃ちゃん！いいところなんだから、水をささないですよ」

「藍華、来月の会合は各店から代表者が出席することになるそうだ。お前も支店長として出席だからな」

「はい。あつ、そうなんですか？」

「忙しいのにごめんなさいね。そういうことだから、お願いします」

「それはもう喜んで！アリスアさんにそんなふうに言われちゃあ、断る理由なんてあるわけないじゃないですか！」

藍華は笑顔満面で応えた。

「だから、灯里ちゃんもね」

「はい、アリシアさん！」

「あらあら。元気のいいお返事ね」

「お返事ねって、子供じゃあるまいし……」

「ん？藍華ちゃん？どうかした？」

「い、いえ、なんでもありません、アリシアさん！」

藍華は直立不動になっていた。

「でも、灯里ちゃん？なんかスツキリしたような顔に見えるけど、何かいいことあった？」

「私ですか？」

灯里はアリシアにそう言われて驚いていた。

「うん。なんかとつてもすがすがしい顔してる」

「ええー！私はいつも通りだと思いますが……」

「もしかしたら、あれですかね」

藍華が間に入ってきた。

「あれって何？」

「そうかもですね」

アリスも藍華に続いた

二人からそう言われて、灯里はキョトンとしていた。

「実は今日一日、息抜きの小旅行に行ってきたんです」

「そうだったの」

夕日に照らされた藍華の顔を、アリシアはやさしい笑みをたたえて見つめた。

「もうこの先、以前みたいに一緒にどこかに出かけるなんて出来ないだろうなあって思ってた。だから、私から誘ったんです」

「それでだったのね」

「はい。でも最初はなんにも計画なんてなくて、どうしようって言ってたんですけど。ちょっとしたきっかけがあって、昔のことを思い出したんです。それでなんですけど……」

「それでその格好？」

灯里、藍華、アリスは、先輩たちから改めてマジマジと見られていた。

「小旅行をするとそんなふうになるのか、お前たちは？」

晃があきれたように言った。

「実はこれにはちよつとした訳がありました」

藍華は頭をかきながら、照れ臭そうに笑った。

「その宝探しが理由と申しましょうか・・・」

灯里も照れ臭そうにポツリとつぶやいた。

「もしかして、マリア像の？」

「えっ、アリスアさん！知ってるんですか？」

灯里たち三人は、驚いて思わずアリスアの顔を見つめた。

「何？アリスアちゃん！知ってるの？教えて教えて〜」

その反応にアテナが悔しそうに割って入ってきた。

「それはね、うーん・・・ナイショということにしておくわ♡」

「ええ〜なんで〜！アリスちゃんたちも知ってるんでしょ〜？ズルい

〜」

「アテナ先輩！駄々っ子が過ぎます！」

「もう〜ケチなんだからあ〜」

「い、いや、あの、いい大人がケチって」

アテナとアリスの会話の横で、藍華があきれて呟いていた。

「明日もあるからもう帰るけど。いいな、アリスア？」

「今日はありがとう、晃ちゃん」

「じゃあ、また来月」

晃は片手をあげながら、背中を向け、歩きだした。

「ええ〜もう帰るの〜？」

「アテナちゃんもありがとう」

「いいえ、どういたしまして。アリスアちゃん、それからみんなも、またね」

アテナはさっさと行ってしまふ晃の後を、急いで追いかけていった。

「じゃあ、私もこれで失礼します」

アテナに続いて、藍華もアリシアに挨拶して帰ろうとした。

「藍華ちゃん」

アリシアは、藍華の少し後ろで何か話している灯里とアリスを横目に、藍華を呼び止めた。

「なんですか、アリシアさん？」

「今日はありがとう。灯里ちゃんを誘ってくれて」

「いえ、そんな、アリシアさんに言っていたただくようなことではないんです。ホントに息抜きがしたかったです」

「でも聞いたわ、晃ちゃんから。わざわざ休暇を取って行こうとしたって。支店が大変なのに」

「まあ、あれです。そうでもしないと、休めるきっかけがないですから。いいタイミングだったんです」

藍華のさっぱりとした明るい表情に、アリシアは救われた思いでした。

「藍華ちゃん、本当にありがとう」

藍華は、照れてしまつて、デレデレの顔になっていた。

「アリシアさーん、なんの話してるんですかあー？」

二人の様子を見て、灯里とアリスがやって来た。

「灯里？あんたがいつもの調子で、当たり前のように鳩としゃべってたって、アリシアさんに報告してたの！」

「ええ〜！」

「それは確かにそうでした。クルッポクルッポって」

「アリスちゃんまで〜」

「これって、もしかしてアリシアさん直伝の得意技なんかですか？」

「それともARIAカンパニーの伝統芸ですか？」

「アリスちゃん？そんなの、ARIAカンパニーにあったなんて話、聞いたことないわ」

「アリシアさーん、その言い方、なんかショックですう〜」

「あらあらうふふ」

第39話

灯里は、ARIAカンパニーの一階のテーブルでPCに向かっていった。

「アリア社長？」

「ふい？」

「新入社員募集って、どこに出せばいいんでしょうか？」

「ふいにゆ〜」

アリア社長は、灯里の問い掛けに、腕を組んで首をかしげた。

「やっぱりこういうときって、ゴンドラ協会とかなんでしょうか？」

灯里は、ポカーンと天井を見上げていた。

「ちゃんとアリシアさんに聞いとけばよかったですね」

「ふいにゆい」

「ふう〜」

ため息をつくくと、頬杖をついて正面の壁をぼんやりと見つめた。

灯里は、ふと藍華が言った言葉を思い出していた。

「灯里のまわりで起きたいろんなことが、灯里を中心に回り始めてる」
藍華に言われた時はピンときていなかったその言葉が、様々な人との出会いを通じて、その意味をわかりかけていた。

灯里の周りでは、出会いの数だけ、いろんな出来事が生まれていた。
それは、このネオ・ヴェネツィアで過ごす日々そのものだった。

そしてそれは、みんなも同じはずだった。

アリシア、晁、アテナ、藍華、アリス。

そして灯里自身も。

その事をわかり始めたとき、進むことをためらっている自分に気づかされた。

みんなも同じように進んで来たはず。

6人で再会した、あのサン・マルコ広場でのみんなの笑顔を見たとき、灯里は自然と勇気が湧いてくるのを感じていた。

ひとりじゃない。いつも一緒にいるから。

その日、朝目覚めて外を見たとき、朝日に照らされた海がとてもき

れいで、それはいつもと変わらないはずなのに、とてもすがすがしい気分だった。

それはまるで、アクアの海に背中を押されたかのように、心の中にわき上がった。いた。

「よし。決めた」

灯里は、いつものように手早く掃除をすませると、アリア社長と食事をし、その日のスケジュールを確認した。

そして、朝起きたときの気持ちをそのままに、PCをテーブルに用意した。

「えっと・・・」

だが灯里は、ポカンとPCを見つめていた。

「そう言えば、私って、何を見て応募したんだっけ？」

その時、メールの到着を知らせる音が鳴った。

「誰だろう・・・」

灯里さん

お元気ですか。

「アイちゃんからだ」

灯里さんのことだから、私になんにも言わずに、ARIAカンパニーの新人募集を出そうとしてるんじゃないですか？

「はひっ！なんでわかったのおく？」

多分そうじゃないかと思ってメールしました。

私の方は、お父さんやお母さんにちゃんと話をしています。

まだ、承諾をもらってはいませんが・・・

でも私の決心は揺らぐことありません。

すでに決定事項です！

ですので、その募集は却下ということにしておいてください。
お願いします。

それから、ちよつとした贈り物を送りました。
とりあえず受け取っておいて下さい。

「贈り物って、なんだろう」

その時、ノックと一緒にドアの外で呼び掛ける声があった。

「はーい。少々お待ちくださいーいー！」

ドアを開けると、段ボールを抱えた配達員が立っていた。

「お届け物です。ARIAカンパニーの水無灯里さんでよろしいですか？」

「はい、そうですー！」

灯里はとりあえず、部屋の中に置くように伝えた。

「えつと、サインですよね」

「まだあります」

「あつ、そうなんですか」

配達員は段ボールをもうひとつ、中へ運んだ。

「ご苦勞様です。それじゃあサイン……」

「まだあります」

「はひっ！」

もうひとつ、段ボールが持ち込まれた。

「あのく、まだあるとか……」

「これで最後です」

「はあ」

灯里は積み上げられた段ボールを、ぼおーと眺めていた。

「あの、サインを」

「は、はい！」

配達員が去ったあと、段ボールの差出人を確認した。

「愛野アイ・・・アイちゃんだー！」

その時、またメールの音が鳴った。

追伸

とりあえず、そちらへ行った時のことを考えて、当面必要そうなものを先に送りました。

よろしくお願いします。

アイより

「アイちゃん？これって、贈り物って言うの？」

しばらくの間、1階の片隅に、その段ボールは積み上げられていた。ARRIAカンパニーにやって来た者たちは、それぞれに疑問を口にした。

「あのさあ、灯里？引っ越してもするの？」

藍華は眉間にシワを寄せて聞いた。

「余った服をオークションにでも出すつもりなんですか？」

アリスは、なんか良からぬ物でも見るように、その段ボールを見てたずねてきた。

「灯里ちゃん？燃えないごみは、第一と第三の水曜日よ」

アリスは、やさしい笑顔だったが、触れてはいけないことを、触れないようにしているような素振りだった。

「アリスアさーん、わたし恥ずかしいこと、なんにもありませんからあゝゝ！」

そんなことが続いたことから、灯里は段ボールを2階へ置いておくことにした。

「はへえー。疲れましたあ、アリア社長〜」

「ふいふいー」

「アリア社長も少し手伝ってくれましたもんねえー」

「ばいにゅーい！」

段ボールを持ち上げたアリア社長は、階段の三段目で、汗をダラダラかいてへたりこんでいた。

しかし、そこはアリア社長。

灯里の言葉に、自慢げに汗をかく仕草で応えていたのだった。

灯里は、アイのメールを受けて、新入社員の募集を出すことを一旦保留ということにしていた。

「灯里ちゃんがそれでいいなら構わないわよ」

アリシアからも理解を得られたことで、そうすることで落ち着いていた。

灯里自信、これまでであった迷いが吹っ切れて、気持ちを切り替えることができ、これまで以上に仕事に打ち込めるようになっていた。

あとはその日を迎えるまでの時間を過ごすだけだった。

「それって、なんかあるの？」

「うーん。特にはないような・・・」

「そうでしょうね。灯里？あんたもだけど、このARIAカンパニーに、なんかいるかって言われたら、いまさらだけど・・・」

「あつ、でも、あるよ！」

「なにがあるの？」

「アリア社長の食べ物の好みとか、オムレツの固さはどれくらいがいいとか」

「あんたが普段から気にしてることで、そういうことだったんだねえ〜」

灯里は、カウンターの外から頬杖をついて眺めている藍華を見て、照れくさそうに笑っていた。

第40話

それからしばらくの時間が流れた。

いつものように、灯里は、気持ちのいい朝を迎えていた。

シャッターを開け、外の新鮮な空気を店内に入れた。

「ARIAカンパニーにお届けものなのだからー!」

風追配達人のウツデイーが、ARIAカンパニーの上空から降りてきた。

「ウツデイーさん!おはようございます!」

「灯里ちゃん、おはよーなのだから!」

「いつもご苦勞様です!」

「今日は特別急貨便なのだからー!」

「特別・・・ですかあ?」

「そうなのだから」

「それってなんですか?」

「アクアにしか咲かない花、テラ・フィオーレが手に入ったのだからー!」

「それって、とっても珍しい花じゃないんですか?」

「そうなのだからー」

「でも、それをどうして届けていただいたのですか?」

「ウエルカムのプレゼントなのだから」

「ウエルカム?」

「そうなのだから。ARIAカンパニーの新人さんに、ようこそアクアへの気持ちなのだからー」

「それでわざわざ届けていただいたのですか?」

「そうなのだから」

灯里は、その小さな花束を大事そうに受け取った。

「ありがとうございます。こんなにしていたいで・・・」

「実はこの花は友好の証なのだから」

「どういうことですか?」

「テラは地球なのだから。そしてフィオーレは花なのだから。つまりこの

愛野アイは、その初々しい姿に、まぶしいくらいの笑顔を輝かせていた。

「アイちゃん、早朝練習どうだった？」

「はい！とつても気持ち良かったです！」

「ひとりで大丈夫だった？」

「はい。でも灯里さん、なんにも言わずに行ってしまったってごめんなさい」

「ううん、大丈夫。気にしなくていいよ」

「今朝目が覚めたら、なんかすごく気持ちがよくて、どうしてもじっとしてられなかったんです」

「そうなんだ。よかったね」

「はい！」

アイはそのまま店内へ入ろうとしたが、カウンターの上の花に気がついた。

「灯里さん、この花は？」

「それ、さつきウツディーさんが届けてくれたんだよ！」

「そうなんだ！」

「ARIAカンパニーの新人さんに、ようこそアクアへの気持ちだった。それと友好の証だった」

「うれしいー！ウツディーさんていい人だねえー」

「そうだねえー」

そう言いながら灯里は、カウンターに両肘をつけてその花を嬉しそうに眺めているアイの姿を、ぼんやりとした表情で眺めていた。

確かどこかで、こんな景色をみたことがあるような・・・

不思議な気持ちだった。

まるでそれは、以前からわかっていたような、当然そうなると思った。まっていたような、なぜだかわからないが、そんな気持ちだった。

「でじやびゅ？」

「ぶいにゅ？」

灯里がポツリとつぶやいた言葉に、アリア社長も続けてつぶやいていた。

「えっ、灯里さん？何か言いました？」

アイは灯里とアリア社長の様子を不思議そうに眺めていた。

「別になんでもないよ。それより、アイちゃん？お腹空いたでしょ？朝食にしよう！」

「はい！」

「ぶいにゅーい！」

ARIAカンパニーの朝は、いつものように見えて、これまでとは違っていた。

賑やかになったその光景は、笑顔に溢れ、活気に満ちていた。

テーブルについたアイの姿を、灯里は頬杖をついて、まじまじと眺めていた。

「あのく、なんでしようく」

アイは顔を赤くして、テーブルの下に隠れようとしていた。

「だから、ちよつと嬉しいだけ」

灯里も少し照れた顔で応えていた。

「前にもそんなこと、ありましたけども・・・」

アイは、顔半分だけテーブルから出していた。

「だって、嬉しいのは嬉しいんだもん。しょうがないじゃない？」

「もうく！灯里さくん！」

アイのかわいらしい抗議には応えずに、灯里は嬉しそうにその様子を眺めて続けた。

完

番外編

「お腹すいたあー」

アイは手を洗ってテーブルについた。

そして、テーブルの上の様子に思わず声をあげていた。

「灯里さん特製のオムレツだあー!」

早速食べようとオムレツにナイフを入れようとしたが、ふと手が止まった。

「アイちゃん? どうしたの?」

「実は、オムレツを見て思い出したことがありますよ……」

「なに? どんなこと?」

じつと動かないアイを見て、灯里は心配そうにたずねた。

「今朝なんです、夢を見ました」

「夢? どんな?」

「私がアリシアさんにオムレツをぐ馳走する夢、なんです……」

「アイちゃんがアリシアさんに?」

「はい、そうなんです。それですごく張り切って作ったんです」

「へえー。そうなんだあ」

「アリシアさんもオムレツが大好きだということ、とても期待してもらってたんですけど……」

「けど?」

「アリシアさん、ケチャップがダメだって言い出して」

「アリシアさんが? ケチャップ?」

灯里はお腹と口を押さえて笑いだした。

「灯里さん! 笑い事じゃないんです!」

「だって、アリシアさんがケチャップダメって、なにそれ?」

「ホントなんです。それも真剣に言うんですよ」

「それでアイちゃんはどうしたの?」

「しようがないから、スプーンで一生懸命こそいで取ったんです!」

灯里は笑いが止まらなくなってしまった。

真剣にケチャップに文句を言っているアリシアと、必死になってケ

チャップをこそいでいるアイ。

おいしいやらほほえましいやら。

「なんでそんなことになったのおー?」

「そんなの、私にもわかりません!」

アイは納得いかないといった表情だったが、オムレツを食べ始めた。

「あつ、おいしい」

「そう? 機嫌治った?」

「はい、治りました」

「よかった」

灯里はアイのにこやかな表情に思わずほほえんでいた。

だが、次の瞬間、また笑いが込み上げてきた。

「灯里さん!」

「アイちゃん、ごめんごめん」

だが、アイも灯里につられて、こらえきれずに笑いだしていた。

しばらく、オムレツどころではなくなってしまった。

「でも、アイちゃん? せっかくだから、冷めないうちに食べてね」

「はい」

そう返事をして、アイは笑いをこらえながら、切り分けたオムレツを口に入れた。

「あらあら、楽しそうね」

「アリシアさん!」

「んぐつ」

突然のアリシアの登場に、アイがのどをつまらせた。

「それにおいしそうな匂いね」

「アイちゃん、大丈夫?」

「あら、どうしたの?」

アイはコップの水をぐくりと飲み干した。

「はあ〜」

「驚かせちゃったのかしら? ごめんなさいね」

「い、いえ、大丈夫です」

「アリシアさんもいかがですか？」

「オムレツ？そうねえ。いただくようかしら！」

「じゃあ早速作りますね！」

灯里はキッチンへ入って行った。

アリシアは、アイの横に座っていつものやさしい笑顔で話しかけた。

「アイちゃん、どう？多少は慣れたかしら？」

「はい！だいぶ慣れてきたと思います・・・」

「ん？」

アリシアは、アイが返事をしながらキッチンの方を気にしていることに気がついた。

「何かあるのかしら？」

少しして、灯里がオムレツを持って戻ってきた。

「まあ、おいしそうねえ」

オムレツの上には、しっかりとケチャップがかかっていた。

「灯里さん！」

アイが大きな声を出した。

その手には、スプーンがしっかりと握られていた。

驚いているアリシアのそばで、灯里はそのアイの様子に笑いが止まらなくなってしまった。

「どうしたの？灯里ちゃん？アイちゃん？」

「だから言ったじゃないですか、灯里さん！」

「アイちゃん？だって、それ、夢なんでしょ？」

「それはそうですけど・・・」

「ねえ、ちよつと、どうかしたの？」

握りしめたスプーンを離そうとしないアイは、アリシアの前に置かれたオムレツのケチャップをじっと見つめたままだった。

その横でアリシアは、目を大きく見開いてその様子に目を奪われていた。

そして灯里は、その二人の様子に、お腹を押さえて笑いころげていた。

「そういうことだったのね」

アリシアはようやく目の前で起こっていることを理解できて、安堵の表情になっていた。

アイはぼつが悪そうに、顔を赤くして照れていた。

「灯里ちゃんは笑ってるのに、アイちゃんはすごく真剣でしょ？何が起こったのか心配しちゃったわ」

「すみません、アリシアさん」

「いいのいいの。事情さえわかれば、納得できるしね」

「でもアリシアさん・・・」

灯里は、また笑いが込み上げそうになっていた。

「灯里ちゃん？なんか、それってどうなの？」

「だって・・・」

「そうですよ、灯里さん！」

「ごめんごめん」

そう言いながら、灯里はお腹を押さえていた。

「すみません、アリシアさん。よかったら作り直してきましょうか？」

「そこまでしなくて大丈夫よ。せっかくだから、このまま頂くわ」

アリシアは、改めてそのケチャップのかかったオムレツにナイフを入れた。

すでにスプーンをテーブルの上に戻していたアイだったが、じつとアリシアの様子に目が離せないでいた。

灯里には、その様子がおかしくてどうしようもなかった。

「ん、おいしいわ。灯里ちゃん、また腕をあげたんじゃない？」

「そうですか？ありがとうございます！」

じつと見つめるアイに気づいたアリシアは、にっこりとほほえんだ。

「ね？わかった？わたし、ケチャップは大丈夫だから」

「はい、そうですね」

「だから、アイちゃん？今度アイちゃんのオムレツを食べさせてくれる？」

「私ですか？」

「ええ。アイちゃん特製のオムレツ、食べてみたいの♡」

「無理です」

「ええー！なんでえー？」

「だって灯里さん、私、自分でオムレツ、作ったことありません！」

「そうだったのぉー！」

「でもアリシアさんのためなら頑張ります！」

「あらあら、そんなに無理しなくてもいいのよ」

「いえ、そこはARIAカンパニーの一員として頑張らないと」

「そうなの？じゃあ、その時はお願いしようかしら」

「私も食べたーい！」

「そうね。その時は灯里ちゃん、お先にどうぞ」

「ええー！なんですか、それえー！」